

---

# キツネ憑きっきり！？

シュン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キツネ憑きつきり！？

### 【Nコード】

N0947B

### 【作者名】

シユン

### 【あらすじ】

いきなり学校から転校を言い渡された俺に明日はあるのか！？霊能力者達が織り成すどたばたラブコメディー！！

## 第1話 始まり始まり

~~~~東京駅前~~~~

大荷物を抱え、長めの金色の髪をポニーテールに纏めた1人の少年が佇んでいた、

「はあ〜どうなってるんだろ」

俺の名前は神楽寺<sup>カゲラジ</sup> 雄二<sup>ユウジ</sup>つい3日前入学したばかりの高校の校長&教頭に『転校して下さい!!!』と土下座で頼まれ(言っとくが悪い事はしてないぞ!!)東京にたった一人でほうり込まれた高校1年生だ。

(わけわかんねえーよなあー入学したばかりなのに転校しろなんて・・・しかもあの学校だし理由聞いても答えてくれないし)

「とりあえず高校行ってみるか」

今から行く高校は普通の高校では無く、優秀な“退魔士”を育成するために作られた特別な高校で“サクラ学園”と言う、退魔士と言うのは『世界に害をもたらす悪霊だったり妖怪だったりを退治する者』で、金は儲かるが命懸け、しかも“霊能力者”にしかかない職業だ。俺にも親父譲りの“霊力”があるらしいがいかんせん俺には才能が無く身体能力を強化するくらいしか使えない。

ちなみに俺の親父は“伝説の退魔士”と呼ばれていた、なんでも復活した“金毛白面九尾の狐”を退治したとかしないとか、まあそんなことより。

「なあゝんか嫌な予感がするんだよなあゝ気の性かな？」

この予感がまさしく大当たりだったりするが、この時の俺には知る由も無かったのだ。

## 第1話 始まり始まり（後書き）

初めて書いた物なのでダメダメかもしれませんが注意などがあったら教えて下さい。

## 第2話 逃げ道無し!!

駅を出てから2時間後

「やつと着いた〜・・・つーか門デカ!!」

凱旋門と見間違えそうなくらいデカイな・・・うん

「君が神楽寺君だね?」

「ん?えーと、どちら様?」

50歳後半くらいのバーコード頭に知り合いはいないが・・・

「あーすまんね、私はこの学校の教頭で、君を校長室まで案内するために迎えに来たんだよ」

(絵に描いたような教頭だなバーコードだし)

そのザ・教頭に案内してもらってる最中俺がここに転校になった理由を聞いてみたんだが『頼む聞かないでくれ』と、何かに怯え、震えながら頼んできた、全く訳がわからない

「ここが校長室だよ・・・生きて帰って来るんだよ」

「生きてって・・・ちよっ教頭!?!」

「スマン!!」

ガチャ!!

ゲシ!!

ボタン！！

上から

- ・教頭ドアを開ける
- ・教頭俺を部屋に蹴り入れる
- ・教頭ドアを閉める

「痛えー！」

「あゝやつと来てくれたのねえゝ」

「ん？どちらさ・・・」

嘘だ・・・嘘だろ・・・嘘だつて言ってくれ！！ありえねーって！  
！夢だ夢なんだろ！！元々いきなり学校から転校しろなんてありえないしな！！うんうん！！夢だ！！

「雄二ちゃん久しぶりいゝ会いたかったんだからあゝ」

「夢だゝゝゝ！！！！！」

「そろそろ現実逃避はやめて帰ってらっしゃい、でないと・・・」

「それでなんで私はここに転校なのでしょう？その前になんで“若菜さん”がここに？」

この人は桜井<sup>サクライ</sup> 若菜<sup>ワカナ</sup>俺の幼馴染のお祖母さんだ（見た目はありえないほど若いが）ついでに俺が“若菜さん”と呼んでいるのかは・・・聞かないで下さい・・・

「それはねえゝ私がここの校長と理事長をしていてえゝあなたに靈能を学んで欲しいからよあゝ」

「おば・・・いや若菜さん俺には才能が無いですから靈力は使いこ

なせませんって」

若菜さんも知ってるだろ？

「はあく雄二ちゃんまだ聞いて無いのね」

「何をつすか？」

「何でもないわあくとりあえず学んでみなさあくい、学費は免除だから」

「いや、俺は・・・」

「（うるうる）」

両手を組んでうるうるって

「今日からよろしくお願いします」

泣かせたら後が怖過ぎる・・・

「じゃあ職員室に行つて説明を受けてねえ」

「わかりました・・・失礼します・・・」

もう逃げられないんだね・・・

ガチャン・・・

「・・・“貴女”はまだ“あの事”話して無かったのねえ」後でお仕置きかしらねえ」

### 第3話 いざ1-Aへ！！

「まさか若菜さんが転校の原因だったとは・・・いやあの人ぐらかこんなことするのは・・・」

とりあえず職員室に行けっ たって場所がわからん。

「神楽寺君生きて帰れたんだね・・・」

「教頭・・・」

「すまない、校長に口止めされていて君にしゃべるわけにはいかなかったんだ・・・」

「・・・気にしないで下さい、教頭の気持ち・・・わかりますから」

おそらく“その髪”のわけも。

~~~~職員室前~~~~

「じゃあ私は校長に呼ばれてるから」

「・・・お世話になりました教頭」

ガッシ！と握手を交わし教頭は去って逝った・・・

「失礼しまーす」

此処は職員室もデカいんだな・・・流石若菜さん。

「お！！君が転校生の神楽寺 雄二君だな！！」

身長200オーバーので身体がガツチリした男の先生（だよな？）  
が話しかけてきた、正直めっちゃめっちゃ怖い・・・

「は、はい・・・」

「今日から君の担任になる岩野<sup>イワノ</sup> 則夫<sup>ノリオ</sup>だよろしく！！早速教室に行くぞ！！クラスの“女子共”に紹介せねば！！」

ガツハツハと豪快に笑いながら職員室を出ていく岩野先生に慌て  
て着いて行く・・・つーかなぜ女子共？男子には？

~~~~~1-A前~~~~~

教室に着くまで岩野先生と話してみても豪快ではあるが悪い先生では  
なさそうだ・・・

「此処が神楽寺の教室だ！！俺が呼んだら入って自己紹介だ！！わ  
かったな！！」

・・・追加、めっちゃ五月蠅い・・・

でも自己紹介かーなんか苦手なんだよな、やべー！！なんか緊張して  
来た！！

俺が緊張をどうにかほぐそうとするなかドカドカと教室に入ってい  
く先生・・・ちったー気を使え教師よ・・・

『喜べ女子！！泣け男子！！結構イケてる転校生だ！！それでは・・・  
入ってこいやー！！！！！！』

ちよつと待てー！ー！入りづらいわー！ー！なんか教室に入つた瞬間女子共が『なんだ微妙じゃん』とかなつたら転校初日から波瀾万丈決定だろがー！ー！それに俺はそんなにカッコイイわけじゃない！ー！つーか某プロレスラーみたいな呼び方は止めるー！ー！

『どうしたー！ー！早く入れー！ー！』

「・・・もういいや」

逃げ道無いし・・・

ガラガラー

(キヤーカッコイイ！！)  
(綺麗な髪ーいいなあー)  
(・・・渡さない・・・)  
( ( ( 殺す！！！！ ) ) )

じーーーーーーーーー。

(さ、殺気が・・・)

「は、初めまして一身上の都合で転校してきた神楽寺 雄二です、えーと今日からよろしく」  
(ニコッ)

人間初対面の時は笑顔が大事って誰か言ってたしな。

「「「「キヤーーーーー！！！！」」」」

（（男子の敵！！殺す！！））

（な、なんか殺気が増したような・・・失敗？）

注意、雄二は昔から自分に向けられる好意には全くの“鈍感”なのだ！！王道だね！！

（・・・なんか今馬鹿にされたような・・・）

#### 第4話 再会・出会いは突然に

あらずじ。

雄二は鈍感だ!!

(また馬鹿にされたような・・・)

「「カッコイイ!!」」

((絶対殺す!!))

(・・・俺、此処でやってけるかな?)

ガタン!!

(?)

「ゆ、雄二?」

「ん?・・・お!? “美佳” じゃん!! 久しぶりー元気だったか?」

コイツは若菜さんの孫、桜井<sup>サクライ</sup> 美佳<sup>ミカ</sup>俺の幼馴染でかれこれ4年ぶりの再会だな、コイツは変わんねーな。

「う、うん、元気・・・じゃなくて!! な、なんで雄二が此処にいるのよ!!」

「なんでって、若菜さんの策略・・・」

美佳は西部のガンマンより早く携帯を取り出し若菜さんに電話し始めた・・・一応授業中なんだぞ美佳・・・

「お婆ちゃん!!どういうこと!!」

(あゝ、雄ちゃんのことねえゝ、私“も”会いたかったから呼んじやったのよあゝ)

「私“も”って何!!私“も”って!!私は雄二になんか・・・」

(別に貴女が会いたがってたなんて一言も言って無いわよあゝ、そおゝ貴女も会いたかったのねえゝ)

「な!?!」

(まあゝそういうわけだからあゝ雄ちゃんと仲良くねえゝ)

プツ、ツーツーツー・・・

「ちょ!?!お婆ちゃん!!」

「ほー!!神楽寺君と桜井君は知り合いだったのか!!」  
「まあゝ幼馴染ですね」

((桜井さんは強敵ね・・・))

((我らのアイドルまで!!))

「じゃあ席は桜井の隣でいいだろ!!さっさと座れ!!」

((何言ってるの「だ」咎「り」!!))

「わ、わかりました」

「ま、まーここしか開いて無いし、しかたないわね」

（（殺気が・・・殺気が・・・））

「と、とりあえずまたよろしくな美佳」

（ニコッ）

ボツ!!

「う、うん・・・」

やっぱり久しぶりに会えてうれしいな・・・でも、なんでそんなに顔が紅くなってるんだ？

~~~~昼休み~~~~

「「っ、疲れたー」」

休み時間のたびに質問攻めに俺とそれとなぜか美佳まで疲れていた、なんでも俺と美佳の関係を詳しく聞かれたとか。

「あんたのお陰で疲れ切ったわよ」

「なんで俺のお陰なんだよ・・・」

「・・・もういい」

？全くわからん。

「「お疲れ様～」」

机に伏せていた顔を上げると全く同じ顔が2つ・・・

「助けてくれてもよかったじゃない・・・」

「だって楽しかったし」

「お、お姉ちゃんが楽しいから助けるなって・・・」

「・・・おい」

俺を置いてかないでくれー

「「「さて、お昼ご飯だし・・・」」」

「無視すんなあー!!」

「んで、このマ○カ○みたいなお2人はどなた？」

「私の友達の」

「「雪村<sup>ユキムラ</sup> 亜弥<sup>アヤ</sup>と雪村<sup>ユキムラ</sup> 摩耶<sup>マヤ</sup>だよ（です）よろしくね」

亜弥ちゃん（姉）は元気で活発、摩耶ちゃん（妹）は恥ずかしがりがりらしい、ちなみに、この2人は一卵性双生児で今まで2人を見分けられた人はいないらしい・・・まーとりあえず

「よろしく亜弥ちゃん摩耶ちゃん」  
ニコッ

ポッ

「「う、うん」」

「はー、また増えた・・・」

2人とも顔が紅いな風邪でも流行ってんのか？

## 第5話 雄二君、家を買う！？

~~~~放課後~~~~

「やっと終わったー」

「雄二ほんと寝てたじゃない・・・」

「しかたないだろ駅から直接来て疲れてたんだから」

なんとか転校初日を乗り切ったな、まー霊能の授業が無かったからよかったけど・・・明日からほとんどだしな」

「雄二（さん）美佳ー帰ろ（りましょ）ー」

亜弥ちゃん摩耶ちゃんとは昼休みの間にすっかり仲良くなれた、この2人はとても話しやすいのだ。

「ところで雄二は何処に住むの？」

「・・・あ」

そっぴー住む場所決まっていなかったな・・・

「金無いからホテルとか無理だしなー、どうしよ・・・」

「じ、じゃあさ、う、家来る？」

美佳の家か・・・じゃあ・・・

「ダメー！！絶えーっ対ダメー！！」

びく!?

「な、なんで？」

「え、えーと、だつてねー摩耶」

「う、うん、そうだよね、お姉ちゃん」

なんで亜弥ちゃん摩耶ちゃんが反対してんの？

「じゃ、じゃあ若菜さんに聞いてみるか、何とかしてくれるだろ・・・」

美佳と亜弥ちゃん摩耶ちゃんが睨み合ってる・・・仲が良いんじゃないかったか？

「あ、若菜さん？実は俺の住む場所なんですけど・・・」

（大丈夫よぉ～家は用意してあるからぁ～学校に近い一軒家でこの辺りでは1番大きな家よぉ～）

「・・・あの一軒家って？」（だからぁ～雄ちゃんの家よぉ～“三億”ぐらいだから気にいるかしらぁ～）

「さ、三億!？」

頭の中で某宝くじのしゝえむが流れてます・・・

「いただけません!！」

（貰ってくれないとおゝ私泣いちゃうかもぉ～）

「で、でもですね・・・」

（・・・ひっく、グスグス）

「すみません、有り難くいただきます・・・だからなんとかといてー  
！！」（じゃあ教頭に送らせるから校門で待っててねえ）

真っ白です・・・頭の中が真っ白です、

「ゆ、雄二？」

「さ、三億？」

「どこかのボクサーみたいに真っ白ですね・・・」

30分後何とか復活したがちょっとヤバイよな、母さんになんて言  
おうかな・・・

~~~~校門前~~~~

「遅れてすみません」

「いや、気にしないでくれ30分ぐらいいたしたことじゃないよ、  
さ、行こうか」

優しすぎますよ教頭・・・

ちなみに美佳達は『三億円が見たい』とか言っつてついてきている

~~~~15分後~~~~

家に着いたのだが、俺を含め全員が呆然としている、何故って？そ  
りゃー・・・

「『『デカ!?』』」

「綺麗な家ですねー」

そう、めっちゃめっちゃデカイ、一人暮らしにはあまりにも・・・その前に摩耶ちゃん間違っではないんだけどリアクションは合わせようね

「き、教頭・・・」

「諦めよう神楽寺君、校長が用意したんだから・・・」

「ね！ね！！雄二早く入ろ！！」

「『はーやーくー！！』」

女性方は家を見て大興奮のようだ・・・

家の中も凄い・・・家具はすべて揃っているし、高そうな食器もある・・・

「綺麗なキッチンねー（こんなにいいキッチンなら食事作りに来てあげてもいいかな・・・あ、あくまで仕方なくなんだからね！！」

「『部屋数も多い（これなら何時でも泊まりに・・・キヤーー！！』」

「教頭・・・」

「なんだい神楽寺君」

「なんか、邪念らしきものが・・・」

「気のせいだよ神楽寺君」

その後美佳達は“無事”（？）帰って行きました・・・

夕飯（引越しそば）も食べ終え、早めに就寝するために若菜さんが用意してくれた高級そうなベットの上で今日1日を振り返ってみた・・・不安です。

「明日も無事に生きられますように・・・」

とりあえず明日の事は神頼みだ・・・おやすみ・・・

## 第6話 不思議な感じ？

~~~~~AM8:00~~~~~

ピピピピピピピ！！

「うん・・・」

説明しよう！！神楽寺 雄二は朝とにかく弱いのだ！！かれこれ  
30分目覚ましは鳴り続けている！！

ピピピピピピピ！！

「フニャ~~~~」

ブチ！！

『起きろクソガキヤ~~~~！！』

目覚ましってキレルんですね・・・

「は、はい！！」

『テメーは俺がせっかく鳴っててやってんのにグースカ寝やがって  
！！』

「す、すみません！！」

『大体テメーは・・・！！』

「あの反省したのでそろそろ学校に・・・」

『うるせー！！人（？）の話しは最後まで聞け！！』  
「は、はい！！」

雄二が開放されたのは30分後のことだった、遅刻確定だ。

~~~~~2 - A~~~~~

ガラガラ

「おー！！神楽寺いきなり遅刻か！！」

（朝からテンション高いな、岩野先生は・・・）

「すみません・・・」

「よし許す！！遅刻もごまかしてやる！！さっさと席につけ！！」

（いいのかよ教師・・・）

「相変わらず朝弱いねー雄二は」

「いやそれもあるんだが・・・美佳」

「うん？」

「目覚ましって、怖いんだな・・・」

「はい？」

「いやなんでもない・・・」

「・・・というわけだから着替えて体育館にあつまれ！！以上！！」

「？美佳今日なんかあんの？」

「うん、今日は丸一日霊能授業なのよ、しかも戦闘訓練」

「・・・マジ？」

「うん♪マジ♪」

（ま、まー俺は基礎だけやればね・・・）

~~~~~体育館~~~~~

「・・・美佳？」

「なに？雄二」

「なんで俺は“結界”の中にいるのかな？」

ちなみにこの結界は他の場所に被害が及ばないようにするためのもので、体育館内至る所にある。

「訓練するためでしょ？」

「・・・俺が霊力使えないの知ってるよな？」

「当たり前でしょ」

「じゃあなんで君は薙刀を持って結界に入ってるのかな？」

「・・・さ、始めよつか雄二」

（ニコッ）

「いやいやいやいや！！」

「逝くよー！！」

「字が違ーーーうー！！」

「ハ！！」

かなり霊力のこもった薙刀が俺に迫る

「危ねー！！！」

俺はそれをぎりぎりで避ける

「！？チ！！」

「チ！！って何！？」

「ハアーーーー！！」

美佳が薙刀を連続で撃ってくる

「危ないって！！美佳ストロップ！！」

それをバックステップをしながら躲けているが・・・なんで美佳驚いてるん？

~~~~美佳視点~~~~

私は一応学校ではトップクラスの実力がある、これは昔からお婆ちゃんに鍛えられたからで結構自信が“あつた”でも・・・

「危ねー！！！」

何故霊力を使いこなせていない雄二が私が本気攻撃してないにしろ躲せるのか・・・

なんかうれしいような悔しいような複雑な気持ちが込み上げてくる・

お婆ちゃんに止められてるけど本気出しちゃおっかな・

~~~~雄二視点~~~~

「？」

美佳の攻撃を躲すたびに不思議な気分になる、体が軽くなるようなマラソン走った後の開放感みたいなの・・・どんどん美佳の動きが遅くなるような・

不意に美佳の動きが止まりニッコリしながら俺を見た

「さっすが雄二♪私の攻撃全部躲すなんて、なかなか出来ないよ♪」

「自分でもよくわからんが躲せるんだよねー、スゲーだろ」

「じゃあそろそろ本気出すね♪」

「・・・み、美佳！？ちよつと待った！！」

「待たない♪・・・逝くよ！！」

その言葉とともに美佳が薙刀の一閃を俺に放つ、それは今までとは桁違いの早さで躲せず・・・激しい衝撃とともに俺の意識をかりと

っ  
て  
い  
っ  
た。

## 第7話 バツに痺れて・・・

~~~~保健室~~~~

「知らない天井だ・・・」  
「お決まりですよね？」

(・・・えーと美佳に殴られて、駄目だ思い出せん)

「あ！雄二君起きた！！」  
「おはよう雄二ー！！」  
「ん？おはよう・・・じゃなくてなんで俺はここで寝てたんだ？」  
「えつとね・・・」

要約すると、俺は美佳の一撃をくらって気絶、美佳は我にかえって大慌て、いつの間にか来ていた若菜さんに連行されたらしい。つでそのまま俺を放置するわけにはいけないから保険委員である双子が俺を保険室まではこんだらしい。

「でもよかったねー」  
「ん？なにが？」  
「いやー美佳の“あの”一撃貰ってほとんど怪我してないし・・・」  
「普通は骨折ぐらいしてますよ・・・」

言われてみれば体はどこも痛くない・・・

「まあー運がよかったってことで」

「運って問題じゃ済まないし（ですよ）」

「おっと！忘れてた、忘れてた」

「？何を？」

「運んでくれて有り難うな」

（ニコッ）

助けて貰ったからお礼！！これ常識！！

ドキー！！

「ど、どう致しまして！！」

「どうしたんだ二人とも、顔真っ赤だぞ？」

「な、何でもないよ（です）！！それより校長（先生）が、起きたら校長室に来てって言うてたよ（ました）！！行こう（きましよう）！！」

「そ、そっかわかった」

な、なんか凄い迫力だな・・・（汗）

~~~~~校長室~~~~~

その後、亜弥ちゃん摩耶ちゃんは何とか落ち着き校長室までやってきた。

「失礼しまーす」

「いらつしゃゝい、とりあえず座つてねえゝ」

ヒック・・・ヒック・・・

「ごめなさいねえゝ家の子があゝ」

「い、いえべつに怪我してないですし・・・」

「それでもいけないのおゝ靈力使えきれてない人に本氣出すなんてえゝ」

ヒック・・・グス・・・

「ほ、本当にいいですから！！早く“開放”してあげてください！！」

双子だつて震え上がってますよ！！

「本当おゝに、反省してるのかしらあゝ」

「反省してますゝ！！ヒック、もう許してゝゝ！！ヒック」

美佳・・・顔が涙でぐちゃぐちゃ・・・

「わかつたわゝ雄二君も許してくれたみたいだしねえゝ・・・」

「」「」「ホッ」「」「」

さすがにこれはな・・・

「じゃあ仕上げねえゝ」

(ニヤッ)

そう言つて若菜さんは美佳の足を突き始めた・・・

「ニギヤ~~~~~!!?」

「「「み、美佳~~~~!!?」」」

そりゃ〜“正座”して痺れた足を突かれたらな・・・恐ろし過ぎる  
!!

「はあ〜楽しそうね〜」

(ニコツ)

「ニギヤ~~~~!!?死ぬ~~~~!!?」

((ガタガタガタ!!))

俺達三人は部屋の隅で震えながら抱き合う事しか出来なかった・・・

ちなみに美佳は俺達が来るまで(約1時間)のあいだずっと“正座”させられてたらしい・・・

俺達は絶対に若菜さんを怒らせてはならないと美佳を犠牲に学ぶ事ができた・・・有り難う美佳・・・君の“死”は無駄にはしないよ・・・

「イヤ~~~~~!!?もう許して~~~~!!?」

## 第8話 やっぱり性格!!

~~~~屋上~~~~

「ん〜いい天気だねー」

今は昼休み、天気がいいから屋上で昼食つてわけです、メンバーは俺、美佳、亜弥、摩耶、の4人だ、やっと男友達が出来たんだが、なぜか一緒に昼飯は食べたことがない、誘っても美佳達が睨むと断つてくる・・・なぜ？

「そついえば雄二」

「ん？なんだ？」

「今日暇？」

美佳が自作弁当を食べながら尋ねてきた。

「ん〜暇だぞ」

「それじゃーさ、放課後付き合わない？」

「ああ、いい・・・」

「ダメ〜〜〜!!」

な、なんで双子が断つてんの？

「な、なんで二人が答えるのよ!」

美佳も驚いてるな・・・

「デートはダメ（です）！！抜け駆け禁止！！」

抜け駆けってなに？

「で、デートじゃないわよ！！」

「じゃあなに（なんですか）！！」

なんで俺はほつとかれてるの？

「そ、それはお婆ちゃんがそろそろ雄二に“仕事”見せてあげろって言うから」

「な、なーんだ」

（（デートじゃないんだ））

「な、仕事って退魔か？」

やっと話しに入れる・・・（涙

「う、うん“一応”霊力使えるようになったみたいだし、本物見ときたいでしょ」

そうなのだ先日の美佳との戦闘（？）以来右手だけ霊力を纏えるようになったのだ！！

「・・・危なくないよな？」

流石に右手だけじゃ命は守れんからな。

「大丈夫よ簡単な仕事だってお婆ちゃん言ってたし」

「・・・若菜さんか」

なんか不安だな・・・

「じゃあ！ボク（私）達も行く（行きます）！！」

あ！亜弥にはボクと呼ばせることにしました！！

「・・・やっぱり来るのね二人とも・・・」

（せっかく雄二と二人だけだったのに！！）

「「当たり前だよ（です）！！」」

（（抜け駆け禁止！！））

「不安だなー・・・」

死なずに帰れるかな・・・

「そつえばさ、三人はどうやって戦うんだ？」

昼食も食べ終え落ち着いた頃、ふと気になったことを聞いてみた。

「私たち？」

「おう！」

「まーいいけど、ね？」

「「うん（はい）」」

ちよつとワクワクするな。

「じゃあボクからだね、ボクは昔から剣術やってるから剣を基本としてたたかうことが多いよ」「へえー」

今は持っていないがかなりの長刀らしい・・・こんな背が小さ・・・やめとこ。

「えつと、私は後衛が基本ですね」

運動苦手なんですーと照れている。

「後衛って何すんの？」

「結界を張ってみんなを守ったり、ヒーリングしたり、いろいろですな」

なるほど、術を覚えたりするのが大変らしい、俺には無理だな・・・

「最後は私ね」

「いや、美佳は薙刀だろ」

この前使って俺の意識刈り取ったし・・・

「ふふーん」違う違う、私は、その場その場で、前衛行ったり、後衛行ったりするの」いろんな道具使ったりするんだからね、まあ何でも屋みたいなもんね」

つまり美佳はオールラウンダーってわけだ。

「でも美佳は前衛ばかりだよ」

「やっぱり性格がでるのかな？」

「美佳は昔からそんなもんなー」

「うっ！みんながいじめるっ！！」

俺はどう戦うかなっ・・・って俺は元々基礎練習だけのはずじゃあ・  
・“仕事”するなんて一言も言っていないし！！ハッ！！これも若  
菜さんの策略じゃないよな！？

「ふふふうっ♪逃がさないわよっ雄ちゃん♪」

## 第9話 やる気の決意？

~~~~現場前~~~~

「「いやーいかにもって感じの屋敷だね」（ですね）」「

「そうだねー」

「・・・緊張感ねーな」

今俺達はいかにも出るぞ！！って感じの洋館の前にいる、今回の依頼は、幽霊退治、何でも建物を取り壊そうとすると危害を加えてくるとか、建築業者の人も何人かケガをしたらしい・・・

「だってさー」

「緊張のし過ぎで体が動かないなんてシャレになんないでしょ」

「お姉ちゃん達凄いです！！」

「へー・・・」

成る程、ただ気が抜けてるわけじゃないんだな・・・本当か？

「「まー嘘なんだけどね」」

「ふえ！？」

「まーそうだろうな」

とりあえず侵入です・・・

~~~~屋敷内~~~~

「おじゃましまーす」

「摩耶ちゃん言う必要ないんでないかい？」

「む！雄二君他人の家に入るんですから絶対に『おじゃまします』は必要です！！」

「そ、そうだね」

ま、摩耶ちゃん興奮し過ぎだよ、君には今までのようなキャラでいてほしいな・・・疲れるし・・・

ピシ！！

「ん？なんだいまの？」

「来たみたいねー」

と言いながらお札を構える美佳

「どんな奴かな」

と霊刀を構える亜弥ちゃん

「皆ケガしないでね」

と集中し始める摩耶ちゃん

俺もとりあえず右手に霊力を纏う

「「「来たー!!」「」」

ドカン!!

天井をぶち抜いて現れた体の透けた奴・・・

『この屋敷は俺んだー!!さっさと出てけー!!』

・・・自縛霊ってやつか？

「説得は無理そうだね」

「そうねー」

「やっぱり暢気過ぎだろー!!」

『さっさと出てけー!!』

いきなり悪霊が俺に襲い掛かってきた

「ヤバッ!」

美佳&亜弥にツッコミを入れたせいで隙が・・・!!

その時俺の前に小さい影が・・・

「《我を害すモノより 隔てよ!!》」

パシン!!

摩耶ちゃんが突き出した両手の先に青く透けた壁が現れ悪霊の攻撃を防いだ。

「雄二君!! 霊の前で隙見せちゃダメです!!」

「あ!ご、ゴメン!!」

摩耶ちゃんの指摘で我に返った、  
考えてみたら美佳も亜弥ちゃんも隙らしい隙は見られなかった気がする・・・なんか悔しい。

「まあ、雄二も除霊は初めてだしね」

「後はボク達に任せといてね」

と言いながら悪霊に向かう美佳と亜弥ちゃん。余裕を見せてもやっぱり隙はない・・・

『出て行け!!』

「「うるさい!!」」

『ギヤアアアーー!!』

美佳のお札と摩耶ちゃんの一閃で悪霊消滅・・・なんか悔しい・・・

「お疲れ様〜」

「・・・お疲れ」

「お疲れ様でした〜」

「ボクお腹空いた〜」

「よし！！帰りに夕飯食べて行こうか？」

「「賛成〜」  
です」

「〜〜自宅〜〜」

美佳達と外食（今日の報酬で美佳の奢り）を終え、今俺はベットの  
上で今日の事を考えていた・・・

（美佳達は凄かったなあー、抜けてる感じなのに隙見せなかったし・  
・それに引き換え俺は摩耶ちゃんに助けられ、美佳達の足を引ッ  
張った・・・なんか悔しい？、いや！！・・・かなり悔しい！！女  
の子に助けられ、足を引ッ張るなんて！！）

「負けねえー・・・」

俺って負けず嫌いなんだよなあー

「絶対に次は・・・よし！！明日から訓練だ！！」

そうと決まったら寝るぞ！！

~~~~桜井家~~~~

「お婆ちゃんこれでよかったの？」「ええ〜大丈夫よあ〜これで雄ちゃんもやる気になるわあ〜ウフフウ〜楽しみねえ〜そろそろ“あの人”呼ぼうかしらねえ〜」

「ゴメンね雄二・・・」

## 第10話 雄二は知らない？

〓〓〓校長室〓〓〓

今日は土曜日で学校は休みだが昨日の事を話すため若菜さんの前に座っている。

「・・・ってわけで、なんかすっごい悔しかったんですよ」

「成る程ねえ〓雄ちゃん昔から負けず嫌いだしねえ〓」

若菜さん、俺は負けず嫌いじゃあないですよ・・・多分、おそらく、めいびー・・・

「それでえ〓雄ちゃんはどうしたいのお〓」

若菜さんはニコニコしながら俺に尋ねてくる・・・分かってるくせに・・・

「・・・若菜さん俺を強くしてくれませんか？」

こつ見えても若菜さんは世界で五本の指に入る霊能力者なのだ・・・見た目では信じられないが・・・こんな凄い人はそうそういないしな・・・

「うう〓ん、他の生徒のこともあるからあ〓付きつきりて訳にはいかないけどお〓少しくらいならいいわよお〓」

「よろしくお願いしますー!!」

よかったー若菜さんが引き受けてくれてー

「それじゃあ、早速頑張りましたよ、ねえ」

「はい!!」

~~~~3時間後~~~~

「ゼエー!!ゼエー!!し、死ぬ!!」

「あらあらあ、まだ若いのにだらし無いわねえ」

ニコニコと大の字に横になっている俺を見下ろしている若菜さん、知らない人が見れば今の若菜さんの笑顔に何人の男が堕ちるか・・・

「わ、若菜さん・・・これ・・・キツツイです・・・」

今まで俺がやっていたのは霊力を纏った状態をキープすることだ・・・  
・まだ右腕までしか纏えないが・・・

「まだ10分も維持できてないのよあ、それじゃあまだまだよあ、最低でも1時間はキープしないとあ」

間延びしながらしゃべる若菜さん、すでに2時間霊力を纏ったままだ・・・しかも全身・・・

「私はあ、2日ぐらいなら余裕よあ」貴女は人でない、美佳でも2時間が限度らしいし・・・



「「あ、あれ（雄二君）どうしたの？」」

アヤマヤが指差す先に机に突っ伏しながら泣く雄二（？）・・・

「な、なんかこの前の除霊で何も出来なくて悔しかったらしくて、お婆ちゃんに鍛えてくれって頼んだみたいよ・・・」

「「エッ！！」」

そりゃー驚くわよねーお婆ちゃんの修行についてこれた人って二人しかいないほどスパルタだし・・・ちなみに修行を申し込んだ人は数知れず・・・退魔士なら知らない人はいない程なんだけど・・・

「雄二は最近この世界に入ったばかりだしねー可哀相に・・・」

「なんかどこかのボクサー張りに白くなってるね」

「お、お姉ちゃん！！なんか雄二君から魂がはみ出てます！！」

ふと見ると雄二の背中から白っぽいものが・・・はっ！！

「ゆ、雄二いー！？」

「や、ヤバイよ！？早く戻さないと！！」

「ゆ、雄二君！！そんな幸せそうな顔しないで下さあゝい！？」

その後何とか雄二を元に戻したけど、魂抜けかけるほどの修行って・・・

くくく校長室くくく

「・・・というわけだからあゝ早めにこっちに来てねえゝ雄ちゃん  
の“アレ”もそろそろ限界みたいだしゝ」

『・・・・・・・・・・』

「それじゃゝ来週ねえゝ待ってるわあゝ」

ガチャン

「やっと決心したみたいねえゝあの人も、さてとおゝ私も準備しな  
いとねえゝ」

## 第11話 ハプニング襲来！！

~~~~~教室~~~~~

「疲れたあ〜〜」

朝練（若菜さんプレゼンツ）を終え、机に突っ伏す。

若菜さんの訓練を受け初めて一週間が過ぎた・・・死にそうです・・・いや、実際三途の川をメドレーリレーはしたけど・・・でも・・・あんなの訓練じゃない！！拷問だ！！・・・失礼しました。まあ、お蔭で左腕以外は靈力を廻せるようになったけど・・・

「おはよ雄二、生きてる？」

朝の挨拶じゃないよなー

「死んでるー・・・」

美佳さん、寝かせて下さい、疲れてるんです

「雄二頑張るねー」

・・・亜弥ちゃん頑張らなきゃ死ぬんだよ

「雄二君、ヒーリングしますね♪」

ありがとう摩耶ちゃん、でも眠らせてね

「ハッハッハー！！諸君おはよう！！ん？神楽寺ー！！元気ないな  
ー！！！」

眠れないのね・・・

~~~~4時間目~~~~

「・・・となるわけです」  
ね、眠い、数学きつい、

「よってX=2・・・」

『寝ちゃダメよ雄二君!!寝たら死ぬわ!!』

ゴメンなさい数学の先生僕はもう・・・

頭の中で雪山で遭難した人の映像が流れて・・・

ゾク・・・

な、なんだいまの寒気は、一発で目が覚めた・・・でも、どうかで  
感じたことがあるような・・・

「雄二どうしたの？眠くておかしくなった？」

おかしくなっただって美佳・・・

「いや、なんか寒気がな・・・」

ゾク！！！！

ガタン！！

「ちよっ！！雄二！？」

「ど、どうしました！？神楽寺君授業中ですよー！！」

さつきより凄い寒気？いや悪寒か？

「まさか！？」

「まさかじゃありません！！早く座りなさい！！」

「ゆ、雄二？」

マズイ！！

「摩耶ちゃん！！」

「ふえ！？」

急に呼び掛けられてびっくりしてますな

「ちよっ と雄二！？」

「俺の周りに結界張って！！強力なの！！」

ブッブッブッ

「な、何ですか？」

「お願い摩耶ちゃん!!」

「は、ハイ!!」

(な、なんか雄二君凜々しいです・・・ポツ)  
『何人とも立ち入る事を禁ず!!』

ドドドドドド・・・!!

「き、来た!!」

「「「「???」」」」

ガラガラ!!

~~~~美佳視点~~~~

雄二?どうしたの?もしかしてお婆ちゃんの特訓で頭打ったの?

「摩耶ちゃん!!」

「ふえ!?!」

ま、まさか!?!この場で摩耶に告白する気!?!そんなのダメ!!絶  
対ダメ!!

「ちよつと雄二!?!」

「俺の周りに結界張って！！強力なの！！」

へ？結界？告白じゃないのね？よかったーって何で摩耶赤くなってる・・・！！

「き、来た！！」

へ？

ガラガラ！！

~~~~雄二視点~~~~

ガラガラ！！

教室に入って来るなりキョロキョロと教室を見渡す見た目“金髪”  
20代の女性・・・や、やっぱり！！

キラーン♪

目、目が光った！？

「雄ちゃ~~~~ん♪」

（ハート）

いきなり抱き着くな〜！！つか！！俺の座る席から教室の扉までの距離は約6メートルあんだぞ！！一瞬じゃねーか！！その前に結界はどうした！？

「あ〜ん雄ちゃん♪雄ちゃ~~~~ん♪会いたかった〜♪」

（ハート）

抱き着いてスリスリするなー！！

「ちょ！？や、止めろって！！か・・・！？」  
ゾク！！

またゾク！！ってゾク！！ってした！！

「ハッハッハー神楽寺ー貴様はー」

な、なんだよクラスの男子A君

「貴様は～～！！我らのアイドル（美佳）と双子天使（亜弥&摩耶）  
だけでなくそんなに綺麗なお姉様まで手を出すとは！！」  
「ちょ！！待て貴様らこいつは・・・！！」

「」「」「殺！！」「」「」

聞けや～～～！！

ゾク！！パート3 ♪

「ゆ、雄二君・・・」

お！摩耶ちゃんナイスタイミング！！

「その雄二君にスリスリしてる女の人って・・・」

「オウ！この人は・・・」

「そうなんですネ？ “彼女” なんですネ？」

ま、摩耶ちゃん？ 何でそんなに霊力出してるの？

「ち、違っ！！」

「私のピュアな心を弄んだんですね・・・」

「ま、摩耶ちゃん！！ 誤解を招く言い方しないで！！」

周りの殺気が倍増してますよ！！

「問答無用です！！ 天誅！！」

「ゲフ！！」

摩耶ちゃんの腰の入った右ストレートが俺の鳩尾にめり込み俺は闇に堕ちた・・・

ちなみに亜弥ちゃんは

「ウフフー雄二ー♪ むにゃむにゃ・・・」

寝不足なんですネ♪

## 第12話 摩耶ちゃん大暴走!?

~~~~保健室~~~~

「・・・知らないじゃなくて、見慣れた天井だ」

何度目だっけこの天井は?・・・数え切れんか

「はぁー、えつと今回は摩耶ちゃんの“天誅”だったかな?」

イヤーいいパンチだったと称賛している自分が悲しい・・・(泣)

ガラガラ

「あ!!ゆ、雄二君・・・」

ドアを開けて入って来たのは意外とハードパンチャーな摩耶ちゃんでした

「おお、摩耶ちゃんおはよう」

朝じゃないけどねーと笑いながら挨拶すると・・・

「ヒック・・・ヒック・・・」

泣いちゃいました」

・・・ええ~~~~!!??

「え!!え!?!どうした摩耶ちゃん!?お腹痛いんか!？」

何故摩耶ちゃんが泣き出したのか分からずわたたしている

「ゴメンなさ~~~~い!!」

ギュー!!

「ど、どした摩耶ちゃん？」

いきなり俺に抱き着いてきた摩耶ちゃんを受け止めたけど、ますます分けがわからんです

「ヒック・・・雄二君、グス・・・お腹あゝヒック・・・ゴメンな  
さいいゝゝグス」

・・・あ、あゝ成る程あの“天誅”を気にしてるのか

ぽんぽん

「ふえ？」

目に涙を浮かべ、上目遣いで俺を見る・・・可愛い、じゃなくて!!

「気にしなくていいって」

優しく微笑みながら頭を撫でる

「で、でも・・・」

まだ気にするかねこの子は

「美佳とか若菜さんとかに比べればこんくらい」

比べるまでもないよなあー

「だから気にしないの！！分かったか？おっけえ？」

「は、はい」

ヨシヨシと頭撫でると摩耶ちゃんは落ち着いたらしく、気持ち良さ  
そうに撫でられていた

でも考えてみると結構恥ずかしい状態なんじゃねーか？

1、摩耶ちゃん抱きつく

2、摩耶ちゃんを撫でている

3、ベットのの上（↑ここ重要！！）

・・・恥ずかし！！！！？

「ま、摩耶ちゃん、そ、そろそろ離れてみよつか？」

やんわり離れるように諭すと・・・

「嫌!!」

即答!?

「い、嫌じゃなくてね?は、恥ずかしいでしょ」

それにこんなとこ美佳や亜弥ちゃんに見られ・・・

ガラガラ

「雄二く起きてるう?・・・は?」

「摩耶あゝ泣きやんだあ?・・・へ?」

お決まり過ぎだあゝ!!!?

美佳と亜弥ちゃんは俺達を見た瞬間に固まった・・・

「・・・・・・」

う、動けん・・・

すりすり

「ふみゆく雄二くん」

その瞬間“時”は動いた

「「まあ〜やあ〜!!!!!!」」

「嫌あ〜〜!!」

一瞬でドアからベットまできて俺に抱き着いてすりすりしていた摩耶ちゃんを引きはがした

「摩耶!!何してんのよ!!ベットで!!そ、その・・・(ポツ」  
「ズルイよ摩耶!!僕だつて雄二に“なでなで”して欲しいのに!!」

二人共何言つてんの?

「嫌あ〜!!このあと潤んだ瞳で雄二君を恥ずかしそいに見上げて呟くように『ありがとう』って言つて、その私の可愛いさに雄二君は我慢出来ずに私にキスして、そのまま大人の階段を・・・キヤーキヤー!!」

「「そ、そんなのだめえ〜!!!!!!?」」

ギヤーギヤー!!

「いや〜いい天気だなあ〜・・・そういえば保健の先生で見たこと無いなあ〜なんでだろ・・・」

現実逃避いい言葉だ♪♪

## 第12話 摩耶ちゃん大暴走！？（後書き）

申し訳ありません！！受験の影響で更新が遅れていますが来月からまた更新を再会致します！！まだまだ未熟者ですがよろしくお願いします！！

### 第13話 若ボケ!?

俺達は今校長室に向かっているなんでも今回の事で話があるとか無いとか・・・

「それで、その“雄二に抱き着いた女の人”って誰？」

初めから黒い靈氣出さないで亜弥ちゃん・・・

「え、えーと美佳から聞いてないの？」

「私も知らないもんっ!」

頬を膨らませて怒らない、可愛いけどそんなキャラじゃないでしょ

「・・・美佳、本当に覚えてないんか？」

「だから、知・ら・な・い!!」

「老けた?・・・いや若返ってるから分からないんかな?まあ気にすんな」

どうせ直ぐ会えるだろうしな・・・

とりあえず不信そうにしている三人を連れて校長室に向かう

~~~~~校長室~~~~~

「ああゝ！！誰なのよゝ！！」

美佳は思い出せないのが気に入らないのか発狂し続けている

「美佳もう着いたから静かにしろ」

「気になるうゝ！！」

「美佳諦めなよ」

「そうだよお」亜弥ちゃん摩耶ちゃんはやんわり美佳を止めようと・

「でも、人の事思い出せないのってさ若ボケかな？」

「お姉ちゃん！！人が気にしてること言っちゃダメです！！」

うわゝ二人ともキツイなあゝ

「若ボケってなによ！！それに摩耶！！私が若ボケで悩んでるみたいにツツコまないでよ！！」

ギヤーギヤーギヤー！！

「・・・ハァー、先に入ってるぞ」

長くなりそうだし・・・

トントントン

ギヤー!!

「失礼します」

ギヤーギヤー!!

「あら、雄ちゃん遅かったわねえ」

「雄ちゃん遅いわよ」

ギヤーギヤー!!

「やっぱり此处にいたか・・・」

ギヤーギヤー!!

「それより雄ちゃん、廊下がうるさいわねえ」

ギヤー、あ!それ可愛い!!

「そ、そうですね、俺じゃ無理なんで・・・」

あ!雄二君の写真!!ズルイ!!

なんかさっきと違う叫びが・・・

「私が逝くわあ、ちよつと待っててねえ」

字が違うつてツッコんだらダメだろうな・・・

(うるさいわよー)

(あーお婆ちゃん・・・)

(こ、校長先生!!こんにちは!!)

(うふふうー静かにしてねえー)

(お、お婆ちゃん!!落ち着いて!!霊気出さないでえ!!)

(ま、摩耶あー)

(お、お姉ちゃん怖いよあー)

(うふふうー死なないわよあー・・・多分)

( )(キャー!!!!? )( )

ドカーン!!!!!!

「ナム」

(合掌)

「相変わらずねえー」

(笑)

くくくく30分後くくくく

ひとまず静かに（？）なつた三人は抱き合いながら震えていた

「あのくらいでえゝ回復に30分もかかるなんてえゝダメねえゝ」

「あ、あのくらいって！ー！摩耶の“壁”が無かつたら今頃病院よ！  
」！」

あの恐怖の後だけに涙声だ

「あのくらいいいゝ雄ちゃんならあゝ5分で回復するわよあゝ」

間延びした声で美佳にこたえる

「む、無理に決まってるじゃない！ー！ね、雄・・・ってなんで泣いてんのよ！？」

「いや・・・否定出来ないなあゝって」

実際回復したしさあゝ

「えっと、じゃあ、あー！この人誰よ！ー！」

「あ！雄二君に抱き着いた人！ー！」

「へ？この人が！？」

やっと気付いたか・・・

「あら？美佳ちゃん私のこと忘れちゃったのぉーショックうー」

と俺にしな垂れかかる

「「「あ！離れてー！！」」」

「イヤあゝ！！！」

「あらあらあゝ仲良しねえゝ」

止めてよ若菜さん

「はあー・・・離してよ母さん」

「「「・・・へ？」」」

「やあゝよおゝ久しぶりだもんっ！！！」

「もんっ！って」

あれ？美佳達は？

「「「・・・」」」

固まってますね、あゝあ口開けちゃって・・・

「「「えー！ー！！！！？」」」

イヤイヤ、読んでる人達は分かってるぞ

「若っ!!」

「若いですう・・・」

「お、お久しぶりです・・・」

「やつと思い出したわねえ、それと亜弥ちゃん、摩耶ちゃんね、雄ちやんの母親ね、よろしくう」

### 第13話 若水ケ！？（後書き）

やっと母親出せた、長い、文章力無くてすみません

## 第14話 爆弾発言!!

前回までのあらすじ

いろいろあつて母が来ました。

~~~~~校長室~~~~~

「んでなんで母さんが此処にいんの？」

美佳達が落ち着いたのを見計らつて、疑問に思っていたことを尋ねた。

「えー雄ちゃんに抱き着いてー」すりすりするためよー」あーしあわせー」

（すりすり）

「止める!! あ、熱い!!? 熱いつて!! 摩擦が!!? 摩擦が!!?」

「「「う~~~~」「」

なにを物欲しげに見てるのか知らないけど助けて!! へ~~~~る~~~~ぶ~~~~!!?

「ハイハイ話が進まないからそこまでねえ」

「あーん、雄ちゃん!!」

ナイスです！！若菜さん！！美佳達も親指をグツてしてますよ！！

「あー熱かったー（涙）・・・んでなんでいんの？」

あらためて問う。

「私が呼んだからよー」

母さんを椅子にした若菜さんが答えてくれた・・・

一応俺の母さんなんですが・・・

「なんでですか？」

「それはねえーこの子が雄ちゃんに“大切”な話をしてなかったからよー」

「大切な話し？」

もしかして再婚するとか？

俺の父親は実は生きてるとか？

・・・。。。

まさかなあー。

「んで、母さん“大切”な話して？」

若菜さんを退かし俺の前に来る、その顔はいつに無くしおらしく可愛いらしい・・・

「あ、あのね・・・じ、実はー・・・あのー」

チラッチラッと俺を伺う姿がまた可愛い・・・って違う!!違うぞ!!親はドキドキなんてしてないぞ!!

な、なんだ美佳達その目は?そんな目で見るな!!

・・・・・・・・。。。

違うんだああー!!

「あ、あのね!!母さん・・・ひ、人じゃないのよ」

・・・・・・・・。。?

「「「「はあ?」「」「」

「きゃー!!言っちゃった!!言っちゃった!!きゃー!!」

な、なんか興奮してるけど。

は?人じゃ無い?

どういうこと？

「え、えーと、じゃあ伯母さんは何？」

ナイス質問だ美佳助かる。

「ひどいわよー美佳ちゃん、伯母さんってー、そんなに老けてないでしょー、せめてお姉ちゃんか“タマモ”さんて呼んでくれないとー」

「「「え！？」」」

「母さん・・・確かに見た目は若いけどお姉ちゃんはいかがなものかな・・・美佳達だつてびつくりだぞ」

「えー平気よー」

「「「ち、違あ~~~~う~~~~!!」」」

び、びつくりしたー。

「な、なにが？」

「ゆ、雄二君、お母さんの名前って・・・」

「んあ？あゝと“神楽寺 玉藻”（カグラジ タマモ）変わった名前だろ・・・？」

？なんでみんなビクビクしてんの？

「おば、じゃなくて、た、タマモさん？も、もしかして、きゅ、

「九尾”ですか？」

「？九尾ってなんだっけ？」

「正解♪」

「「うそ・・・」」

美佳達停止♪

「なー九尾って何だっけ？」

全く思い出せん。

「ゆ、雄二！！九尾って言ったら“金毛白面九尾の妖狐”通称“九尾の狐”で！！かつて中国とインドを壊滅的な混乱に陥れて、平安時代に日本に流れてきた妖怪よ！！」

実に解りやすい説明ありがとう美佳、流石は秀才。

「それは表向きな歴史よ、私は何もしてない、勝手に国が滅んだのを私がやったみたいにされたのよ」

「へーでも九尾の狐ってオヤジが倒したんだよね？」

「そ、そうだよね雄二君のお父さんってそれで英雄になったんだし」

「ザツツライト！その通りだよ摩耶ちゃん。」

「それも表向きの歴史、あーその辺は後でね。アッ！あと一つだけ  
言っとくけど、雄ちゃんは真正正銘、私の産んだ“愛する”息子よ  
」

なぜ愛するを強調する？

「じゃ、じゃあ雄二は九尾と英雄の半妖なの！？」

お！亜弥ちゃんいいところに目をつけるたな・・・

あれ？

じゃあ俺も人でない？

・・・。

マジか？

## 第14話 爆弾発言!! (後書き)

やっと、やっと、受験が終わりました!!これから更新ペース……  
上げられたらいいなあゝ

## 第15話 奥様の封印

~~~~~校長室~~~~~

亜弥ちゃんの一言で固まる俺達。

「その通りよ」

息子に16年黙ってたのをアッサリ肯定しましたよこの人。

「で、でも雄二君の靈氣って普通だよね？」

「そ、そうだよね」

摩耶ちゃんの質問に賛同する亜弥ちゃん。

「普通って？」

ちなみに俺はもう半妖ってことを受け止めています・・・まあ、この母親だしなって感じです。そもそも若返る人間なんていないし。

「つまり純粋な靈氣ってこと、半妖だったりすると靈氣と妖氣が混ざった特殊な気になるのよ。でも雄二の気は純粋な靈氣なのよ」

なるほど、俺が半妖なら普通の靈氣は出せないはずなのに俺は出し

てるから変ということだな。

またまた説明ありがとう美佳。

「どういうこと母さん？」

「それは私が雄ちゃんが産まれた時に妖気を封印しておいたからよ、でないとな、赤ちゃんが耐えられないしね、だから普通の霊気なの。」

九尾の妖気はそれほど強いらしい。

「それで、やっと、今日私が来た理由に繋がるのよ」

嬉しそうに微笑む母さん、嫌な予感がする。

「あなたの封印を解除しにきたのよ」

.....。

は？

「な、何ですか！？人間には耐えられないから封印したんでしょ！？」

「そ、そうだよ！？雄二をどうするき！？」

「そ、そんなのダメです！？」

三人が必死に抗議してくれる、ちよつと感動です。

「大丈夫よ♪むしろその逆よ♪」

「「「へ?」「」「」

「赤ちゃんは耐えられないけど今なら平気♪気が混ざるのは死ぬ程痛いけどパワーアップよ!!」

「「「なら平気ね♪」「」

「待てやあー!!!!?」

死ぬ程痛いんだろ!!美佳達安心してんじゃねえ!!さっきはあんなに心配してくれたのに・・・さっきの感動をかえせえー!!

「あらあらあゝどうしたのおゝ」

若菜さん!!何処に行つてたか知らないけど助けて!!

「封印解除の準備終わったから逝きましょ」

ブルータスお前もか!?

こうなったら一人で逃げ・・・

「「「逃がさないわよ（ですよ）」」」」

「イヤア~~~~!!!」?

ノリノリの母さん、美佳、亜弥ちゃん摩耶ちゃんに捕獲された俺は、床に擦られながら校長室を後にした。何処からかドナドナが聞こえたのは空耳だろう。

~~~~学校地下室~~~~

「何で学校の地下室にこんなんあるんだ？」

今、目の前に広がるはめちやめちやデカイ魔法陣です」

「私の趣味よぉ」

さいですか・・・

「じゃっ！雄ちゃん陣の真ん中に座ってね」

「拒否権は？」

「英・米・仏・口・中の常任理事国にしか無いのよ」

「チキシヨー日本にはないのかぁー!!」

俺は諦め魔法陣の真ん中に座る。

「じゃあ服脱いでね」

「「「えっ」」」

「待てや、何故あんたら嬉しそうなんだ？」

「気のせいよ」

(ジュルリ)

「貴方のためよぉ」

(ジュルリ)

「そ、そうよ雄二」

(ジュルリ)

「ぼ、ボク・・・」

(ジュルリ)

「ジー・・・」

(ジュルリ)

お、犯される!?

「う、上だけ・・・ね？」

「「「早くうー」」」

脱ぎました。

「「「「「ジュルリ」」」」」」

「グスッ、もうお婿に行けないよー、グスッ」

とりあえず上半身ですんだけど、ダメージが凄い。

「さてと、そろそろ解除するわよ」

充分堪能したらしい。

「好きにして・・・」

諦めました。

「それじゃ・・・はっ!」

「うわっ!」

「「「キャッ!」」」

気合いとともに母さんから放出される強力な妖気。

「じゃあ、やるわよ」

左手をかざして集まる妖気その手を俺の首筋にあてる。

『解!!』

「ッテエー!!!?」

体の中の隅々まで針で刺されるような激しい痛みが流れる。

そして、体の奥から熱い何かが込み上げてきた。

~~~~~美佳視点~~~~~

タマモさんの妖気は凄い、流石は九尾、こんなでたらめな力は感じたことがない、なんだか凄く懂れる。

「ッテエー!!!?」

うつわあゝ凄い痛そおゝなんかいつもより靈気出てるし・・・ッ!?

なっ!?

凄い妖気!タマモさん程はないけど、それでも凄い。

亜弥も驚いてるわね、摩耶・・・ヨダレ拭きなさい。

ドサッ

「「「ゆ、雄二(君)!!!」」」

気の放出が終わりいきなり倒れた雄二。

「大丈夫よ妖気の出し過ぎで疲れただけよ」

「「「ホッ」」」

良かったあー、良かったよお。

「ほらほら雄ちゃん運ぶから手伝ってね」

とりあえず倒れた雄二を運ぶことにする。

ちなみに雄二は上半身裸・・・

（（（（（ジュルリッ）））））

## 第16話 新種！？

~~~~~校長室~~~~~

「ハアハアハア」

（はっ！何だこの今起きないと何か大切な物を失ってしまう予感はい？）

「ジュルリ」

ガバツ！！

「お、おはようございます！-」

「チツ！！」

し、舌打ちした！？

「雄ちゃんおはよーまだ寝てて良かったのに」

寝れないよ母さん。

「なんとも無いみたいねえー安心したわあ」

若菜さんそのカメラなんですか？

「あんなに気を出したのに、もう起きられるなんて、雄二！異常よ

「!!」

美佳も異常なほど顔が赤いぞ。

「ゆ、雄二! し、心配したよ!」

亜弥ちゃん、なんで俺の腕に抱き着いてるの?

「雄二くうん」

摩耶ちゃんヨダレ拭きなさい。

「それで、痛むところある?」

5分程で皆落ち着いたらしく今はソファーに座り話している。

「いや、別に、逆に調子いいし、今までに無い感じ」

起きてから異常に調子がいい。

「じゃあ成功みたいね、良かったー自信無かったのよお」

「おい!」

「じゃあ本番ね、いつも道理に霊力出してみて」

拒否も抗議も出来ないらしい。

ソファーから立ち皆に危なくないよう移動する。

「いくぞ・・・ハア!!」

気合いを入れて霊力を出してみた。

・・・。。。

あれ？

「なんも変わらないぞ」

でも全身に霊力回せてるからいいかな？

「あ、あんたね、その霊力で変わらないわけないでしょ!!雄二のいつもの二倍以上でてるわよ!!」

へ？

「ぼ、ボクより多いよ」

「雄二君凄い・・・」

いつもと変わらない感じだけど霊力は上がったらしい。

「おかしわね」

「おかしいわねえ」

母さんと若菜さんが不思議そうにしている。

「なにが？」

「半妖なのにいゝ靈氣に何も混ぜてないなんてえゝありえないのよあゝ」

「じゃー失敗？」

「うーん、解除の時に妖氣が出たし・・・なんかわかる雄ちゃん？」

わかるわけ・・・

「あ」

そういえば解除の時に感じた熱い感じがしたのって、確か・・・

ブワッ!!

「「「「「なっ!」「」「」「」

「おお! やっぱり!!」

皆も驚いてるねえー♪

「な、何したの雄ちゃん!？」

「解除の時に感じた熱い場所に意識を集中してみたんだけど、凄い調子いい」

・・・。。。

皆驚き過ぎでないかい？

こ、コメントプリーズ!!

「な、なんで」

「お♪なんだ美佳♪」

「なんで!?!なんで霊気と妖気同時に出してるの!?!」

へ？

「な、なんでって、なにが？」

「あ、あのね、半妖は混ざった気を出すのよ、例外は無し」

母さんよくわからんよ。

「っ、つまり！雄ちゃんみたいに異なった二つの気を同時に出すなんて有り得ないの！！」

凄いわよー！！と母さんが大絶賛する。

ズサーーッ！！！！

おお！美佳いいコケッぷりだねえー。

「ち、ちが・・・」

「雄二君凄い！！」

「ボク感動だよ！！」

「ありがとう！亜弥ちゃん摩耶ちゃん！！」

亜弥ちゃん摩耶ちゃんも大絶賛してくれた。

お礼に二人を撫でると。

「フニャ〜」

ってなった。

「もう、いいや・・・」

なんか美佳が落ち込んでるな。

「元氣出せ、な？」

「あんたのせい・・・てゆーか妖氣抑えなさ!？」

「?なんだ？」

(ピコピコ)

・・・。。

ピコピコ？

「雄二君かわいい!!」

亜弥ちゃんかawaiiって？

「そういう趣味だったの? ぼ、ボクなら・・・」

摩耶ちゃん、趣味って？

「ゆ、雄二! 鏡!! 鏡!!」

か・が・み!?

「な、なんだこりゃー!?!」

ピコピコ♪

「み、耳?」

鏡に写ったのはケモノ耳の生えた俺・・・

「い、イヤアアアア!?!?」

そんな世界イヤアアアア!?!?」

「大丈夫よ雄ちゃん♪」

え♪マジ♪

「可愛いし♪」

イヤアアアア!?!?!?」

## 第17話 耳！！

~~~~~校長室~~~~~

「なんでだあゝ俺が何したよあゝ神は死んだあゝグスン」

（死んでません！！）

「ああゝ！変な幻聴までえゝ！！」  
（ピコピコ）

「「ゆ、雄二（君）」」

なんだい双子よ、慰めてくれるのか？優しいなあゝグスン。

「「み、耳触っていい？」」

・・・やっぱりそう来るよな。

うん！！わかってたさ・・・でも今だけは泣かせてね・・・グスン。

「「「私も！！」」」

貴様らもか！？

「・・・何故耳に触るの？」

「「「「そこに狐耳があるからさー!」「「「「「

好きにしてください・・・グスン。

~~~~~30分後~~~~~

「「「「ハウッ」「「「「「

落ち着いたみたいです。

「でさ母さん、この耳どうにかして  
(ピコピコ)」

フッ、もう自分の意識で動かせるぜ。

「わかったわ」

(ムニムニ)

「また触ってんじゃねえー!?!」

ゴスッ!!

「いったあゝい!!何すんのよ!!ハッ!!もしかして反抗期!?!  
ドメスティックバイオレンスなの!?!」

いかん、ゲンコツはやり過ぎたか?

とりあえず撫でておこう。

「クーン♪やっぱり雄ちゃんは優しいー」

・・・謀られたか。

「で、耳消せないの？」

「えー消すのー」

「消すの」

そっちの趣味はありません。

「「「「チツ!!」「」「」」

また舌打ちした!?

「じゃあさっきから出してる妖気抑えなさい、多分その耳は妖気が活性化したせいだろうし」

そういえば出しっぱなしだったな、若菜さんとの特訓の時より長く出せたから記録更新だ。

「わかった」

さっきまで出しっぱなしだった妖気を抑えると狐耳は消えた。

「良かったー」

(ホッ)

助かったーこれで学校に行ける。

「「「「「あーあ」「」「」」」」」

残念がるな！！

「にしても雄二大分パワーアップしたわねー」

美佳悔しそうだな、まあー負けず嫌いだしな。

「そうだね！ボクも負けてられないね！！」

亜弥ちゃんも負けず嫌いみたいだ。

「みみい」

諦めなさい摩耶ちゃん。

「これでえゝ訓練も厳しいゝゝ、出来るわゝゝ楽しみいゝ」

若菜さん勘弁してください。

「じゃあ疲れたから帰りましょう雄ちゃん」

久しぶりにまともなこと言っ たな母さん。

「私達の“愛の巣”へ」

前言撤回します。

「「「愛の巣つてなによぉー!?!?」「」」

美佳達もいちいち何で反応するかね？

ハアー。

「若菜さん疲れたので帰ります、さようなら」

「はいいゝさようならぁゝ新しい訓練メニュー楽しんでてねえゝ」

生き生きするのはいいけどほどほどにしてくださいね。

俺は言い合いを続ける皆を残し家に帰りました。

疲れていたせいかそのままベットで寝てしまった。

なんか夜中に布団がごそごそしたり、『クーン』とか聞こえたりしたのは夢だろう。

夢だからな!?

## 第17話 耳！！（後書き）

今回は短めで、やっと区切りがつけられました、もっと上手くかけたらなあゝ

## 第18話 影響？

~~~~~自宅~~~~~

『おい、起きな朝だぞ』

「んっ・・・おはよう目覚まし」

何故か先日九十九神になった目覚ましに起こしてもらい俺の一日は始まった。

「そういえば母さんどうしたんだろ」

昨日校長室に置いてきてその後は見てないなと思いながらリビングに向かう。

「手紙と本？」

リビングのテーブルの上に見慣れない手紙と本を見つけた。

「母さんか？」

手紙は母さんからで、

『愛しい雄ちゃんへ

まだまだ雄ちゃんと居たかったけど“あの娘”を置いて来てたのを

忘れていたので帰ります。

雄ちゃんのために冷蔵庫にご飯を入れて置きました♪自信作だからしっかり食べてね（ハート）

P・S

その本は私の妖術を収めてあるからしっかり覚えておいてね♪

P・SのP・S

またすぐに来るから浮気しないでね♪

P・SのP・SのP・S

・・・雄ちゃんの寝顔可愛かったわ♪暖かったし、それに（ポツ）  
『

・・・。。。。。

母さん俺になにをしたあ~~~~!!???

~~~~~学校~~~~~

「・・・死ぬ」

若菜さんとの新しい拷問もとい訓練を終え机に突っ伏している。

「おはよう雄二、相変わらずいい死につぶりね」

おはよう美佳、今度ちゃんとした朝の挨拶を教えてやる。

「雄二（君）オハヨー！！」

二人共元気いいなあ〜俺も元気出さなきゃな！！

「ヨシッ！！」

気合いを入れて起きる。

朝の日差しと風が気持ちいい。

「へっ！？」

「ん？」

美佳達が間抜けな顔してこっちを見ている。

「どした？」

「な、な、な、何でもないわよ！？」

（美佳の心の台詞）

『な、なんなのよ！？何でそんな綺麗のよ！！まるでタマモさんみたいじゃない！！』

「ぼ、ぼ、ぼ、ボクはその・・・あの」

（ポツ）

亜弥の心の台詞

『今日の雄二なんか凄い魅力的だよー！！髪が朝日でキラキラして・・・ハウー！！』

「ハウ〜」

摩耶の心の台詞

『ハウ〜』

「？まあいいか」

ちなみにクラスメートの心の台詞

女子編

『『『雄二君（様）お綺麗ですう』』』

男子編

『『『な、何だ！？何で雄二が綺麗に見える！？ち、違う俺はノ  
ーマルだあ〜！！』』』

〜〜〜お昼休み〜〜〜

「ハア〜」

「どうしたの雄二？」

弁当箱を片手に持った美佳が不思議そうに尋ねてきた。

「なんかさー今日は、男子どもには変な目で見られるし、女子には  
なんかキヤーキヤー吠えられるし、先生にはめっちゃめっちゃ授業で指  
されたりするし、俺なんか皆の気に障るような事したか？」

「さ、さあ〜？そ、そんな日もあるでしょ」

『ゆ、雄二、相変わらず鈍感過ぎよ』

「「雄二（君）美佳、お昼食へ行こ」」

「ほ、ほら雄二、お昼行くわよ」

「・・・はいよ」

~~~~~屋上~~~~~

俺達は雨の日以外屋上でお昼を食べている、太陽の日差しと風がとても気持ちがいいのだ。

「「いい天気」」」

アヤマヤが嬉しそうに弁当を取り出し始めた、二人の弁当は自分達で作っているらしく実に女の子らしい。

「それより雄二」

「・・・なんだ？」

君の言わんとすることはわかるが。

「その重箱は何？」

俺が持っていたのは三段のデカイ重箱。

「・・・」

俺は黙って重箱を開ける、中にはびっしりと・・・

「「「・・・いなり寿司」「」」

そう、いなり寿司。

「・・・母さんが作ってた・・・冷蔵庫にビッシリ」

開けたときは意識が跳んだもんさ。

「・・・流石は妖狐ね」

「冷蔵庫にビッシリ・・・ボク見てみたいかも」

「美味しそー」

「皆、食ってくれ」

「そうだ、お婆ちゃんが除霊の仕事くれたんだけど・・・雄二行く？」

「「「行く!!」「」」」

やっと訓練の成果が試せる!!

（私は“雄二”を誘ったのよアヤマヤ）

（二人つきりにはしないわよ美佳）

「「ふふふ」」

な、なんか美佳達、凄いやる気だな、そんなに除霊がしたかったのか？

と、とりあえず今日の除霊楽しみだ！！

## 第19話 ピンチです!!

~~~~~除霊現場~~~~~

放課後、俺達は若菜さんから紹介してもらった除霊現場（古いマンション）に来ていた。

「じゃあやりますか」

「「「おゝ!!」「」「」

（結局、憑いて来たのね、アンタ達）

（（二人つきりにしないって言ったでしょ））

「「「ふふふっ」「」「」

ビクッ!!

（こ、怖っ!?!）

~~~~~マンション~~~~~

「・・・凄い量だな」

マンションに入ってみたら、百体程の霊が出迎えてくれた。

「・・・長年ほつといたから浮遊霊まで集まっちゃったのね」

冷静だな美佳、余裕か？

「み、美佳？依頼のランクは？」

「・・・Cランク」

「し、Cランク！？」

アヤマヤが物凄く驚いてる。

「しゝランクてそんなに凄いか？」

たいしたことなさそうだけど。

「凄くないで！犯罪だよ！！」

は？

「あ、あのね雄二君依頼には一般的にS・A・B・C・Dの五段階に分かれててね、私達みたいな退魔学校に通う生徒はDランクの依頼までしか受けちゃいけないって、退魔協会で決められてるの、ライセンスがあれば別だけど・・・」

へゝ、じゃあこの間の除霊はDランクか。

「だから此処の除霊はやっちゃダメなの！！」

ワンランク違うだけでそんなに違うのかな？

「大丈夫よ♪お婆ちゃんの許可は取ってあるし、嫌なら帰れば？私と雄二でやるから」

（雄二と二人つきり〜♪）

美佳がアヤマヤを煽るように話す。

「う〜！行く！！」

（（二人つきりはダメ！！絶対ダメ！！））

ピリッ！！

ん？何だ今のはっ！？

「な、なあ、霊が集まってないか？」

美佳達のやり取りに気を取られているうちに大量の霊に包囲されている状態になっていた。

へ、平気だよな？

「あ、ヤバ」

・・・ヤバイそうです。

.....。

「じゃ、じゃあそろそろ帰るぞ皆」

「そ、そうだね雄二」

「か、帰りに何か食べて行こうね」

「わ、私ハンバーグがいいなあ」

四人は逃亡を試みた！！

『『『『『ヴウオオオオーーーー！！！！！！！！』』』』』

無駄だった！！

変な叫びとともに襲い掛かってくる大量の霊。

「「「「こ、来ないでえ〜〜〜〜！？」」「」」」

マンションに四人の叫びがこだました。

30分後

「ゼーゼーゼー！」

「ハア、ハア、ハア」

「み、皆あゝ大丈夫？」

今俺達は摩耶ちゃん張った結界の中で休んでいる。

30分粘って半分は倒したが後の半分は、

「ヴァアアア——！！！！！」

ドンッ！！ドンッ！！ドンッ！！

元気に結界を破ろうとしている、勘弁して頂きたい。

「ふんふんふん」

息を整えながら皆に問う。

「ぶ、ぶつぶつ……って言われても」

「ぼ、ボクもう辛いよぉー」

「そ、そろそろ、この結界も限界です」

万事休す、か。

「・・・ゴメンね私のせいで」

美佳が泣きそうになりながら謝る。

「謝んなよ」

「そ、そうだよ!」

「ぼ、ボク達だって悪いんだし」

「で、でも・・・」

はあ、コイツは昔から・・・

ぽんぽん

「へ?」

「どうにかなるから」

美佳の頭を優しく撫でながら。

「俺がどうにかするから」

「ど、どうにかって雄二!」

「「雄二（君）！！」」

「大丈夫！！多分な」

結界から離れ妖気を限界まで練り上げ、  
“あの本”に書いてあった  
事を思い出す。

『浮気しちゃダメよー』

・・・・・・。

間違えた。

ええと。

『妖術の基本はイメージにある。強く、より強くイメージすること  
で妖術は強力になる。』

左手に妖気を集中させ、イメージする。

『この世の全てを燃やし、灰にする炎』

「『狐火!!』」

~~~~~美佳視点~~~~~

「俺がどうにかするから♪」

「ど、どうにかって雄二!!」

な、何カッコイイこと言ってるのよ!?

「『雄二(君)!!』」

「大丈夫!!多分な♪」

た、多分ってなによ!?

結界から出た瞬間雄二は昨日より強い妖気を出し、左手に集中し炎を作り出した。

「『狐火!!』」

『『『『ギヤアアアーー!!』』』』

雄二から放たれた紅い炎に包まれ、大量にいた霊達は、断末魔と共に消え去った。

ドサッ

炎が消えると雄二はその場にゆっくりと倒れ込んだ。

## 第19話 ピンチです!! (後書き)

む、バトルを書くつもりだったんですが、難しいですね。

## 第20話 火に油 ♪

~~~~~ 神樂寺家 ~~~~~

目を開けるとそこは見馴れた天井。

んっ？・・・此処は家か、何でこんなところいるんだ？確か俺は美佳達と除霊してて・・・ああ、狐火成功して全部倒してから倒れたんだな。

まあ家にいるって事は皆無事だろ、もう少し寝よ、なんか右側暖かいし、あつたけえ。

ギョツ

「あんっ ♪」

は？

ギョツ？

「あん ♪ ダメよぉ〜雄ちゃ〜ん、でもでもぉ〜雄ちゃんならぁ〜 ♪  
きゃ〜 ♪ キゃ〜 ♪」

.....。

「あれえゝ雄ちゃん？」

俺が抱きついているのは、見た目めっちゃめっちゃ若い女性。

「わ、わきゃなさあーーーーーん!!??」

よくわからん俺の叫びが我が家にこだました。

ドタドタドタ!!!!

「「「どうしたの雄二(君)!!?・・・は?」」」

いきなり入ってきて固まった美佳達。

美佳達が部屋に入って初めに見るのは・・・はっ!!

「ち、違うぞ美佳!亜弥ちゃん!摩耶ちゃん!!これは・・・!!」

「「「・・・何が違う雄二（君）」「」」

ま、まずい！！このままだといつものように・・・

「わ、若菜さん！！なんか言って下さい！！」

・・・・・・・・・・。

ま、間違えたあー！！！！一番振ってはいけない人にふつちまったあー！！？

「や、優しくしてねえっ」

火に油あゝゝ！！！！？？

「「「ゆゝうゝじ君」あつそびいーましよ」」「」

しゅ、修羅が！？俺を遊びに誘ってる！！

「ま、待つて！！お願い！！話を聞いて！！」

「「「アヒヤッ」アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ」」」「」

「イヤアーーーー！！！！？？」

~~~~~30分後~~~~~

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

「や、やり過ぎた？」

（さ、流石に霊力全開100連コンボはダメだった？）

「ゆ、雄二壊れた？」

（か、刀で切ったのが悪かったかな？）

「アヒヤ？」

「もう少しだったのに」

~~~~~更に30分後~~~~~

「つで、何で若菜さんがいるんだ？」

まだ頭がくらくらするが話しを進めねば。

「それはねえ、美佳から連絡があったからよお」『雄二が死んじやうー！』「つて、泣きながらねえ」

「ちよっ！？お婆ちゃん！！」

「そ、そんなに心配してくれてたのか？」

美佳がなあー。

「むっ、ボクも心配したんだよ！！」

「私も！！」

「あ、ありがとう」

ちよつと恥ずかしいな。

「あー！！もう！！それでそのあと雄二を家まで運んで、お婆ちゃんがヒーリングしてたのよ！！・・・って何でお婆ちゃんが雄二の隣で寝てるのよ！！」

そつえば何故？

「暖かそうだったからよぉ」

さいですか。

「それじゃー雄ちゃんゆつくり休みなさあーい、妖気を限界まで使ったからあー本当なら瀕死よぉ」

道理で頭がくらくらするわけだ。

「マジですか・・・わかりました休みます」

「はいいゝお休みいゝ」

言いながら俺のベットに入る若菜さん。

「」「」「ちよつとまてや!!」「」「」

「なんでお婆ちゃんが雄二のベットに入るのよ!!」

そ、そうだ! そうだ!!

「添い寝しなからヒーリングするためよお」

やめて下さい、仮にも俺は男です。

「じゃあ私が添い寝します!!」

・ 摩耶ちゃんあのね添い寝がメインじゃないんだよ、それに理性が・

「じゃあボクは腕枕してもらうつゝ」

亜弥ちゃんもう介抱する気ないね。

「じ、じゃあ私はひざ枕を・・・」

美佳・・・君まで。

「・・・もついいや」

ツツコミを入れる気力も無くした俺は静かに意識を手放した。

朝起きたらどうなってるかなんて。

もう、どうでもいいや・・・

## 第20話 火に油 ♪（後書き）

なんか、うつすーい内容になってしまいました。何が良くないんかなあゝ・・・

## 第21話 武器選び

~~~~~訓練室~~~~~

「お、お疲れ・・・さま・・・でした・・・」

「はあ〜い♪お疲れ様あ〜♪」

朝、若菜さんとの訓練（？）がやっと終わった。

「雄ちゃ〜ん、やっと妖気をコントロール、出来るようになったわねえ〜」

「ハア、ハア、お、お蔭様で」

実際“狐火”ならこの前みたいに妖気を無駄に枯渇させずにすんでいる。

いやあ〜初めは妖気が暴走して大変だったなあ〜

その度に若菜さんに気絶させられてたし・・・よく生きてるなあ〜俺。グスン

「あつ！そういえばあ〜雄ちゃん決めたのお〜？」

「何をですか？お嫁さんとか言ったら怒りますよ」

一応釘を刺しておく。

「ちえ」

当たりですか・・・。

「ううん、その話は置いてえ」

捨ててきなさい。

「雄ちゃんはあゝ自分の武器決めたのあゝ？」

「はい？武器つていうと、亜弥ちゃんの刀とか、美佳のいろいろですか？」

「そうよあゝ貴方に無手は向かないしいゝ早めに決めた方がいいわよあゝ」

んゝ全く考えてなかったなあー。

「何がいいですかねー？」

「自分で考えなさあゝい、相談ならいいけどあゝもしかしたらずつと使っていくパートナーになるわけだし」

むうゝそう言われると悩むなあー。

「まあゝゆつくり決めなさあゝい、それとあゝお嫁さんはあゝ・・・」

まだ捨ててなかったんですね？

~~~~~教室~~~~~

「・・・つてわけよ、何かないか？」

「・・・いきなりね」

そういうな美佳文章削減だ。

「じゃ、じゃあ私と同じで、オールラウンドいいんじゃない？」

（お、お揃いよ！お揃い！！）

「うーん、オールラウンドなあー」

「ダメだよ美佳、美佳のあのスタイルは覚えること多過ぎるし大変だよ」

「そうだよなあー覚えるの苦手だし」

「そ、それなら刀なんてどうかな？」

（二人で一緒にカップル剣士・・・いい！！絵になるよ！！）

「刀なあーいいかもなあー」

「ダメダメ、取りあえずなんかダメ！！」

何がダメなんだ摩耶ちゃん・・・

「それなら結界

」「ダメ」「どうしてえー」

「ダメって言うが無理よ」

「摩耶の能力は特殊なんだよ」

何が特殊かはおいおい話すとして。

「っで、雄二どうするの？」

んゝ決まらん！！

「もう少し考えてみるわ」

「むうゝ」

「摩耶、諦めなよ」

「お姉ちゃん・・・裏切り者って・・・いつか死ぬのよ」

「ま、摩耶！？」

~~~~~自宅~~~~~

「んゝゝ悩むなゝゝ」

今日一日中考えてたけど全く決まらんかった。

「どうせなら、妖術と組合せたいなあー」

狐火しか使えんがな。

狐火かぁー霊力と組合せてえー・・・

・・・。。。

おっ！いいじゃん、学校じゃ使ってる奴いなかったし。

「よしっ！決定！！」

そうと決まれば・・・

『で・ん・わ・よお』  
♪『

ピッ

「・・・もしもし」

「雄ちゃん今晚わあ」

「若菜さんいつの間に俺の着メロ変えたんですか？」

どうせ言わないだろうけどな。

「それよりいゝ武器決まったのねえ」

ほらなあー！。

・・・。。。。。

「何で決まったってわかるんですか！？」

「気にしないのおゝそれでえゝ何にするのおゝ」

とことん無視かい。

「“ - - ” にします」

「あらあゝいいじゃない、わかったわあゝ私が用意してあげるわあ」

「いえ、悪い

「断ったらメニユー3倍ねえ」・・・よろしくお願いします」

「はあゝいゝじゃあ明日ねえ」

ピッ

なんか悪いなあ〜全部世話してもらって・・・感謝しないとな♪

「・・・さて♪取りあえず隠しカメラ探すかな♪」

## 第22話 特注品よぉ」

~~~~~屋上~~~~~

今俺は、先日母さんが仕掛けていっただいなり寿司を胃に納めようと奮闘している、そして美佳達は・・・

「雄二いー好い加減教えてよぉー」

「やだぁ」

昨日武器が決まった事を美佳達に話したんだが・・・

「『『気になるうー』』」

朝からずつと聞き出そうと奮闘し続けている。

授業中まで聞き出そうとする必要ないだろ、お陰で現代っ子には有り得ない『廊下に立つとれ』を言い渡されたからなあー、俺は青い猫型ロボットとは同居しとらんし、名前が魚でもないのに。

・・・よし、じゃあ。

「ああゝわかったよ」

「『『本当っ！！』』」

嬉しそうだな、そんなに知りたいもんかねえー

「“これ”全部食ってくれ」

ほいつ、と突き出したのは重箱に入ったいなり寿司。

「くず、ズルイ!!」

「じゃあ、頼む食ってくれ」

「くずくずくず」

くずくずくず20分後くずくず

「くったあ」

「ウップ、お、教えてもらっわよ」

「ケフツ、うー、太ったらどうしょー」

「ムグムグ」

まさか20分で食えるとはな・・・

「ゆ、雄二いいなさい」

こ、怖っ!!美佳怖いつて!!

「わ、わかった、わかったから」

「早く!!」

「せ『雄ちゃん』至急、校長室まで来てねえ』」

・・・凄いタイミングだな

「ハア、行くか」

「お婆ちゃんどっかで見てんじゃないでしょうね・・・」

「ムグムグ」

「摩耶まだ食べてたの!？」

~~~~~校長室~~~~~

「皆あゝいらっしゃゝい」

優雅に紅茶を飲みながら若菜さんが出迎えてくれた。

「それで用事は何ですか？」

「あらあゝ頼まれてた物が届いたから呼んだのよあゝ」

は、早っ!!昨日の今日だろ!!

「早いつすねー」

「雄ちゃん“私だけに”言ってくれたのがあゝとっても嬉しくってえゝ」

何故私だけにを強調するね、若菜さん。

「「雄二（君）」」

ビクッ！！

まっ、またか！！

「お婆ちゃん“だけ”には言って私達には言ってくれないんだ」

ち、違うんだ美佳！！

「ボク、凄ついショックかも」

お、俺はただ後のお楽しみにつて

「ムグムグ」

ま、摩耶ちゃん、まだ食べてたんだ、つて！！いなり寿司持つて近づがないで！！

も、もうダメだ、また前回みたいに・・・

「ハイハイ、そこまでよぉ」

わ、若菜さん！？またややこしくするんですか！？

「なによ、お婆ちゃん」

「もぉ～ヤキモチ妬かないのお」

「や、ヤキモチなんて妬いてないわよ！！」

「じゃあいいでしょ」

「で、でもおー」

「またぁ～お仕置きされたいのお」

「うつ！うつ」

す、凄い！！初めて若菜さんがややこしくしなかった！！

「・・・雄ちゃ～ん、メニュー追加ね」

読心術！？

「それはそうとぉ～はぁ～い、プレゼントオ」

落ち込んだ俺の前に木箱を置いた。

「開けてご覧なさぁ～い」

若菜さんに言われ、木箱の蓋を開けるとそこには・・・

「「「扇子?」「」」

そう、扇子。色は黒。

まあ普通の扇子と違って長さが50cmぐらいあるんだけどな。

「持ってみなさあゝい」

「はいっ!?!」

若菜さんに言われ持ってみたけど、重っ!?!扇子の重さじゃねえ!!

「ふふふうゝ凄いでしょゝ超特殊合金よおゝ重さはあゝ確かあゝ6kgだったかしらあゝでもおゝそれぐらい使えないとおゝ」

それもそうか、まあ、これくらいなら何とかなるか。

「雄二君!!開いて!!開いて!!」

「ん、ああ」

摩耶ちゃんは模様が気になるのか扇子を開くように諭す。

バツ!!

扇子の重さに苦労しながら何とか開くと・・・

「狐だあゝ」

綺麗な狐が一匹描かれていた、扇子の色と狐の色が実に素晴らしい。

「つで、若菜さん」

「何かしらあゝ」

ここで、一番聞いておきたいことを聞く。

「いくらしたんですか？この扇子」

「ううゝん、貴方の今住んでる家位かしらあゝ」

・・・・・・・・・・。

「」「」「高つ！」「」「」

流石に高過ぎるだろ！！

「も、

貰えません！！」

「平気よゝどうしてもって言うならあゝ出世払いでねえゝ？」

「は、はい」

か、返せるかな？

「ふふふう」なんならあゝ体で返してくれてもおゝ」

「「ダメ!!」「」

若菜さんと美佳達がギャーギャー言い出したので俺は・・・

「じゃあ5時間目が始まるんで行きます、さようなら」

5時間目に向かう、ちなみに美佳達は5時間目の終わりに帰ってきて、『廊下に立つとれ』を命じられていた。

## 第23話 休日だあ ♪

~~~~~ 神楽寺家 ~~~~~

「ハア〜平和だなあ〜」

麗らかな春の休日、俺は久しぶりの平和を満喫していた。

「う〜ん、紅茶も旨い♪」

先日、クラスの女子から貰った（貰って下さいと泣き付かれた）紅茶も実に旨い。

「ビバ！！休日！！」

『おい、電話だぞー』

クロ（目覚ましの九十九神）が寝室に置き忘れていたケータイを持って来た。

「ありがとな、クロ」

『・・・なあ、その犬みたいな名前やめないか？』

「alarm clock だから“悪路”と“クロ”しかないが・  
・・」

『・・・クロでいいです、早く電話でな』

「はいよ」

ピッ

「はいコチラ人類初、特殊合金製扇子の使い過ぎで腱鞘炎になりました雄二です」

『あっ♪雄二いー今日暇あー？』

ツッコンでくれよ美佳。

「・・・暇だけど」

『よかったー、今日買い物付き合ってくれない？買う物多くて・・・』

（デートよデート♪気付きなさい♪）

「わかったよ、なんか奢れよ」

（気付けええー！！！！）

~~~~~駅前~~~~~

「・・・ねえー♪お姉さん達と遊ばない？」「」

「すみません、今日は用事があって・・・」

現在午前10時30分、さっきから引つ切り無しに遊びに誘われて

いる・・・何故だ。

（ねえーあの子）

（キャー♪カッコイイ！！）

（彼女待ちかしら？）

（奪いとるまでよ！！）

ビクッ！！

な、なんか殺気を感じる、何故だ。

つか、美佳早く来い！！待ち合わせは、10時だろうが！！

「お・ま・た・せ♪雄二！！」

「おせえ！！」

「な、何よー少し遅れたぐらいで」

「お前は、30分で少しなのか？」

少し睨みながら言う。

「き、気にしない♪気にしない♪ねっ」

.....。

「ダメ？」

「昼食を奢れ、それで許す」

「りよ、了解です」

「よし、じゃあ行くか」

ああ〜出費があ〜と嘆いている美佳を連れて歩きだす。

（あれが彼女ね！！）

（ドロ〜ね・・・行ける！！）

（取りあえず付けるわよ！！）

（（（（おお！！））））

気のせいだよな。

こらっ！美佳威嚇するな！！

~~~~~服屋~~~~~

「み、美佳？」

「何、雄二？」

「まだ選ぶのか？」この店に入って30分、まだ一着分の服しか決まっていない。

「女の子の買い物はこういうもののなのよ」

さいですか。

「雄二のも選んであげようか？」

「結構で

「それならば、私にコーディネートさせていただけませんか？」すいきなりそう言い出したのはお店の店長らしき人。

「い、いえ、お金もあまり無いですから」

この店は高級店で結構な値段なのだ。

「それでしたらプレゼント致しますわ」代わりに少し写真を撮らせて下さい」

「そ、それなら」

「よかったわね、雄二」

その後30分程ファッションショーをやらされ、写真を撮られた、まあ服を数着貰えたから得したかな。

後日その時撮った写真がファッション誌に載りかなり驚く事になるがそれはまた今度。

~~~~~カフェ~~~~~

「うーん！美味しかった♪」

「うむ、久しぶりにいなり寿司以外の物を食べたな」

カフェで昼食を食べ終え今はティータイムだ。

「でも今日はいやに混んでるな何でだ？」

今日は行くところと行くところ混んで大変だった、なんか同じ顔ぶれだ  
ったりしたけど・・・。

「さ、さあゝなんでかしらねえ」

（あんたのせいよ！！威嚇するの大変なんだからね！！）

「さて、そろそろ行くか」

「う、うん」

（よ、よし！！今日は邪魔者はいないし）

ギョッ！！

「どうした美佳？」

レジを済ませた後急に美佳が腕に抱き着いてきた。

「い、良いでしょたまには・・・」

「あ、ああ」

み、美佳！！頬を赤くして上目遣いでみるな！！な、なんか可愛いじゃないかっ！！

「い、行くぞ」

「う、うん」

なんかぎくしゃくしながら買い物続ける。

「あれ？」

「どうしたの雄二？」

「あれ」

指差し先には双子の一人。

「ゲッ」

ゲッて美佳、親友だろが。

「おゝい、摩耶ちゃん」

「ふえ！？ゆ、雄二君！？」

いきなり声をかけたのが悪かったのか、かなり驚いている。

「す、スマンそんな驚くとは思わなくて」

つて美佳まで驚く必要あるのか？

「ゆ、雄二何で摩耶ってわかったの？」

「何でってそりゃ・・・あれ？」

見た目変わらない双子を後ろ姿で見分けられた何でだろ・・・。

「おゝい、摩耶あー、お待たせー、あつ！雄二に美佳だ♪腕なんか組んでー殺すよー」

「お、お姉ちゃん」

涙目になりながら亜弥ちゃんに振り返る。

「ど、どうしたの摩耶！？美佳に虐められた！？」

「なんでよ！！」

亜弥ちゃんの言葉に速攻でツツコム美佳、早いなー。

「ち、違うのお姉ちゃん、雄二君が・・・」

「雄二っ！！ボクの妹に何をしたあ！！」

亜弥ちゃん暴走！！

「ま、待て亜弥ちゃん！！俺は何も！！」

「問答無用！！何で私じゃなくて摩耶に手を出すのよ！？この怨み今日磨いでもらったばかりのこの刀で晴らしてくれる！！」

聞けえええ～～～～！！

「秘技っ！！試し切り！！」

「試すなああ～～～～！！」

その後、俺は何故か自宅のベットで目を覚ました。

教訓

『俺に休日はない！！』

第23話 休日だぁ ♪ (後書き)

うん、ここらへんでイベント入れてみたいです。  
うか？  
どうでしょ

## 第24話 名前っ!!

~~~~~教室~~~~~

「ぬおおお~~~~腕が指があ~~~~!!」

若菜さんとの訓練に扇子が取り入れられ両手、両腕が筋肉痛でヤバイ状態だ。

「辛そうねー・・・」

美佳は先日の買い物のお陰が結構機嫌がいらしく・・・

「うりゃっ」

「触んなあ!!突くな!!」

いつもより意地悪です。

「お、おはよう美佳、雄二」

「おはよう美佳、雄二君」

「おはようアヤマヤ」

美佳が俺を弄るのを止め双子に挨拶をする。

「ゆ、雄二昨日はゴメンね気絶させちゃって」

「まったくお姉ちゃんは」

「もう亜弥ったら折角雄二と・・・だったのにいゝ」

「コイツら何してんだ？」

「何で、摩耶ちゃんが俺に謝るんだ？」

「」「へっ？」「」

「謝るなら亜弥ちゃんだろ？」

「なんか俺の呼びかたも違うし、なんかあったのか？」

「何言って」

「「凄いよ雄二（君）」」

「ギュッ！！」

「美佳の声を遮りいきなり俺に抱き着いてきたアヤマヤ。」

「凄いよ雄二！！やっぱりボク達のこと見分けられるんだ！！」

「お母さん達だって無理なのに！！」

「は、離れなさいアヤマヤ！！」

「な、何！？どういうこと？」

その後、美佳によって強制的に落ち着かされたアヤマヤ。

「落ち着いたわね」

「い、痛いよぉ〜グス」

「ぼ、ボク初めて延髄蹴りされたよ」

「っで、何で雄二に抱き着いたの？」

アヤマヤを睨み付けながら質問する美佳。

「あ、あのね・・・」

要約すると、昨日アヤマヤを見分けられたのは偶然かどうか確かめるために、言葉遣いを取り替えてみたところ、そしたら偶然ではなく実力でびつくり、ああ、ついに私達にも春が。

と言うことらしい・・・何が春なんだろう？

「「ああ、これは運命」」

「勝手に運命にするな！！ね、雄二・・・あれ雄二？」

その頃俺は・・・

「神楽寺いゝ！！待てやあゝ！！」

「フハハハアゝゝ見せ付けやがつてゝ！！」

「呪殺！！呪殺！？じゅさつうゝ！！」

「俺が何したあゝ！？」

何故か男子生徒どもと命懸けの逆鬼ごっこをしていた。

「くそあゝ抱き着かれたただだろ！？」

「だけ！？あんな美少女達に抱き着かれてただだと！？」

「くくく殺す！！絶対殺す！！」

「いやあゝ！！誰かあゝ！！」

なんか、お札とか、呪いの言葉とかが飛び交い始めてきたよ！！

ああ、もう限界！！若菜さんの訓練のせいだ！！

「貴方達何をしているの！！」

そろそろ限界だったので迎え撃つかと考え始めた時救いの女神が・  
・咄嗟に後ろに隠れる。

「い、委員長」

「ち、違っんだ委員長！！」

「これは制裁なんだ!!」

「煩いですわ!!何が制裁です!!単なる嫉妬でしょ!!」

「」「」「ウグツ」「」「」

「早く教室にお戻りなさい!!」

「」「」「ハイツ!!」「」「」

さ、流石だなあれだけの男子を蹴散らす(?)とは・・・

「大丈夫ですか神楽寺さん？」

「あ、ありがとう薫子さん」

彼女の名前は“小笠原 薫子”（オガサワラ カオルコ）我がクラ  
スの委員長でかなりのお嬢様で、学校内1の弓の名手だ。

「えっ!？あ、あの今薫子って・・・」

「あつ、ああ、ゴメン馴れ馴れしかったかな？」

いきなり名前で呼ぶのはまずかったかな？

「い、いえ!!嬉しいですわ」

「そ、そうですね？」

「はい、皆さん私のことを委員長としか呼びませんし・・・」

薫子さんは少し寂しそうに言う。

「だから、神楽寺さんに薫子って呼ばれて嬉しいですわっ」

「じゃあ俺のこと雄二って呼んでよ」

神楽寺さんと呼ばれるとなんか痒いのですよ。

「ハイツ」雄二さん」

「呼び捨てでいいのに」

「じゃあ、雄二さんも呼び捨てにしてください」

なんか可愛いらしいな、始めは堅物って思ってたけど。

「やべっ、もう一時間目始まるぞ!!」

「い、急ぎましょう雄二さん!!」

俺の手を握り教室に走り出した薫子の顔が少し赤くなっていたのだ  
が・・・

(き、筋肉痛があゝ!!!)

筋肉痛の痛みによって気付く事はなかった。

浚に、手を繋ぎながら教室に帰ったせいで美佳、アヤマヤ、男子どもにボコボコにされまた保健室のベットにお世話になれことになっ

た。

「雄二さん・・・素晴らしい男性ですわ」

## 第24話 名前っ！！（後書き）

24話にしてやっと委員長出せました。ダメダメだなあ。

## 第25話 春先ですしね

~~~~~教室~~~~~

「ふっ・・・厄日だぜ」

結局4時間目まで保健室で過ごした。

「いつもじゃない」

「美佳、最近冷たいな・・・昔は『ゆうちゃん』とか言っ  
つ付いて来たのに・・・お兄ちゃん悲しい、ホロリ」

「誰がお兄ちゃんよ!？」

「雄二くん」ボク「私たちが慰めてあげるう」

「アヤマヤ!!どさくさに紛れて抱き着くな!!」

うん、やっぱり昼食は楽しんで食わなきゃなあー。

「おっ!あれは」

「委員長じゃない」

屋上から見える弓道場に一人練習をする薫子がいた。

「お昼ご飯食べたのかな？」

「誘ってみる？」

ナイスアイデア、亜弥ちゃん。

「そだな、おおーい！！薫子！！」

「きゃっ！！」

急に声をかけたせいか的を大きく外してしまったらしい。

「「「呼び捨て！？」」「」」

「一緒に昼メシ食おーぜえー！！」

「ハ、ハイ！？雄二さんすぐに行きますわ！！」

薫子は返事するやいなや走り出した。

「うんうん、嬉しそうだ」

「「「雄二（君）！！」」「」」

ビクッ！！

「な、何でしょうか？」

「何で委員長を呼び捨てにしてんのよ!!」

「ボクたちだって“まだ”ちゃん付けなのに!!」

「さっきは手繋いでましたしね!!てえーを!!」

いや、何でって。

「私が頼んだからですわ」

「「「早っ!!」」」

いつの間に来てたんだよ。

「私が初めて認めたお方ですもの」(ポツ)

「委員長あんたそんな性格じゃなかったでしょ」

俺は何を認められたんだ？

「「ムウゝ雄二(君)!!」」

「な、何でしょうか？」

「私<sup>ボク</sup>たちも呼び捨てて!!」

「な、何故？」

「「いいから！！悔しいだけだよ！！」」

そ、そんなに切羽詰まった顔しなくても。

「あ、亜弥？」

「はう」

「ま、摩耶？」

「あう」

「アヤマヤ！！変な声出さないでよ！！変人みたいよ！！」

美佳今回はすっかりツツコミだなぁ。

「まあ、春先ですしね」

か、薫子もキツツイなぁー。

「と、とりあえず昼メシ食うぞ、ほれ、薫子もこれ食べ、家の母さんの手作りだ」

差し出したるは、ついにラストだ！！いなり寿司！！

「ありがとうございます雄二さん」

「ボクも食べる」

「私もお」

「じゃあ私も・・・」

うーん、なんか母さんのいなり寿司は人気あるなー、確かに旨いけど・・・何でこんなに必死なんだ？

((雄二君)さん)のお袋の味!!花嫁修行!!しっかり覚えねば!!)((

うーん、謎だな・・・

第25話 春先ですしね（後書き）

短かったなあゝすみませんでした。

## 第26話 班決め!!

~~~~~訓練室~~~~~

「三分経過よぉ」

「くっ!!」

俺は今狐火を三つ廻りに浮かべて維持し続けている。

「ああもう無理っ!!」

クソォ三分かぁ。

「始めに比べたら上出来よぉ」

確かに始めは一つでも10秒もたなかったしなぁ。

「じゃあ次は扇術ねえ」

「はい」

扇術は母さんと若菜さんが考え出したオリジナルな戦法なのだ!!

「先ずは防御ねえ」

嬉しそうに剣を取り出す、もちろん抜き身。

「行くわよぉ」ストレス解消術うーただの連撃い」

とりあえず今日は生き抜きました。

~~~~~教室~~~~~

「・・・と、いうわけだ！！しっかり準備しとけよ！！じゃあと委員長よろしく！！」

ムツ、しまった話を全く聞いてなかった・・・勿論、最近更に厳しくなった若菜さんとの訓練の副作用なんだが。

「それでは班決めを開始しますわ、各自相性の良い班を作るように」

な、何のだ？

全く聞いてなかった・・・

「雄二さん」

「ハイツ何でございましょうか薰子さん」

「話を聞いてませんでしたね？」

「い、イエケツシテソウイウワケデ

「聞いてませんでしたね」すみませんでした」

いつもよりなんか怖いよ薰子おー。

「で、では、ゆ、雄二さんには私と班を組んでいただきますわ」

“嫌ですとは言わせません”と言わんばかりの迫力で迫らないで下さい、めっちゃめっちゃ怖いです。

「りよ、了解です」

「「「「「反対です!」」」」」

(女子全員)

「な、何故です!?」

「「「「「独り占めは許しません!」」」」」

「あ、あのお」

俺を置いて話しを進めないで下さい。

「ペア戦は私と雄二さんで決まりですわ!ー委員長命令ですわ!ー!」

「「「「「関係ありません!」」」」」

「ぺ、ペア戦って?」

あのおゝ一人ぼっちって淋しいんですよー。ウサギなら“淋死”しますよおー

「それでは雄二さんには団体戦に出いただきます！！メンバーはくじ引き！！異議はありませんわね！！」

「『『『『異議なあーし！！』』』』」

「グスン・・・いいんだあゝ聞いて無かった俺が悪いんだしいゝ・・・えゝん」

淋死してやるうゝ！！

「つまりね、学校内霊能バトルーナメントをするから、その班決めをしてるんだよ」

淋死しかけた俺を救ったのは、学園内で一番頭の良い子“三坂 卓”（ミサカ タク）そして唯一の“普通の男子”だ。

「ありがとうタツ君、優しき人よ」

「どう致しまして、あつ、後トーナメントにはシングル（一人）、ペア（二人）、グループ（六人）の三つあるんだ」

「へえゝじゃあ俺はシングルがいいなあゝ」

訓練の成果がわかるしな。

「雄二は僕と同じグループ戦、ちなみにメンバーは・・・あれ」

タツ君の指差す先には泣き叫ぶ女子生徒と、黒板に書かれた・・・

グループ戦メンバー

・ 神楽寺 雄二

・ 三坂 卓

・ 桜井 美佳

・ 雪村 亜弥

・ 雪村 摩耶

・ 小笠原 薫子

・・・。。

いつものメンバーやん・・・

「また俺は置いてかれているんだね・・・」

「いつもじゃないか」

タツ君、君だけは信じていたのにな・・・

第26話 班決め!!（後書き）

ムウゝなんか上手く書けないなあゝ次回こそっ!!

## 第27話 撫で心地

~~~~~屋上~~~~~

「っで、グループ戦ってどうやるんだ？」

今はお昼休み、グループのメンバーが昼食をとりながら話している。

ちなみに、先日母さんのいなり寿司を食べ終えた俺の昼食は学食で買ったいなり寿司だ。

・・・いや、その、飽きてないし・・・好物なんだ！！悪いか！？

「グループ戦は、グループ同士で一人づつ出し合って戦い合う霊能バトル、先に3勝したチームの勝ち、道具の持ち込みは自由だけど種類のみ、以上質問は？」

ありません、相変わらずわかりやすい説明です。

「ハイツ美佳先生！！」

「何、亜弥？」

いつの間にかけたのか、赤いザマス眼鏡をクイツと上げながら答え

る美佳。

・・・結構ノリがいいのな美佳。

「質問が無い時はどうするんですか？」

・・・そうきたか亜弥君

「黙ってなさい」

冷たっ！！

「うわ〜ん！！美佳ひどいよぉ〜！！雄二い〜」

「よしよし、今は冷たいよな」

なんか最後は嬉しそうに泣き付く亜弥の頭を撫でてやる。

「はふう〜」

「」「亜弥あ（さん）」「」「」

羨ましそうに睨む美佳達。

なんかみんなこれが好きなんだよなぁ〜。

「雄二、君のその鈍さどうにかならないの？」

「失礼な、誰が鈍いつてタツ君」

俺の超感覚を嘗めてるな。

「まあ、それが雄二らしさだからいいんだけどね」

「ムッ、今俺はバカにされたのか？」

「いや、僕は尊敬するよ、ある意味だけどね」

ある意味ってどんな意味だよ。

「雄二！！いつまで亜弥撫でてんのよ！！」

おお、忘れてた。

「悪かったな亜弥、なんか撫で心地よくってなあ」

「そ、そうかな？」

はにかみながら自分の髪を弄る亜弥。

「「どうせ私は撫で心地よくないわよ」だ」

ん？

「何言ってたんだ美佳、摩耶、お前達も撫で心地いいぞ

美佳の髪は長くってふわふわだし。

摩耶は亜弥と同じで短くってサラサラだし。」

甲乙つけがたいのだよ。

「「「そ、そうなんだ」「」」

うむ、なんかよくわかんないけど機嫌は治ったようだよかった、よかった。

・・・・・・。

ん？なんか忘れてる？

「へえー、雄二さんは美佳さん達の頭“だけ”撫でて、私の頭は撫でて下さらないのですねえー、ショックですわ」

おお薫子、うん、できれば後ろから殺気を放つのは止めていただきたいなあ

「雄二さん、私も髪には自信が有りましたね」

「ハイツ見た目からして素晴らしいと思います」

後ろへは振り返ってませんよ、振り返れませんし。

「撫でてみたありません？」

「い、いえ、わたくしめには勿体ないでございます」

し、しっかりしろ俺っ！！

「撫でなさい」

「りよ、了解です」

静かだがしっかり殺気の籠った言葉だった。

「あつ、終わったみたいだね」

卓貴様は・・・。

「じゃあ戦闘する順番決める会議を始めようか」

「はぁー最高ですわっ」

会議には薫子を撫でながら出席することになりそうだ・・・

「順番はその場その場で考えればいいんじゃない？」

「そうだね」

美佳の意見により5秒で終了お〜。

「じゃあそれぞれ本番までにコンディションを整えるように」

「今からでも平気ですわあー」  
♪

俺に撫でられるのってそんなに気持ちいいのか？

「そういえば、試合っていつなの？」

摩耶の言う通りだ、いつかわからないのにコンディションなんか整えられないしな。

「明日だよ」

そっかあゝ明日だよ、かあゝ、そりゃゝ大変だあゝ。

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
○

「  
「  
「  
「  
えええええ  
ゝゝゝゝゝ  
!!???  
」  
」  
」  
」

## 第27話 撫で心地（後書き）

ああ、遅れてしまいました・・・これからこつこつの増えるかも・・・  
・見捨てないでくださいねえ

## 第28話 コスチューム!?

~~~~~試合当日~~~~~

出来るかぎりコンディションを整えた翌日（試合当日）、俺達は教室に集まっていたんだが・・・

「・・・なんだみんなその恰好は？」

「『『『『変かな？』『』『』』」

変だ、変過ぎる。

美佳は、大正時代に女学生着ていた、袴らしきもの。

双子は、魔女っ子？

ああ、いいからポーズとるな。

薫子は、なんかセレブがパーティーに行くようなドレス。

卓は、眼鏡にパソコン片手にスーツ。

まさしく、THE JAPANESE SALARYMAN!!

俺は、先日頂いた私服。

「・・・全くもって統一制ないじゃない」

バラエティーに富んだメンバーでお贈り致します♪

「いいじゃない、私の戦闘服よ!!」

袴がですか。

「「雄二（君）嬉しくない？」」

そんな趣味ございません。

「動き易いんですよ」「ドレスが？信じませんよ。

「似合うでしょ？」

タツ君は黙らっしゃい。

ドドドド・・・

「はぁ、もう時間無いしな仕方ないか」

ドドドドッ!!

「雄二は着替えないの？」

「・・・すぐ来る」

バンッ！！

来たか・・・ふっ、予想道理だな。

「雄うちゅわあゝん！！」

「ゴフッ！？」

金色の弾丸、改め母さん登場と共に俺の意識は場外した。

~~~~~5分後~~~~~

「あっ！！雄ちゃんやっとききたっ」

それが気絶させた張本人の台詞かね。

「んしょつと、あ？どうした薰子、タツ君」

真っ白じゃない。

「雄ちゃんが寝てる間に薰子ちゃんとタツ君に自己紹介しといたのよっ偉いでしょーっ」

そうだね、これから試合がある若者に歴史の真実を話して、某アニメのボクサーにしたんだもんね。

「あ、あれ雄ちゃん？」

ミシミシミシッ！！

「み、ミシッたよ！？ミシッた！！」

[illegible]

とりあえず薫子と卓が還ってくるまでクローしてやったぜ。

「あつ、雄二集合時間じゃない？」

178

間になっていた。

美佳は母さんに馴れたんだな・・・

「美佳達は先に行つててくれ着替えたらすぐに行く」

遅れるのはマズイしな。

「んで着替えは？」

「ハイツこれよ」

・・・やっぱり嘘泣きかよ。

渡された紙袋の中身を見える・・・

・・・。。。

「・・・母さん」

「なあーにー」

「マジ？」

「マジよ」

「俺私服でるわ」

「ダメよ」

「ダメよって」

「早く着替えないと脱がすわよー」

「止めなさいって」

「ウフフッ」

「えっ、母さん嘘だよな」

「成長期だしねえー、また体が大きくなったのよねえー」

「か、母さんストップ！！フリーズ！！ハウス！！」

「た・の・し・み」

「て、手をワキワキしながら近づくな！！や、やだ！！来るな！？来ないで！！いい、嫌だ！！いい、いやあああ~~~~！！！！？？」

## 第29話 涙が出ちゃう

~~~~~開会式~~~~~

~~~~~美佳視点~~~~~

ここは学園内にある武道館程の広さのスタジアム、ハッキリ言って大き過ぎる、流石は老婆ちゃんやり過ぎよね。

「それより！雄二遅すぎ！！」

開会式が終わって30分まだ雄二は来ていない。

「雄二（君）に何かあったのかな？」

「心配ですわ」

まさかタマモさんに・・・まさかね。

「どうする？試合始まるよ」

「ああー！！雄二いー早くー！！」

呼ばれるよー！！コールされちゃうよー！！

「おつまたせえー」

やっと来たのはタマモさんとタマモさんに引きずられながらくる女性・・・誰？

「間に合ったみたいねーよかったー」この子ったら我が儘で」

恥ずかしそうに顔を真っ赤にして俯く、チェックのミニスカートを穿き、見た事のあるポニーテールな女性。

・・・。。。

いやいやいや！！タマモさん！？

「た、タマモさんその人誰？」

ナイスよ亜弥！！

「何言つてんのよ亜弥ちゃん」私の愛する雄ちゃんじゃない」

・・・。。。

「「「「ええええー！！」「」「」

~~~~雄二視点~~~~

・・・恥ずかしっ！！くっそー！！なんで母さんのなんだよ！！

「ほ、本当に雄二なの？」

ええ、そうですよ、美佳さんの幼なじみの雄二ですけど、何か？

「ゆ、雄二君お化粧してる？」

ええ、母さんに妖術で縛り付けられて、無理矢理・・・

「じよ、女装ですか？」

薰子、そんなにジッとみないで。

「雄二・・・」

卓、目は逸らさないでくれ、めっちゃめっちゃ痛い。

ああ、いかん涙が・・・

（（（か、かわいい）））ポッ

・・・。。。

「そんなに引く事ないだろ！！」

皆俺をジッと見やがって！！

「「「はっ！」「」「」

「ああ！！もう着替える！！」

美佳達でさえこんなに引くんだ、こんな恰好で大勢の前に出れるか！！

「ダメよ雄ちゃん」

軽く片手で印を組む母さん。

「なあー！？こんな事に妖術使うな！！」

まだ俺は覚えてないのにずるいぞ！！

「「「ナイス！タマモさん！！」「」「」

貴様らあーそんなに俺を笑い者にしたいのか！！

「1ーAのグループうゝ試合よおゝ集まってえゝ」

若菜さん！！絶対に謀ってただろ！！

『気のせいよおゝ』

・・・俺の心の言葉を読むなあゝ！！

「行くわよ雄子♪」

「「行こう雄子<sup>ちゃん</sup>♪」」

「行きますわよ雄子さん♪」

「頑張つてねー雄子ちゃん♪」

名前の後ろに“子”を付けるな！！有りがち過ぎるわ！！

「さてと・・・」

卓、お前は友達だよな？

裏切り者じゃないよな？

俺を見捨てないよな？

「行こうか雄子さん」

皆敵だああああー！！！！！！

## 第29話 涙が出ちゃう（後書き）

すみませんでした！！一人暮らしの準備やらが忙しいせいで更新が遅れました！！なんか短いし・・・情けないわぁ（泣）

### 第30話 禁句♪

~~~~~ステージ~~~~~

試合開始5分前、初めての試合に俺は緊張感に襲われ・・・てはいなかった、何故なら。

「「「「ああ、雄二君（様）が女装」」」」

「「「「カワイイです」」」」

「か、神楽寺、お前なんか、かわ・・・ち、違う！！俺はそんなじゃねえー！！」

「「「「俺は男だああ~~~~！！！！」」」」

俺の女装を見たクラスメート達の訳のわからない叫びに包まれ、恥ずかしかったり、何故か背筋が寒くなったりしているせいで、まったく気が抜けないからだ。

「あつそつだ雄子おー♪」

「美佳！！雄子言つな！！」

今まで俺を助けようとする事なく、試合の為に体をほぐしていた美

佳が話しかけてきた。

「気にしないの、それより誰から行く？」

美佳がステージを挟んだ反対側を指差す。

「あっ」

いつの間にか対戦が揃っていて、見るからにイライラしていた。

「美佳！！GO！」

「嫌よ、まだ体ほぐれてないもん」

くそ、軟弱者め！！

「もういい！！薫子！！！」

「ドレスが動き難くて・・・」

動き易いんじゃないのか！！

「亜弥！！摩耶！！！」

「ハウ」呼び捨て」

ちよつと怖いぞ・・・

「卓！！！」

「あつ、僕は非戦闘員で補助が基本だから」

聞いてないわ!!

ああ！相手もキレかけてるじゃないか!!

「もういい!!俺が行く!!」

これ以上相手を怒らせるわけにはいかん!!

「」「」「頑張つてね」「」「」

黙れ!!

~~~~~ステージ~~~~~

俺がステージに上がると、既に対戦相手は仁王立ちをしながら俺を見据えていた。

「遅い!!」

「す、すみません」

対戦相手はかなりご立腹のようだ。

イヤイヤ俺もけっこう怒ってますよ、主に仲間のせいだがね・・・

「ちっ！後輩の癖に先輩待たせやがって」

「・・・すみません」

我慢、我慢。

「審判！！早く始めようぜ、こんなザコ！！即効で倒してやるよ！」

が、我慢、我慢、我慢。

「それでは、大変長らくお待たせ致しました！！グループ戦！！第1試合！！

『優勝は俺達の為にある！！』2ID代表！！チム、DESTINE！！』

だっ！ダサ！！運命！？ダサ！！

それに『優勝は俺達の為にある！！』有りがち過ぎ！！センス皆無！！

「ふっ、カッコイイだろ！！運命って意味だぜ！！」

うわぁー、痛いなぁーこの人、うん、絶対馬鹿だ・・・

『続きまして！！』雄ちゃん♪母さん応援してるからねえー♪勝つたらご褒美あげる♪by母さん』1A代表！！チム、

六尾の狐えゝ!!」

母あさゝゝん!!??

「カッコイじゃねえか!!」

馬鹿がいるよお・・・誰か代わってくれえ・・・

「はっ!!残念だったな!!俺が相手じゃご褒美貰えないな!!」

イヤイヤ、貰う気無いから。

「どうだ!!悔しいか!!」

ああ、なんかこの人イライラするな!!

「誰がこんな“女装趣味”野郎に負けるかよ!!」

ブチッ

コイツは、今俺に1番言つてはいけない言葉を発しました、皆さんお聞きしましたねえ、“女装趣味”つて。

「さあ!!来い!!男女野郎!!」

ブチブチッ！！

ああ、何年ぶりだろ、俺の何かがキレた、懐かしい音が聞こえた気がした。

第31話 すつきり ♪ ♪

~~~~~ 美佳視点 ~~~~~

「ウーン、雄二イライラしてるわ」

気持ちはわかるけど。

「「当然だよ（です）！！」」

亜弥、摩耶が頬をプクツと膨らませながら怒る。

「やはり私が行くべきでしたわ」

委員長殺気抑えなさいって。

皆雄二が馬鹿にされるのは嫌みたいね・・・私もだけど。

「雄二キレなきやいいけど」

「雄二キレたらどうなるの桜井さん？」

うつー！言っていいのかしら・・・

「え、えーと・・・」

「昔ね、美佳ちゃんをイジメた男子グループがいたのよ」

「た、タマモさん!!」

「「「それで?」「」」

興味があるのか委員長達が諭す。

「当時小学3年生だった雄ちゃんがキレて、6年生グループ10名を病院送りにしたのよ」しかも無傷」

「「「え!?!」「」」

そりゃ驚くわよね、目の前で見てたけど・・・かつこよかったあ（ポツ）

「むうゝ美佳だけずるい!!私も見たいよぉ!!」

「ボクも!!」

「私もですわ!!」

そう簡単にはキレイないわよ、雄二だし。

「ならよかったわね、今日は見れるわよ」

タマモさんいくらなんでもそう簡単には・・・

「誰がこんな“女装趣味”野郎に負けるかよ!!」

ブチッ

あつキレた。

「さあ！！来い！！男女野郎！！」

ブチブチッ！！

男女つて男っぽい女の人でしょ、馬鹿ね。

「「「「「やったあー」キレたあ」「「「「」

あんた達ある意味凄いわ・・・

「予定通りね」

・・・もしかして雄二に女装させたのってこのため？

「気のせいよ美佳ちゃん」

・・・・・・あれ？

タマモさん！！勝手にモノローグを読まないで下さい！！

「あつ、始まるわよ」

・・・雄二あんたのお母さん凄いわ。

「審判早く合図しろ、30%の力で倒してやるよこの“オカマ”野郎をな!!」

「・・・・・・・・」

ああ、雄二俯いちゃったよ・・・完ぺきキレちゃったかな？

『それでは、試合開始です!!』

俯いていた雄二がゆっくり顔を上げる。

その顔は、今まで見たことが無い程、満面の笑みで、だけど目は全く笑って無くて、そう・・・まるで。

「行く・・・!?!」

まるで、“お婆ちゃん”（若菜）の“お仕置き”の時の笑顔でした。

「ニッコッ」

その場にいたはずの雄二が消え・・・

一瞬で名前の無い相手の前に現れ・・・

「ぎゃあああああ~~~~~!!!!!!???.?」

会場全体に響き渡る叫びがこだましました。

~~~~~5分後~~~~~

「ふう〜」(ニコッ)

ステージに立っているのは、額の汗を拭いながらなにやらすっきりした笑顔な雄二と・・・

「ピクッピクッピクッ」

死にかけた魚のように痙攣する元人間。

「~~~~~」

静まり返った会場。

『しょ、勝者1ーA 神楽坂寺 雄二!!!』

アナウンサーの声で止まっていた時間が動き出す・・・

「~~~~~うおおお~~~~~!!!!!!」

会場が揺れる程の歓声が上がった。

「雄二すっかりしたみたいね・・・」

あんなに殴ればねえ！。

「雄二さん凛々しいですわ♪」

朱くなった頬を抑えながら笑う委員長。

「カッコよかったあー♪」

満足そうな双子。

なんかまた惚れ直したみたいね・・・

なんか会場内の生徒も雄二に見惚れているようだ・・・雄二は渡さないわよ！！

~~~~~雄二視点~~~~~

はあゝすっかりしたあゝ、なんか今まで貯まっていたストレス一気に解消した感じた♪

『あ、あれ？痙攣が止まって・・・たっ、担架！！救護班！？』

なんか慌ただしいけど・・・気のせいだよねえー♪

取り敢えず俺の初めての公式戦を勝利で飾った。

~~~~~おまけ~~~~~

このあと相手チームは棄権してきた・・・

何故だ？

~~~~~おまけ2~~~~~

俺の対戦相手は一週間後に病院で目を覚ましたらしい、ちなみに第一声は・・・

「俺・・・田舎帰る」

だ、そうだ・・・やり過ぎたかな？

### 第31話 すつきり♪♪（後書き）

やっと一人暮らしに慣れ、更新再開です！！これから更新頑張ります！！応援よろしくお願いします！！

### 第32話 英雄の教え

~~~~~控室~~~~~

初戦を終えた俺達（俺ただけだけど・・・）はスタジアムに設置されている控室に待機している。

「に、にしても雄二凄かったわねえー」

「久しぶりにキレたからねえっ」

「ゆ、雄二さん凛々しかったですわ」

「いやいや御恥ずかしいかぎりです」

「「ゆ、雄二（君）？」」

「どうしたアヤマヤ？」

（ニッコリ）

「「はうっ！」「」

さっきから皆俺の顔を見ては目を逸らす、失礼な奴らだ・・・

「雄二、取り敢えず笑うのやめてあげなよ」

「むっ、何でだタツくん？」

ストレスを解消できたこの喜び、笑顔で表現して何が悪い。

「「「「「・・・はあ」「」「」」」」」

何故ため息を付く皆よ。

「まあ、雄二だから仕方ないか・・・大変だね皆」

「「「「「・・・うん」「」「」」」」」

「・・・おい、なんか皆で俺の事を馬鹿にしてないか？」

「それより、次の対戦相手なんだけど・・・」

なんか諦めたような顔をした皆・・・俺なんかしたか？

「取り敢えず先鋒は・・・」

ガチャ！！

タツくんが次の試合の打ち合わせを始めようとしたその時、勢いよく開かれた控室のドア、正体は・・・

「雄ちゃ~~~~ん♪」

やはり奴だった。

抱きっ  
♪

「雄ちゃん♪雄ちゃん（ハート）♪♪」

「ぬあゝ！！離れる母さん！！くっ、苦しいって！！くっ、首絞まつ・・・！？」

「「「いいなあゝタマモさん・・・」「「「

「雄二、死ぬなよ・・・」

「んで、何しに来たんだ？」

何故か試合以外でかなりのダメージを受けた俺。

「ご褒美よ♪ご褒美♪約束したでしょ」

あれは約束と言うのか？

「まあ、なんかくれるって言うなら貰っけど」

“貰える物ならば取り敢えず貰っどけ、いらなかったら捨てりゃい

い”by 親父

ありがたい“英雄”の言葉である・・・

「つで、何くれるんだ？」

「うふふう♪私をア・ゲ・ル（はぁーと）♪」

ああ〜うん・・・まあ、有りがちだけど、母親が言う事じゃあ無いね、うん。

「『ダメエ〜』！」「『』」

ああ、美佳達も本気にしないの、いつもの冗談なんだから・・・多分。

まあ冗談でもやり過ぎだよな、母さん・・・（ニヤッ）

「わかったよ母さん、有り難くいただくよ」（ニコッ）

「『雄二（<sup>くん</sup>）さん（！？）』『』」

まあ、見ときなさい皆。

「ああ、雄ちゃん・・・やっと母さん、いえ、私を・・・」

頬を朱くしながら体をくねくねさせる母さん・・・

「・・・それでは・・・雄ちゃ~~~~ん」

母さんが勢いよく俺に飛び付こうと地を蹴り跳んだ。

「ニヤッ」

瞬間、隠し持っていた袋を取り出し・・・

バサッ!!

広げた袋に飛び込む母さん。

捕獲!!

「妖狐ゲットだぜ!!」

ゴメン一回だけ言ってみたかったんだ・・・

「ゆ、雄二?」

バスッ！！バスッ！！

「何だ美佳？」

バスッ！！バスッ！！

「な、何してんの？」

バスッ！！バスッ！！

「捕獲ですが・・・何か問題でも」

バスッ！！バスッ！！

「は、母親なんだよね？」

バスッ！！バスッ！！バスッ！！バスッ！！

「んゝたまにはお仕置きが必要になって思ってたさ」

バスッ！！バスッ！！バスッ！！バスッ！！

「お、お仕置き？」

バスッ！！バスッ！！・・・クォーン！！

「まあ、気にするな美佳、ほら皆も固まってないで、次の試合始めるぞ」

「うん（ハ、ハイ）」

クォーン！・・・クウーン・・・クウーン。

「・・・母さん、反省してる？」

恥ずかしがっちゃって雄ちゃん♪もおゝかわいい♪♪

「皆先に行つてくれ・・・」(ニコッ)

まったくこの“狐”は(笑)

「ゆ、雄二くんは？」

「ん？大丈夫だよ摩耶、今こそ親父の教えを実行する時なんだ」

「そ、そつかあゝ」

(教え？)

「じゃ、じゃあ先に行くね雄二」

「おう・・・あつ、美佳聞きたい事あるんだけど」

「な、何？」

「今日つてさ、何のゴミの日だっけ？」

「燃えるゴミの日・・・つて雄二！？」

「燃えるゴミの日かあ、まあ良く燃えるでしょ♪」

“貰える物ならば取り敢えず貰つとけ、いらなかつたら捨てりゃいい”

だよな親父♪

「「「「「ゆ、雄二いゝゝゝ!!?」」」」

### 第33話 賢さアップ♪

~~~~~会場~~~~~

“荷物”を無事に処理した俺は会場にいる美佳達に合流したんだが・  
。。。

「「「「「。。。。」」」」」

何この重たい空気はあゝ  
皆の顔真つ青じゃない、お通夜じゃないんだぞー

「ねえ雄二。。。」

顔を青くしながら卓が口を開いた。

「どした？」

やっと話しだしたか。。。これで空気が軽くなるかな？

「僕ねまだまだやりたい事が沢山あったんだ。。。」

「。。。はっ？」

何だよ急に。。。

「最近、まあ雄二が転校してくる前だけど、彼女が出来たんだ。。。」

」

「・・・ちよつとまてや」

惚気か？心配してやった俺に惚気話かい。

「だから雄二とも友達になれた、彼女がいるから雄二に嫉妬もしないしね」

「まったく話が見えないんだけど・・・」

何故俺に嫉妬？

「うわあゝん！！死ぬ前にもう一度会いたいよあゝん！！」

「うわっ！な、泣くなタツくん！！男の子でしょ！！・・・って死ぬってなんだ！？」

って何で皆泣いてんだよあゝん！？

「グスッ、雄二いゝ！！」

ドスッ！！

「グフッ！！あ、亜弥？」

不意打ちのえぐり込むようなタツクルはダメだって・・・

「グスッ、死ぬ前に・・・ヒック・・・“思い出”、ヒック、ちよ  
うだい・・・」

「“思い出”ってなんだ？って近い！！顔近いつて！？」

俺の腰から首に抱き着き直し顔を近づける、俺の視界の7割が亜弥で埋まる。

「す、ストロップ！！亜弥待ちなさい！！罰ゲームなんだろう！？冗談でもやり過ぎだつて！？」

「ヤダッ！！どうせ死ぬなら・・・止まれぬわあ！！？」

亜弥暴走！？

ち、近つ！！やばいつて！？

「美佳あ！摩耶あ！薫子お！泣いてないで亜弥止めろあ！！！」

「「「へっ？ああ！！！！」」」やっと気付いた（泣）

「「「抜け駆けダメエ！！！！亜弥<sup>さん</sup>（お姉ちゃん）！！私が先い！！！！」」」

「違っだろがあ！！！」

誰でもいいからこの人達止めてくれえ（泣）

「ハイハアゝイ、そこまでよあゝ」

若菜さん謀ったようなタイミングだけどナイス！！

よしっ！皆止まっ・・・浚に青くなった？

「試合始まるから静かにねえ」

そう言つて若菜さんは進行役に合図を送った。

『それでは！！見せ付けるような“いちやつき”が終わったところで！！』

誰がいちゃついていたよ・・・。

『ええ、雄二君に抱き着けないから嫉妬なんかしてませんよ・・・』

だから何で嫉妬するんだよ・・・

『それではお待ちかね！！本日！急遽！！実現いたしました！！スペシャルマッチ！！』

・・・はい？スペシャルマッチ？

『なんと！！六尾の狐の皆さんにはプロの退魔士と、浚にその助っ人と対戦していただきます！！2対6一斉に対戦です！！』

「待てや！！何が急遽だ！！明らかに仕組んでたろ！！」

『待ちません！！それに本当に急遽です！！別に校長兼理事長である桜井 若菜さんも関係ありません！！圧力なんか受けてません！！ええ！決して！！まったく！！ついでに、本来の対戦相手は棄権

しました!~!』

「若菜さん・・・」

「エヘッ  
♪」

やっぱり貴女ですか・・・圧力までかけて、可哀相に・・・

『もうあんなの真っ平です!!とつとと入場しろおー!!~!』

何した若菜さん・・・

「はぁ、行くか・・・」

どうせ決定事項だろうし・・・

つうーか・・・

「いい加減離れなさい」

「「「嫌あゝ」」」」

さつきから背中に摩耶、右肩に美佳、左肩に薰子、首に亜弥がしがみついている。流石にキツツイです。

「重っ

「「「「何？」「」「くはありません、全く、全然、まるで空気みたいな軽いです」

・・・乙女心つかあゝ

親父・・・俺はまた一つ賢くなれました。

### 第33話 賢さアップ♪（後書き）

更新が遅いぞ俺！！すみません遅くなりました、こんな俺を見捨てずに読んでくれてありがとうございます。感想の方もいただき感謝です！！これからも頑張るのでよろしくお願いします。

### 第34話 乙女、ズ？

~~~~~舞台上~~~~~

拝啓

あっちの世界にいる親父へ

お元気ですか？俺は・・・まあ毎日必死に生きてます。

最近転校して霊能力を学んでいます、母さんが妖怪？つてのも聞きました、“驚き”よりも“納得”の方が大きかったです・・・何故でしょうか・・・

まあ取り敢えず学校楽しんでます、男子どもとのリアル逆鬼ごっこ（1人が大勢に追い掛ける、武器自由、捕まったら“死”）も楽しいです、あっ！もちろん今のところ俺が全勝中だよ♪

それはそうと、最近は物騒な世の中です、拉致があつたり、なんか薬飲んで飛び降りたり、タ○フルだっけ、

あと、着物を着た校長兼理事長が片手に短刀、片手にバスッバスッて音のするゴミ袋を持って微笑みを浮かべて目の前にいたり・・・最後はちよつと違うつて？・・・気のせいだよ・・・

まあ、元気に生きてるから・・・生きるから！！

追伸

母さんの教育をちゃんとしなかった貴方を怨みます♪

「もういいのお〜?」

目の前の物騒な人が嬉しそうに微笑む。

「・・・はい」

取り敢えず親父に近状報告出来たからいいです。

「美佳ちゃん達はあ〜?」

「『嫌あ〜(泣)』」

「大丈夫よ〜いつもの雄ちゃんの訓練の5割り増しぐらいで行くからあ〜」

「『嫌あ〜(泣)!?』」

親父もうすぐ会えるかも・・・

バスッバスッ!!

「あらあらあ〜忘れてたわあ〜今出してあげるわねえ〜」

忘れてたって若菜さん・・・

真っ黒いゴミ袋から出て来たのは駄のなっていない・・・我が母です。

「はぁー、苦しかった〜雄ちゃんやり過ぎよ!~!」

密閉して捨てるのはやり過ぎだったかな・・・

「黒いゴミ袋は最近使わないの!!半透明か透明にしろ!~!」

「・・・はい」

反省した俺が馬鹿だったよ。

「ってわけで♪私たち二人が相手よ♪」

「協力して頑張つてねえ〜♪」

言いながら身構える二人、それと共に二人から溢れ出す凄まじい靈氣と妖気。

くっ!多分加減してくれてるんだろうけど・・・って!?

「タツく〜ん!!??」

横を見ると白目を剥きぶっ倒れるタツくんがいた。

「……」

「……返事が無い、ただの屍のようだ」

「雄二！！冗談にならないわよ！？」

「泡ふいてますわよ！？」

「「担架あー！！」」

「……ただいまパニック中少々お待ちください……」

タツくんを担架に乗せられ救護室に運ばれた、霊気と妖気に当てられただけだから直ぐに目覚めるとの事。

「って訳で再開です」

「誰に言ってるのよ雄二……」

いらんツツコミ入れないの美佳くん。

『それでは！！いきなり5対2になってしまいました、六尾の狐

弱き乙女、s!!  
 対・・・え？あつ！？失礼しました！！  
 六尾の狐 対か、か

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
○

・ ・ ・ ツッコミませんよ死にたくないもん。

「さて……主人公が仕事を放棄したところで……試合開始です……」

### 第34話 乙女、ズ? (後書き)

遅くなりました!! レポートって難しいんですねえ・・・次回は頑張ってみます!!

### 第35話 突貫です・・・

~~~~~試合中~~~~~

『試合開始です！！・・・二度も言わせんな！！』

繋ぎなんだからしかたがないだろ、我慢なさい。

「逝くわよぉ」

「死ぬ気で頑張ってね」

若菜さん字が違っし・・・母さん、シャレにならないから。

「ああ！！もう！！良くわよ皆！！」

「美佳さんやけっぱちだね、若いのに大変だね」

「雄二！！現実逃避しない！！」

知恵を持つ人間の、心を守る最大の防衛術なのに・・・

「雄二と亜弥は前衛！！」

「「ええ！！」」

危ないやん！！

「うつさい!! 黙れ!!」

「は、ハイツ!!」

怖えよ美佳、亜弥なんか涙目だぞ!!

「摩耶と薫子は後衛!!」

「は、ハイツ!!」

断れないよね・・・死にたくないもんね。

「私は両方やるからね!!」

「質問!!」

「受け付けません!! GO!!」

「ひでえ(ひどい)・・・」

とりあえず突貫です・・・

「行くぞ亜弥!!」

とりあえず、やれるだけやるぞ!!

「おつよ!!」

もつと女の子らしい掛け声は無いのかねえ・・・

「行くわよ〜ん」

「・・・」

「あれ？」

「・・・」

「雄二ツツコミは？」

「・・・行くぞ」

・・・いくらなんでもそりゃあ〜ないだろよ、全く似合わね。

「ツツコンでよお〜!!」

亜弥の叫びを無視し、二人に向かって走る。

「おりゃ!!」

「ツツコミ入れてもらえなかった怨みい〜!!」

俺は母さんに掌打を、亜弥は若菜さんに抜刀して切り・・・八つ当たり(?)をする・・・が。

スカッ

・・・むっ

「せいっ!!はっ!!てりゃ!!」

「えい!!やつ!!はりゃ!!」

「よっ♪はっ♪よいしょ♪」

「わぁ♪よぉ♪わぁ♪」

・・・。。

「「当たんねえ（ないい）~~~~!!」」

俺たちの攻撃を、何かやる気の無い掛け声とともに交わすお二方・・。

225

「当然よぉ♪亜耶ちゃんは剣筋が甘くてえ〜遅いしい〜」

「雄ちゃんは、遅いし、型は、成ってないし、駄目駄目よ♪」

・・・だそうです。

・・・くそっ!!

「雄二さん!亜耶さん!避けて!!」

ヒュッ!!ヒュッ!!

俺と亜耶の横すれすれで飛んでいった二本の弓矢、おそらく薫子が

放ったものだろう、人間には反応できないはずのスピード・・・な  
んだけどなあ。」

パシッ♪キンッ♪

「破魔矢ね」

らくらく素手でキャッチする母さん。

「危なかったわあ。」

まったく危なげなく持っていた短刀で弾く若菜さん。

・  
この人たちはまともな人間じゃないからなあ、片方は妖怪だし・

「うーん、スピードは普通だけどまだまだね、教科書道理の弓じゃ  
簡単な除霊にしか役に立たないわよ。」

「つく!!」

手厳しい母さんの言葉に薰子は顔をしかめる、そりゃ悔しいだろな  
あ。

・・・って見てないで攻撃しないと。

少し卑怯な気もしたが母さんの後ろから攻めることにする。

「せいっ!!」

不意打ちだ、これなら避けられないはず！！

・・・思ったんだが。

スカッ♪

・ 避けられましたよ、見えないところから攻撃したのに・・・さらに・・・

ドスン♪

「「痛っ！！」」

母さんの前にいた亜耶と激突してしまいました・・・。

「ゆ、雄二いゝこんなとこじゃ恥かしいよぉ」

はい？

状況確認！！

・ 目の前には顔を赤らめながらイヤイヤしている双子の片割れ。

・ 他の人が見たらおそろく・・・

・・・状況確認終了。

・・・俺押し倒してます？

・・・このパターンは死を招くような気がするぞ、うんうん。

状況を逸早く感ずいた俺はすぐに亜耶から離れようと思いましたよ、ええしましたとも。

「雄二・・・退きなさい」

間に合わなかったけどね（泣）

「・・・ハイ」

前と後ろから立ち上る濃厚な殺気が1、2、・・・5つ、何故？

「雄二、試合終わったら話があるから」

美佳さん、死の宣告に聞こえるのは勘違いでしょうか？

「それより、作戦変更よ」

変更ったって・・・

「作戦なんかあったか？」

『とりあえず突っ込めえー！！』作戦か？

「もともと実力が違い過ぎったから・・・霊力全開で短期勝負よ！  
」

うわー、俺を無視したうえに作戦あんまり変わってねえー

「摩耶は全力で委員長守って！！後話した通りにね！！」

話したって、俺達が弄ばれてた時になんか打ち合わせしてたんか？

「ハイッ！！」

「委員長！！皆に注意しながら撃って！！」

「・・・わかりましたわ」

「雄二！！妖力も全開ね！！」

「絶対いや

「何？」やりますです、ハイ」

観客がいるなかで耳出せつてか・・・

「行くわよ！！」

「明日から変な目で見られませんように」

心の底から神に祈りながら霊力と妖力を開放した。

### 第35話 突貫です・・・（後書き）

また遅くなってしまいました・・・駄目駄目ですわ。  
やっとパソコンの扱いに慣れ始めた今日この頃です、これで更新ペ  
ースあがったらなあゝ

### 第36話 初シリアス!?

~~~~~ 試合中 ~~~~~

なんか最近使えるようになった『妖気』だけど、まだまだ使いこなせていない・・・力の強弱がまったくつけらんないんだよなあ、全開か、かなりセーブするか、訓練ではずっと妖気を抑えた状態で扇術と妖術を練習している、まだ狐火と最近覚えた術の二つしか使えないけど・・・全力を出すのはこの前の除霊のとき以来になるんだな。

「ハッ!」

久々に妖気を全開にする、まあ妖気出すと・・・

(ピコピコ)

あれ も出るわけで・・・

「「「きゃあ~~~~~」かわい~~~~~」」」

これで俺は変な目で見られるんだろうなあ (泣)

さようなら俺の平凡・・・訂正、波乱万丈な学生生活 (涙)

・・・せつかく恥かいたんだ結果残してやる!!

「行くわよ!!」

美香の掛け声と共に全力で二人に突っ込む。

「へゝみんな結構靈力練れるのねゝ」

「でしょゝ豊作なのよゝ」

・・・余裕つすねゝ。

「ハアッ!!」

美香と亜弥は若菜さんに、俺は母さんにそれぞれ攻撃する・・・なんで俺が一人で母さんに突撃しなきゃいけないんだ？

「摩耶!!今よ!!」

「ハイッ!!」

ピシッ!!

美香の合図で結界を張る摩耶その結界はものすごく大きくて、舞台の4分の1程である・・・でもそれは自分を守るものではなくて、誰かを守るためでもなくて・・・

「な、なぜ？」

「あらあらゝ」

その結界は相手を閉じ込めるためのもので・・・

「なんで俺まで閉じ込めてんだよ～～！！??」

母さんと一緒に閉じ込められてしまったわけですわ・・・

「摩耶!!」

「だ、だって美香が・・・」(うるうる)

わかった、わかったから!!泣かなくていいから!!

「美香!!」

「しょうがないでしょ!!二人一緒になんか私たちが相手出来るわけないんだから!!プロだって逃げ出すわよ!!」

確かに、世界で5本の指に入る退魔士と伝説の妖怪・九尾の狐と一緒に相手出来るわけがない、軍隊だって逃げ出すだろうなあ

「だから分けるの!!それにいくら摩耶が限界まで霊力上げて作った結界だってタマモさん抑えられるわけ無いでしょ!!」

・・・なるほど、確かにそうだ。

「だから!!雄二!!がんばってタマモさん抑えなさい!!」

無茶をおっしゃる・・・

「え〜と、それは無

「じゃあ行くわよ！！亜弥！！」

「うんっ！！」り

俺の言葉を掻き消して、薫子の矢を余裕で弾いている若菜さんに再び向かう二人。

「まで・・・！！」（ゾクッ！！）

いつもみたいに叫ぼうとした瞬間後ろから殺気（？）みたいなのを感じたので反射的に身をかめたら・・・

ボッ！！

俺の真上を妖気の混じった炎が飛んでいき結界にぶつかった。

放ったのは言わずもがな・・・

「雄ちゃ〜ん、そろそろはじめよ〜」

おそらく飽きてきたんだろう、我が母です。

「いきなり危ないだろうが！！」

危つく昭和のギャグみたいにアフロになるとこだったろが！！

「アハハ」でもね雄ちゃん・・・」

「？」

いきなり雰囲気の変わる母さん。

「戦ってる最中に相手に背中見せるなんて・・・死にたいの？」

「!!!??」

さらに妖気を出し始める母さん、こんな母さんは見たことがない。

「戦いの厳しさ・・・教えてあげる」

「なっ!!」

母さんの姿がぶれたと思った瞬間いきなり俺の後ろに現れ背中に手を置く。

ドンッ!!

「つく!!」

かなりの衝撃を背中に受け俺は、反対側へ吹っ飛ばされる。

「くそっ!!」

どうにか受身を取り母さんの方を向く、が・・・

「!？」

「遅いわよ」

また俺の後ろに現れた。

（早っ!!）

ドンッ!!

「ガッ!!」

また元いた場所まで吹っ飛ばされる。

（くそ、このままじゃ遊ばれて終わっちまう・・・なんか作戦立てなきゃ・・・）

再び母さんの方を向くと、腰に手を当て、頬を膨らませながら怒っていた・・・

「あのねえー雄ちゃんまさか私に勝とうか思ってる?」

「そんなわけ無いだろ・・・」

仮にも、伝説の妖怪に勝てるわけが無い。

「だったら無駄に作戦なんか考えてないでかかって来なさい、母として雄ちゃんに“いろいろ”教えてあげるわねえ」

そうだよな、だったら・・・

「教えてもらいます、“母さんの戦い”をね」

「ええーもつと教えてあげるわよー」そうねえー夜の・・・イヤン」

「そんなクネクネしながらイヤンなんて言うな！！さっきの微妙にシリアスな雰囲気はどうした！？」

この小説始まって初のシリアス雰囲気がたったの数十行なんて・・・

「私にシリアスは似合わないの」それよりそろそろ再開ね」

「何か急にやる気がなくなっただけですけど・・・」

一気に緊張が解けちゃったぞ・・・

「むうー、じゃあ母さんに1撃入れられなかったら罰ゲームね」

・・・はい？

「罰ゲームって？」

めちやくちやいやな予感が・・・

「そうねえー・・・」(ニヤツ)

あ、あの笑い方はまずい！！絶対ろくなことじゃねえ！！

「な、何させる気だ？」



### 第36話 初シリ阿斯！？（後書き）

大変遅くなりました！！次回は早めに投稿出来ると思います。

### 第37話 試合の終わり

~~~~~ 試合中 ~~~~~

「くらえ!!」

母さんに向かって走りながら狐火を1つ作り打ち出す。

「たぁーっ」

気の抜ける声と共に余裕でそれをかわす、まあ予想道理なんだけどもね。

「せいっ!!」

かわされた瞬間一気に速度を上げ母さんに近づき、掌打をくりだす。

「よっ」

「っっ!!」

これも簡単に避けカウンターをしてくる、手加減しているのか大してダメージは無いんだけど・・・。

「やっぱ正面からは無理か・・・だったら!!」

今度は狐火を作れるだけ（3つが限界だけど・・・）作って再び突っ込む。

「へえゝ3つも作れるのゝ」

・・・馬鹿にされたのか？

3つの狐火を放つ、2つは母さんを挟むようにもう1つは正面になるように・・・

「行けっ！！」

「  
」

やっぱり軽く身をひねってかわそうとする母さん・・・でも俺はそれを狙ってたりして。

（今だ！！）

正面に放った狐火に一気に妖気をつぎ込む。

ボンッ！！

「！？」

制御しきれなくなった狐火は音と軽い閃光を放って爆発する！！

・・・と言ってもおもちゃ程度だけど・・・訓練中に開発、つつかミスって出来た技である。

目の前で閃光を受けちよつとひるんだ隙に残り2つを加速させ母さんに向ける、さらに俺も距離を詰める、多分少しの間目は見えないはずだ・・・。

「やるじゃない雄ちゃん・・・でも」

サツ「よっ」

サツ「てやつ」

目を瞑った状態の母さんはまるで見えてるかのように避けた・・・見えてんじゃねえだろなっくらい鮮やかに避けてくれました。

「まだまだ巧く作れてないみたいねえ」妖気だけで狐火の位置なればればれよ・・・雄ちゃん的位置もね」

避けた姿勢のまま顔だけをこちらに向けてくる。

「ちっ！！」

俺はまだ気配を断つなんてんて器用な真似は出来ない。

「はあ！！！」

母さんの腹を狙って掌打を放つ。

「あまいっ！！！」

それを半身を捻りながらかわし、カウンターをあわせてくる母さん。

（あ、あつぶねえ！！！）

カウンターをギリギリでしゃがんで避け、そのまま自分の影に手を

つつ込み扇子を取り出す。

これは新しく覚えた術『影監獄』と言って本当なら影を広げたりして対象者を影の中に閉じ込めたり出来る術なんだけど、狐火と同様に未熟だから影なんか広げられないし、生き物なんかも閉じ込めることが出来ない、だから倉庫として利用させてもらっている、結構便利なのだ。

取り出した扇子をそのまま母さんに向かって振り切る。

「つつ!？」

体をくの字に曲げる母さん。

(よしっ!!当たった!!)

この試合で初めて攻撃が当たり、母さんはふっとんで………  
ませんね、はい。

攻撃を受けた体制のままその場に立っていた。

「な、なんで？」

扇子の重みを乗せた攻撃だ、ダメージが無いはずは……。

『雄ちゃんやるわねえ』

ポンッ

「へっ?」

気の抜けるような音と共に目の前にいた母さんが消える、それと同じに後ろから母さんの気配が……。

「でも残念でした」

トンッ！！

（げ、幻……術……か……よ）

そのまま俺の目の前は真っ暗になった……。

### 第37話 試合の終わり（後書き）

先頭シーンはやっぱり苦手です・・・もっと勉強せねば・・・

### 第38話 最近マリモを貰いました！！

~~~~~救護室~~~~~

「っん・・・えつと此処どこだ？なんでベットの上？」

確か母さんと戦ってて・・・ああ幻術の母さんと戦ってたんだっけ・・・んで気絶させられたと・・・。

「道理で後頭部が痛いはずだ・・・」

腫れてないよな・・・。

「・・・惨敗かあ」

負けるって分かってたけど、悔しいよなあ〜いつから幻術掛けられてたかも分かんないし・・・つつか感触のある幻術ってなんだよ・・・。

「はあ〜・・・そついや皆はどうなったんだろ？」

ベットから起き上がり横を見ると・・・どつかのアニメでしか見れないような、信じられないほどでつかいたんこぶを頭に乗せ、ベットに倒れている3つの屍・・・何故か幸せそうな顔をしてるのが実に奇妙だ・・・。

「どんな負け方したんだこいつらは・・・」

取りあえずくでもない負け方だろうな・・・。

「はあゝ．．．取りあえず着替えるか．．．」

皆忘れてるかも知れないが女装したままだったりするんですよ、はい。

違和感がなくなってる自分がつっても怖いです．．．。

「えっと、着替えは．．．」

着替えを探すために部屋を見回す．．．。

「何だあれ？」

部屋の片隅に真つ黒な陰気を発する何か．．．もしかして．．．。

「えっと、卓か？」

正直声を掛けたくない雰囲気だったけど話を進めるためには仕方ない．．．。

「．．．雄．．．二．．．？」

「ヒッ!」

振り返ったタツくんの顔は死相があふれ出してきそうな感じのすごい顔だった。

「．．．は．．．はは．．．雄二いゝ．．．僕．．．ぼくゝ．．．  
うわあああん!!!」

「きゃああああ!!?? 来ないでえええええ!!!! 抱かないでええええ!!!!」

思わず女子みたいに叫んでしまうほど怖い顔でタツくんが抱きついてきた。

「雄二いゝゝゝ!! 雄二いゝゝゝ!!!!」

「イヤアアア!!?? 誰かあああ!!!! 助けてええええ!!!!」

「っん、んゝゝゝ 誰えゝゝゝ 煩いわね・・・って何してるのよー  
ー!!!!!!」

俺の叫びで目が覚めたのか美香が目を覚ました・・・。

「・・・もしかして雄二“そっちの”趣味!!??」

「いいから!! 助けてええええ!!!!」

「雄二!! 雄二いゝゝゝ!!!!」

ゝゝゝ 3分後ゝゝゝ

「ゆ、雄二さん!! そんな・・・そうですね・・・分かりましたわ!! 私がんばります!! 雄二さんの期待に応えて見せますわ!!」

「何勘違いしてんだこらあああ！……！！！」

「離れなさい！！タツくん！！……私の番よ！！……！！」

「雄二い……！！雄二い……！！うわあああん！！……！！」

……失礼しました。

……さらに3分後……

「雄二（君）！！……？……そんな特殊な趣味が（以下略）」

「燃やすぞこらあああ！！……！！！」

「委員長！！そつちお願い！！……！！」

「つく……！早くお退きなさい！！……場所を譲りなさい！！……！！」

「うわあああん！！……！！」

……おさまりましたあ……

「はあはあはあ・・・っでどうしたんだタツくん」

取りあえず皆を縛り上げ床に正座させました、皆ちよつと焦げてるのは無視します。

「「まだ何もしてなかったのにいゝゝ」」

黙らっしやい。

「あのね、今日の試合に僕の彼女が来ててね、僕が試合に出る前に気絶しちゃったのが許せなかったらしくて、『根性無し！！マリモ！！』って怒られちゃったんだよぉゝゝ」

最後のマリモってなんだよ・・・北海道の丸っこいやつじゃないよな？

「ああつまりふられたと・・・」

「ふられてない！！！！機嫌が悪くなっただけ！！！！今度会うまでにそのマリモ直しときなさい！！でないと・・・」って言うてたから、巻き返し可能！！」

だからマリモって何だよ・・・

「成る程、つまり三坂さんのマリモを治せばよろしいんですね」

か、薫子！！マリモが分かるのか！？突っ込むとこじゃ無いのか！？

「タツくん頑張りなさい！！もうすぐ夏休みだし努力でなんとかな

るわ!!」

み、美香まで!?

「ファイト!! タツくん!!」

アヤマヤまで・・・お、俺がおかしいのか・・・。

「「「「「ところで雄二(君)(さん)・・・」」」」」

「な、何だい皆・・・?」

もしかして俺が話しに付いていけないのがばれたか・・・。

「「「「「マリもって何のことだろ?」」」」」

「知るかあああああ!!!!」

今回の教訓：久しぶりの突っ込みはとても疲れます。

**第38話 最近マリモを貰いました！！（後書き）**

またまた遅くなりました、期末テスト地獄をやったことさ切り抜け3  
8話投稿です。

### 第39話 夏休みだっ!!

~~~~~ 神楽寺家 ~~~~~

~~~~~ リビング ~~~~~

あの母さんと若菜さんに惨敗した日から数日、と言うか、次の日から始まった学生にとつての鬼門、“期末テスト”を切り抜けサクラ学園は夏休みに突入しました。

正直に言つと、まったくテストの事を知らなかった俺は、テスト期間中、不眠不休で勉強して病院にお世話になったりしましたが・・・  
・まあ、いつものことです。

そんなわけで、夏休みに入り、長期休日をエンジョイしてい・・・

・

「ううゝ腕痛いよおゝ指痛いよおゝ眠いよおゝ」

「頑張りなさい摩耶!! 負けちゃ駄目よ!!」

「委員長おゝゝ!!? 此処教えてえゝゝ!!」

「またですか亜耶さん!! 私だってまだまだあるんですよ!!」

「なあゝゝゝ!!! 終わらねえゝゝゝ!!!」

「・・・皆、もうちょっと落ち着いたら?」

「『『『『落ち着けるかあ』』』』!!!!」『『『『

……ません!!ええまったく!!これっぽっちも!!

現在夏休み5日目思いつき宿題を片付けています、それと言つのも……

「がんばつてねえ」

この母が原因です、あの後救護室に現れた母が……

~~~~~回想中~~~~~

『つてわけで雄ちゃんは母さんに1撃も当てられなかったわけだから、約束道理罰ゲームね』

『まあ約束だから仕方ないけど……一体何させる気だ?』

絶対にろくでもないこと言われるんだろうな……。

『じゃあねえ』“私を後ろからギュツてしながら「好きだよタモ……愛してる……」つて耳元で呟いて、そのまま私に甘い口付けを……」

『『『『だめえ』』』』!!!!』『『『

『……頼む、それはやめてくれ』

息子に何を言ってるんだこの人、じゃないか……母は……

『むう、じゃあねえ……あつ雄ちゃんの夏休みを私に頂戴』

『『『『はいつ？』』』』

『つまりね、夏休み中の雄ちゃんの雄ちゃんの行動を私が決めるの』

つまり学生の一年のうち一番楽しみにしていると言っても過言ではないイベントを奪う気ですか!?

『い、いや、それもちよつと』

『さっきのと2択よつ』

ま、マジですか!?

『拒否は……』

『さあどつち』

有無は言わせ無いぜ坊や的な笑みはやめてください。

『さあ』

……。

鬼め!! (キツネよ)

・・・・・・・・・・。

『・・・・・・・・じゃあ』

~~~~~回想おしまい~~~~~

まあそんなわけで、夏休みを母に盗られまして・・・もう1つの方は人として選ばませんでした。  
ってなわけで、冒頭に繋がります。

「頑張つてねえ〜」

「つつか何で、夏休みの宿題を5日で終わらせなきゃなんないんだよ!」

そう、夏休み初日、母さんが『5日で宿題全部終わらせてねえ〜』  
なんて、子供にお使いを頼むように言ってくれまして、今日はその5日目、最終日です。

「それは秘密です」

また恐怖を煽るような改心の笑みで応えてくれましたよ、この母は・  
・

「なあ〜美佳たちは知ってるんだろ? 教えてくれよあ〜」

「駄目よ！！間に合わなくなるから黙ってやりなさい！！」

やっぱり教えてくれないか・・・。

それはそうと、何故、罰ゲームと関係ないはずの美佳たちが一緒に宿題を頑張っているかと言うと・・・。

~~~~~夏休み2日目~~~~~

『そうだ』

俺が頑張って数学をやっているなか、グウタラしていた母さんがいきなり声を上げた。

『・・・何させる気だ？』

もう宿題のせいで瀕死状態の俺は恐々聞く。

『どうせなら美香ちゃんたちも呼びましょう』

言うが早いかメールを打ち出す母さん。

『はい、送信つと』多分すぐに来るわよ』

ドンッドンッドンッ！！

雄二！！開けなさい！！

雄二君！！早く！！

ボクも行く～～！！

雄二さん！！逃がしませんよ！！

雄二 お土産だよ

『ほら来た』

『早っ！！』

～～～～回想おしまい～～～～

つてな感じで母さんの謎のメールで速攻で現れ、そのまま一緒に泊り込みで宿題している。

それはそうと、サクラ学園の宿題は量がすごい、霊能系の教科があるせいなんだけど・・・1日分美佳たちより進んでるから少しはましだけどさ・・・。

「お・・・終わった・・・」

現在午後10時、何とか最後の読書感想文を仕上げ俺は机に倒れた。

「「「え！？」「」」

「おめでと、雄二」

「流石は雄ちゃんね」

祝福してくれる2人は良いとして、美佳たちは何だ、そんなに俺が終わったのが気に食わんか・・・。

「お、終わっちゃったの？」

終わりましたよ、すべてね、5日間の成果だ！！悪いか！！

「ま、まずいですわ！！」

「残り2時間ですよね！！タマモさん！！」

「そつねえ」間に合うかしらねえ」

「ええーん！！間に合わないよー！！」

「ま、摩耶落ち着いて！！まだ2時間あるんだから！！」

・・・なんか余計に慌ただしくなったな。

「何でだタツくん？」

タツくんは期末テストが1位だったから宿題免除らしく、ずっと根性を付けるための本『ザ・男』をずっと読んでいた、本のカバーを見た瞬間めっちゃ引いた。

「・・・明日になればわかるから、今は聞かないで・・・」

わかった、わかったから、そんなに泣きそうな顔するな。

「あつ雄ちゃん、明日出かけるから、準備しといてねえ」

「何処行くんだ？」

「夏といえば！！な、場所よ」楽しみにしててね」

成る程、つまり5日で宿題終わらせた俺へのご褒美だな！！美佳たちはまだ終わってないからこのままだと旅行に連れて行ってもらえない、だから焦っている・・・謎は解けたぜ！！

「そつかあ」何処行くんだろなあ」

夏といえばだから・・・海？山？沖縄？ハワイ？・・・いいですねえ」ビバ・夏休み！！

（・・・幸せそうだけど、雄二？君は何回その期待に裏切られてきたんだい？何回泣かされてきたんだい？）

「ん？何か言ったかタツくん？ってなんで泣いてんだ？」

「いや何も言っていないし、泣いてもいないよ雄二・・・」

（雄二、君を救えない僕を許してくれ・・・ああ、涙が止まらないよ・・・）

妙に涙を流す人が多い神楽寺家の夜はこうして流れていく・・・。



## 第40話 朝ごはん♪

~~~~~ 神楽寺家 ~~~~~

「あつさだああ~~~~~!!!!」

ハイ、朝ですよ。

現在午前7時、神楽寺 雄二 珍しく早起きです。

「珍しいな、我が起こすより早く起きるなんて」

「久々の台詞だなクロ」

読者の皆さん忘れてないかな？雄二の目覚まし時計の九十九神“クロ”久々の出番です。

「それよりこんな朝早くにどうした？夏休みなんだろう？」

「おう!! 今日から旅行に行くからな♪楽しみで目が覚めちゃった」

「成る程な、最近お前は勉強ばかりだったから楽しんで来いよ」

「おう、っってお前は来ないのか？」

「ん？ああちよつとやることがあってな」

ただでさえ最近出番が少ないのに・・・。

「いらん心配してないで早く下に行け、お前の友達がさっきまで騒いでいたからな、早く行ってやれ」

「お前まで俺の心を読むスキルを身につけたか・・・まあいいや、留守番頼むな」

~~~~リビング~~~~

クロも変なスキル身につけたなあ〜と心配しながらリビングに向かうと・・・

「まに・・・あつた・・・」

「ボク・・・もう駄目・・・」

「おねえ・・・ちゃん・・・天井が・・・まわるよあ〜・・・」

「死にゆ・・・」

うつわあ〜何か悲惨な光景だ・・・薫子、にゅって何だ？

「間に合ったみたいねえ〜あ、お早う雄ちゃん」

「お早う母さん、朝っぱらから抱きつかないでくれれば、すばらしい朝だね」

「ふう〜雄ちゃんのいけずう〜」

母さんを引き剥がしつつ、固まって床に倒れている美佳たちに近づく。

結局時間内に終わらず、『出かけるまでに仕上げなさい』とおな  
さけで何とか間に合ったらしい。

「お〜い、大丈夫かあ〜？」

ゆっくりと皆の顔を覗き込んだ瞬間……。

ガシッ！！

「へっ？」

グイッ！！

「ぬわっ！？」

胸倉をつかまれ、引き倒された。

「いってえ〜なんだ・・・よ」

「雄二だあ〜」

「私ねえ頑張ったんだよあ〜」

「ボクもだよあ〜」

「にゅ」

「な、何かなあー皆？そ、そんな肉を前にした“タテガミがチャームポイントでキュートな肉球を持つ肉食獣”のような、鈍く輝いた瞳は？」

つか薫子、にゅって言うのは止めなさい君はそんな事言う子じゃ無いでしょー。

「「「「「ジュル」」」」」

「ヒッ！ーや、やだなあ良い子の皆、そ、そんなヨダレ垂らしてえーお、お兄さん怖くて泣いちゃうぞー」

ま、マズイ！ーこのままだと・・・食べられちゃう！？

「ハイハイ」そこまでねえ」

か、母さん！！物凄く珍しく助けてくれるんだね！！

「皆は朝ごはん何がいいかな？」

「そんな教育番組のお姉さんのような聞き方はやめ・・・」

母さんにツッコミもうとすると、再び肉食獣が復活した。

「「「「「これっ！！」」」」」

一斉に

指差す先に

俺がいる

うん、季語は無いが良い句だ。

・・・。

一応ヒトである青少年に向かって“これ”とはなんだ!?

「うーん、夕ごはんじゃないけど・・・いつか」

何がだつ!?

「な、泣くぞ!!本気で泣くぞ!!」

「「「「「いただきまあ」す」」「」「」」

「いやああああ!!?」

このままじゃ食べられちゃう!!誰か助けてえ!!  
もう駄目だ・・・そう思ったその時!!

ガチャ。

「おはよう、みんな・・・な」

ナイスタイミングだよタツくん!!

「お邪魔しました、邪魔してごめんなさい、出過ぎたまねをして申し訳ございませんでした、許して下さい、それでは引き続きお楽しみ下さいませ皆様、おやすみなさい皆さん」

ガチャ。

.....。

「「「「「いただきます」「」「」

「タツくうくくくん!!!!」

くくくしばくしてくくく

「って訳で、朝ごはんは食べそこねたけど・・・早速出かけるわよ」

ぎりぎり無事にすみしました。  
とりあえず荷物を持ち車に乗り込みました、席を決めるのに一悶着あったけど、俺が助手席つてことで決着がついた。

「んで、何処に行くんだ？」

隣でシートベルトを確認している母さんに問う。

「着けば分かるわよ」

当たり前な答えをありがとう。

「そして亜弥、その刀は何だ？」

「ボクの愛刀だよ」

そりゃ分かるって、切れ味まで知ってるし、よぉく切れるよね」

「じゃあ薫子、その嫌に長い袋の弓は何だ？」

「私の弓ですわよ」

だからそういう意味ではなくて。

「じゃあ美佳、何で摩耶以外武器を持っているのかな？」

「・・・着けば分かるわよ」

美佳、君も母さんと同じ事言っただね、“イエーイ”って皆でハ  
イタッチしないの！！俺だけ仲間外れみたいじゃないか！！

「まあ、目的地聞くのは諦めよう・・・それより聞きたいのは・・・  
母さん？」

「なぁーにぃー？」

「いつ車の免許取ったの？」

「「「「「え？」「」「」」」」

後ろでハイタッチしていた5人の動きが固まる。

「アハハ」無いわよそんなの」

。。。。。

「「「「「降ります！」「」「」「」」」」

「それじゃあレッツゴー」

「「「「「イヤア~~~~！！降りる~~~~！！降ろしてえ~~~~！！」」」」」

こうして、俺達のスリルなドライブが始まった・・・

#### 第40話 朝ごはん♪（後書き）

いつの間にか読者数が2万オーバー・・・びつくりです。これも皆様のお陰ですありがとうございます。これからも頑張るのでよろしくお願いします！！

#### 第41話 夏と言えばっ！

無免許な母さんが車を出発してから3時間、“生と死の狭間”・・・  
若干、死の世界が近かったような、父さんが見・・・嫌何でもない、  
そんなドライブをしながら何とか目的地・・・なのか？鳥居の前に  
停車した。

「到着！ いやあ、楽しかったね」

「・・・生きてるか？・・・」

「・・・死んじゃった」

「・・・ボク・・・出る」

「・・・私・・・もう・・・」

「・・・僕・・・ちょっと出ちゃった・・・」

「楽しかったです」

摩耶以外全滅です、エチケット袋大活躍、ヒーローです、皆も旅行  
の時はエチケット袋を忘れるなよ！！マナーだぞ！！

それでは・・・

「「「「「うっ！！？？」」」」」

くくくしばらく川のせせらぎをBGMにカバさん達の命を賭けた縄張り争いを想像していてください。くくく

「まったく、皆ダメねー」

「・・・無茶をおっしゃる」

母さんの運転、例えるならそう、

“デイズ二。ランドのスプラッシュマ。ンテンを、丸太を切った物をモチーフにした乗り物ではなく、切られてない丸太にそのまましがみつき滝壺ダイブだぜベイビー、”

だな、写真写りを気にする以前に普通の人間ならまずリバーズするだけじゃ済まないっての。

「それよりさ母さん」

「何、雄ちゃん？」

「此処つて何処？なんかこの鳥居見た事あるような・・・」

着いた時は気付かなかったけど、よく見てみるとなんか見覚えが・・・。

「あら？覚えて無いの？」

そんな意外いゝって顔されても。

「雄二、若ボケ？」

誤解です。

「そうなんですの雄二さん!？」

誤解ですってば。

「だからテストの点がボクみたいにあんまりだったんだね!！」

誤解ですよ。

「大丈夫です!! 若ハゲまではなってますから!!」

慰めてるの摩耶?

「・・・うっ!？」

まだ復活してなかったんかタツくんや。

「酷いねえー人の家を忘れるなんて」

そんなこと言われても・・・。

・・・。。。

あれ？

母さん↓美佳↓薫子↓亜弥↓摩耶↓卓↓だれ？

「誰だ！？・・・ってあれ？」

目の前に立っているのは、お歳を召されている女性、つまりお婆さんだ・・・つつうか。

「ば、祖母ちゃん？」

俺の祖母ちゃんでした・・・もちろん父方の。

「久しぶりだね雄二、タマモ」

「お久しぶりです♪今日からお世話になりますね♪」

「うむ、久しぶりに楽しめればいいね」

なんか世間話を始めた母さんと祖母ちゃん・・・俺はおいてきぼりかな？全く着いていけてませんよー。

「雄二、聞きたいんだけどさ」

「何だい美佳君？」

おいてきぼりにされた俺に話し掛けてくれるなんて、優しい子だね。  
」。

「自分のお祖母さんの家忘れてるってやっぱり若・・・」

「誤解だ、誤認だ、誤りだ、つうか、俺は祖母ちゃん家に来たのは二歳以来だ、覚えてる方が凄いわ」

まあ祖母ちゃんとは実家（転校する前に住んでた所）でちよくちよく会ってたけどさ。

「てか、祖母ちゃん家に何しに来たんだ？」

そろそろ教えてくれないかなあー？海だと思って持って来た浮きわが必要無いつてのは分かったんだけど。

「もう良いかしらね」

祖母ちゃんと話しが終わった母さんが何処からともなく大きめな巻物を取り出した。

「あ、タツくんそっち持って」

近くで突っ伏していたタツくんは巻物の端を持たせる。

うわっ、ひでえー体調悪いタツくんの手伝わせるなんて。タツくんも律儀に手伝わなくても良いのに・・・。

バツ！！

勢いよく開かれた巻物に書かれていたのは・・・

【輝ける第1回!!】

ええ、この前の試合でわかった、皆の弱点を克服するために私たちは考えました!! そうだっ!! 合宿しよう!! 夏だしね♪

イン 神楽寺 (カグラデラ) !!

by 若さ溢れる永遠の20代!! 若菜&タマモ♪】

長っ!! 題名長っ!!

ツッコミどころ満載過ぎてどこからツッコめばいいかわかんねえ!!

かなり混乱している俺を放置して母さんは嬉しそうに叫ぶ。

「夏と言えば!! 夏合宿よっ!!」

## 第41話 夏と言えばっ!! (後書き)

遅くなりました・・・なんかスランプらしき物につまずきました・・・  
・次回は早めに投稿いたします・・・しますよ!!

## 第42話 修行ツス!!

~~~~とある部屋~~~~

神楽寺に何故かある道場の一室で彼は激しく動き回っていた。

「違う!!もう一度最初から!!」

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・うい」

今俺は夏合宿なる物に参加している・・・それというもの・・・

~~~~神楽寺~~~~

「ってなわけで、修行してもらいます♪拒否な人は拳手♪」

「ハイ!!」

背筋を伸ばし、元気良く手を上げ拒否を訴える。

「いませんね、じゃ、この書類にサインと判子を・・・」

・・・分かってたけど、無視はきつついなあ・・・

いつものように諦め、母さんから手渡された書類に目を通す・・・

~~~~契約書~~~~

1・途中で修行を諦めない!!

2・試験官（御母さん）と私と若菜の命令は絶対である!!

3・夏合宿らしく修行後は楽しむ!!

4・死んでも文句は言わない!!

5・雄ちゃんは私の部屋で就寝する!!!!

6・時々これらに何かを追加するけど文句は言わない!!

これらを破ったものは・・・罰ゲームよっ

氏名

・・・とりあえず5番は消してつと・・・

「母さん・・・人が死ぬような修行なんか？」

「大丈夫よっ、閻魔さんに裁かれる前なら引き戻してあげるから」

・・・なんか聞いちゃいけない事聞いたような・・・

とりあえず死ななきやいいや・・・皆サインしてるし・・・

「ハイ♪契約成立ね♪っじゃ御母さんよろしく願いしますね♪」

「うむ、この間タマモにお前さんたちの試合を見せてもらった、その感想から話そうかね・・・」

な、何か緊張するな・・・

「まず、若菜の孫娘のお前さんかね」

「あ、あたしから？」

祖母ちゃんが指差したのは美佳。

「お前は霊力の扱いはなかなかだが、状況判断・戦術がまるでなっていない、仲間に指示を出すならもっと素早く、的確な指示をださんか」

「は、ハイ・・・」

うわっ、美佳めっちゃへこんでる。

「まだまだ言いたい日が暮れるから止めておく、それとこれだ・・・」

祖母ちゃん何処からともなく封筒を取り出し美香に渡す。

「?・・・ふわっ!?!」

封筒に入っていた手紙を読んだ瞬間真っ赤になってあわあわしだす美佳。

「どした美佳？」

「な、何でもない！！何でもないの！！！！」

まったく何でもないようには見えないけど・・・

「次は、弓の名家、小笠原家のお前さん」

「ハイ」

次は薰子、何か余裕みたいだな薰子・・・。

「お前さんは、矢の命中率以外はまったく駄目だね」

「なっ！？なぜです！！」

珍しく怒りの表情を見せる薰子。

「弓を持つものとして、決定的な弱点をまったく自覚せずに、克服しようもしないお前さんだからまったく駄目なんだよ」

「私に弱点などありません！！」

ど、どうしたんだ薰子？

「はぁ・・・まあ気づくところから修行かね、お前さんは・・・それから、これな」

激情している薰子にため息を吐きながら美佳と同じく封筒を渡す。

「なんですの・・・ぴゃっ！？」

さっきの怒りが一転して、何か暴れだした薰子。

「な、なあどうしたんだ？」

「ななななな、何でもありませんわっ！！」

顔を真っ赤にしながら後ずさる薰子。

「さて次は、雪村流剣術の次期当主」

「ふあい！！」

完璧にびびってるぞ亜弥・・・ってか、亜弥って雪村家の次期当主だったんか。

「お前さんは、身体能力はそこそこだが、剣術がまだまだ荒い、剣筋も甘い、せつかくのスピードを生かせていない」

「うう～～」

ちよっぴり涙目になりながらうめく亜弥。

「もつと剣術を学べ・・・」

やっぱり亜弥にも渡される封筒。

「うう～～・・・はにゃ！？」

封筒を開けるとやっぱりあわてる亜弥・・・

「何が書いて・・・」

「き、聞かないでえ〜〜〜!!!!」

絶叫しながら暴れだす亜弥・・・本当に何が書いてあるんだ？

「次は、世にも珍しい結界術士」

「ひゃい!!」

「お前さんは、もっと考えろ、工夫しろ、それに守ってばかりじゃ勝てないよ」

「???」

摩耶はよく分からないのか首をかしげている。

「まあしっかり考えな・・・」

そして渡される謎の封筒・・・

「ふにゃ!」

奇声を上げてわたわたしだす摩耶・・・

「なあ・・・」

「いやあああああ!!!!!!」

まだ何も言っていないのに逃げるなんて・・・軽くへこむぞ。

「後は、雄二あんだだね」

（ゴクッ）

一体俺にはどんな評価が下るのか・・・

「ど素人のお前には言う事はない、とにかく死ぬ気で修行しな」

・・・なんか一番ひどい評価のようです、泣きそうです

「さて、早速修行を始めようかね」

落ち込んでいる俺を無視して修行を開始しようとする祖母ちゃん・  
・ってあれ？

「祖母ちゃん俺に封筒は？」

そういえば俺だけ封筒を貰ってない、ものすごく中身が気になるし・  
・

「お前には無し、それにあればあの子達のやる気を向上させるためのものだしね」

そう言って美佳達に目を向け一言。

「お前たち修行結果が一番良かったものに、その紙の内容を全て実現させてやるっ」

それを聞いた瞬間、暴れていた美佳達の動きが止まり、視線が祖母ちゃんへ、そして俺に向く。

「……………」

俺は思った・・・食われると。

この世に産まれてから何度も感じたこの感覚・・・間違いない。  
ハイキングで行った森の中で野生の熊や狼、何故かいたキツネからは逃げ延びてきたが・・・これは駄目だ、逃げられない。  
俺は捕食される・・・。

「……………」

死刑宣告に聞こえたのは幻聴だろうか？

「安心しろ雄二」

「・・・祖母ちゃん」

震える俺の頭を昔みたいに撫でてくれる、ものすごく安心できた。

「お前があの子達の誰かに勝てたら、助けてやる」

昔から変わらない優しい笑顔でそう言った。

・・・無茶を言いますな、あれに勝てと。

「……………」

俺には味方はいないらしい・・・だったら。

「・・・頑張ります」

「うむ、頑張れ」

祖母ちゃんは俺を撫でながら微笑んでいた、昔みたいに・・・

こうして俺達の夏合宿は始まった。

~~~~~おまけ~~~~~

さつきから話に入っていなかったタツくんはと言つと・・・

「・・・殺してくだつ、うつ!?・・・」

「あらあらあゝ?」

いまだに車酔いに苦しんでいるところを、遅れてやった来た若菜さんに発見された。

**第42話 修行ツス!! (後書き)**

更新遅れて申し訳ありません。

次回の更新はおそらく早くなるかと・・・。

### 第43話 訓練始めました・・・

「じゃあ早速始めようかね」

皆の気合が入ったところで修行を開始しようとする祖母ちゃん、実に楽しそうだ。

ちなみにタツくんは日陰で若菜さんに看病されている。

「まずは、この夏合宿のタイムスケジュールを言おうかね」

・朝5時、起床・・・

「意義あり!!」

スケジュールを読み上げ始めた祖母ちゃんに速攻で意義を申し立てる。

「朝早すぎだろ!!起きれないって!!」

俺の人生の中でも重要な“癒しタイム”を減らすなんて許さん!!てか、俺はそんなに朝早く起きたことはないぞ、今回はクロがないんだ絶対に起きられん。

「大丈夫、起きられる、起きるさ、起きなきゃ・・・ね?」

「・・・ね?って何だよ祖母ちゃん!!」

起きなきゃどうなるんだよ!!

「・・・続けるよ」

そ、そんな露骨に目を逸らさないでくれ！！何が起こるんだ！？

混乱する俺を尻目に話を再開する祖母ちゃん、後ろでやたらと気合の入ったジャンケンを始める女性達・・・取り合えず朝はちゃんと起きれるようにタツくんに頼んでおこうと決めた。

午前

・朝5時、起床

・6時、掃除

・7時、朝食

・8時～11時、午前訓練開始（基礎訓練）

・12時、昼食

午後

・1時～6時、個人訓練

・6時、自由時間

・7時、夕飯

・8時、自由時間（いつ寝ても良い）

「以上、質問は受け付けないからね、それじゃ基礎訓練はじめるよ！！」

祖母ちゃんはうれしそうに開始を宣言した。

~~~~~基礎訓練~~~~~

訓練が始まって20分、祖母ちゃん・母さん・若菜さんの指導の下、俺達は今、基礎訓練なる地獄を体験していた・・・。

「はい、後10分」

「雄ちゃんもつと出力上げないと危ないわよ」

「懐かしいわあこの訓練はあ」

母さん達の手にはお札がある、いつ投げてくるか分からないお札を防ぐ訓練だ、いつもの俺達なら結構余裕な速度で飛んでくるお札だが・・・

「1、10分・・・は・・・むり・・・」

「け、結構、きつつい、わねえ」

「ま、まだ、まだ・・・余裕、ですわ・・・」

「ひゃー！ば、ボクだけ、お札・・・多いよっ！！」

「だ、大丈夫？皆？」

摩耶以外の皆は結構きつみみたいだ・・・俺はもう限界です・・・。

庭に一列に並び靈気を放出する、此処までいい、俺も20分ぐらいなら出し続けるのも大丈夫・・・うん、多分。

でも、問題は俺達の頭上それぞれに浮かんでいる最近じゃお笑い番組でもあまり見なくなったタライである。

このタライは頭上に向けて靈気を放出させることによって浮かばせている、これは一点に靈気を集中させる練習で、攻撃力や防御力を

上げたり、何か術を使うときなどに必要で、霊能力者にとっての基礎であって、とても重要な訓練なのだ・・・特に“防御力”これは俺にとっては普段を死なずに生活するためにとっても大事な訓練なのだ！！

でも、まあ所詮俺は素人、全く出来ません、一定量の霊気をタライがバランスを崩さないように放出する、でも霊気を出しすぎるとすぐに疲れる、逆に霊気が少なすぎるとタライが頭に落ちてくる、かなり集中しなくちゃ地味に痛い思いをすることになる。

さらに母さん達が投げるお札も意識してなきゃならない・・・初心者な俺には『これってイジメ？』って聞きたくなるぐらいだ・・・もう何回もタライが頭に当たってるし、お札も霊気を結構込めているらしく、当たると結構痛い。

「はい、終了もういいよ」

祖母ちゃんの場合で俺達は崩れ落ちた。

「・・・死・・・ん・・・だ・・・」

「き、きつつかったぁー！！」

「も、もう、終わり、ですの？まだ、まだ・・・余裕、でし、たのに」

「う、ううゝヒリヒリするゝ」

「皆ぼろぼろだよお、大丈夫？」

結果は、タライ+お札で、摩耶ちゃんは無傷、美佳は2+6回、薫子は5+5回、亜弥は3+12回、雄二は30+50回・・・。

ぶつちぎりで俺の優勝です・・・結構へこむなあ、いや頭がじゃないぞ。

「・・・てか・・・摩耶・・・すごいな・・・無傷って・・・」

「私の得意分野ですから♪」

まだまだ余裕そうな摩耶は嬉しそうに微笑んだ。

麻耶の専門は防御で、靈気を一点に集中させて結界を作るらしく、これくらい出来ないとお話にならないそうだ・・・。

「・・・後で教えてくれ・・・」

「は、ハイ！！喜んで！！手取り足取り教えますっ！！・・・生徒と教師・・・テヘツ♪」

最後の方は聞こえなかったけど麻耶は嬉しそうに承諾してくれた、何か笑顔が怖かったけど・・・気のせいかな？

靈気を集中させるのは苦手だけど防御力は上げたい、夏休みが明けたらまたあの逆鬼ごっこが始まる・・・少しでも生存率を上げねば・・・。

「ハイ、じゃあ次行くわよ♪」

「・・・待ってくださいお母様・・・まだ、動けません」

まだ休憩を始めてから5分も経ってませんが・・・殺す気ですか？

「美佳たちもまだダウンして・・・」

「駄目よ摩耶！！そんな羨ま・・・駄目！！」

「そうですわ！！抜け駆け禁止ですわ！！」

「ボクも混ぜないと駄目だからね！！」

「ふえゝ楽しみですゝ」

さっきまでバテバテだったはずの美佳たちは元気良く言い争っていた・・・これが女子高生パワーか・・・。

「とても元気ね」それに雄ちゃん動けないなら母さんが介抱して・・・」

「次行きましょうお母様！！」

動かない体に鞭をうち起き上がる、これは根性が付きそうです、良かったなタツくん・・・。

何故か溢れてくる涙を拭いながら、俺は短い休憩に別れを告げた。

#### 第43話 訓練始めました・・・（後書き）

またまた遅くなりました・・・こんな私の小説を見捨てずにいてくれて感謝いたします。

やっと修行始まりましたよ、やっと書きたいことが書けそうですw  
では次の話も頑張りますのでよろしく願いします。

#### 第44話 修行場を貴女達に・・・

~~~~~お昼~~~~~

午前中の基礎訓練も終わり俺達は今昼食を摂っている。

「・・・疲れすぎて、食欲無い・・・」

「ゆ、雄二大丈夫？」

「真っ白ですわね・・・」

あの子の一部の訓練を紹介しよう・・・

・靈気を感じるとかわいらしい動物が団体さんで襲ってくる森の中でハイキング。（靈力を完璧に無くして気配を消す訓練）

・幻術によって6人に増えた母さんからひたすら逃げ続ける鬼ごっこ、迎撃可。（靈気による身体能力強化の訓練）

・etc・etc

思い出ただけで体が震える、これから毎日あれが続くのか・・・。

ちなみにお昼は夏らしく“そうめん”、好きなんだけど食べる気になれない。

「チュルチュル」

「きゃー！！もう！！麺汁飛ばさないでよお姉ちゃん！！」

「むっ！そうめんはチュルチュルいいながら食べなきゃ美味しくないのー！！」

双子は美味しそうに食しているらしい、元気だなあ。

「あっ！？美佳さん！！ピンクのは私のですわー！！」

「早い者勝ちよー！！」

ああー美佳に薰子？子供っぽい喧嘩は止みなさいね？

「雄二、食べないと午後がつらくなるよ」

おい、タツくん復活が遅すぎやしないか？

「僕はああいうの必要ないからね」

「・・・どう言う事だ？」

そっいえばタツくんの霊能を見たことが無い。

「秘密、後で教えるね」

男のウインク見てもドキドキせんぞ、とりあえず、後で詳しく聞かせてもらっぞ・・・。

「はあ、少し喰うか・・・」

タツくんの言うとおり、ちょっとでも腹に入れないと午後がやばい・  
・食べやすいそうめんよかった。

「あつ、雄二ピンクのそうめんあげるわ・・はい、あ〜ん」

美佳が薫子から守っていたピンクそうめんを俺に食べさせようとしてくる。

「食べさせてもらわなきゃならないほど、俺は疲れきってないぞ」

「いいから、いいから、あ〜ん」

話を聞けって・・・。

「だからいい、駄目ですわ!」

断ろうとする俺を遮り薫子が叫ぶ・・・そんなにピンクが食べたかったのか薫子・・・。

「じゃあボクが食べさせてあげる!」

「私も!」

だから、そこまで疲れてないから、人の話を聞いてください、お願いします。

修行の疲れを感じさせないほど、いつも道理争い始める女性メンバー・・・タフネスめつ。

そんなこんなで昼食は終わった。

~~~~~午後スタート~~~~~

昼食を終えた俺達は、祖母ちゃんの後が続いてやたらと広い日本家屋内を歩いている、何でも個人訓練のために各自の“修練場”を用意したらしい・・・祖母ちゃんって金持ちだったんだな、初めて知った。

祖母ちゃんがある部屋の前で立ち止まる。

「着いたよ、此処は薰子の修練場だね」

障子が開かれるとそこには・・・

「・・・狛犬？」

神社なんかにいる石で出来た狛犬がいた、デザインはちょっとカワイらしいけど。

「どうして狛犬？」

薰子が呟く、そりゃ部屋のと真ん中に狛犬がそうなるよな・・・。

「ワン!」

「~~~~~動いた!」~~~~~

まるで生きているかのように動き俺達に向かってくる

「この子は九十九神でね、此処の守護をしてくれているのさ」

うむ、凛々しい感じで強そうだ、家のクロとは大違いだ。

「それで、何で私の修練場に狛犬が？」

もつともな質問だけど、なんとなく先が読めるな・・・。

「この子が薫子の先生だよ」

「はいっ！！??」

やっぱりか・・・

「なっ！何で私が狛犬なんかになんかに教えを請わなければいけませんの！？」

目を吊り上げて怒鳴る薫子、プライド高いもんなあ薫子は。

「不満かえ？」

「もちろんです！！」

「じゃあ・・・そうだね、お前さんの弓でこの子に一発でも当てたら考え直してあげるかね」

祖母ちゃんは笑いながらそう言った・・・絶対なんかあるな。

「分かりましたわ、その狛犬が壊れても知りませんから」

弓を準備して、戦闘態勢に入る薫子……。

「それじゃあ、初め！」

ヒュッ！！

薫子が開始と同時に狛犬に弓を放つ、結構本気で放ったと思う……が。

ヒョイ

狛犬は軽く体をずらすだけで避けて見せた……そして、チラッと薫子を見て。

「……ふあゝゝう」

アクビを一発……そして。

ブチッ！！

最近良く聞く何かが切れる音。

「狛犬に……馬鹿に……」

ぶつぶつ何かを呟き始める薫子……こゝこええゝ・

「もういいかね、次行くよ」

「ええ！？薫子は！？」

「もう大丈夫、勝手に始めるだろうしね」

祖母ちゃんはすでに修練場を出て廊下を歩き出している。

「どういう・・・」

「許しません！！許しませんわっ！！狛犬が、私を！！！！」

ものすごい靈気を纏いながら、再び弓を構える薫子・・・そして。

「死んで詫びなさい！！！！！！」

狛犬に突っ込んで行った。

「早く付いてきな」

「「「「は、はぁーい」「」「」

とりあえず薫子の修行が始まったらしい、内容は『狛犬と一緒に』

~~~~~双子の修練場~~~~~

「ここは雪広姉妹だね」

薫子の修練場より狭く、狛犬もない普通の部屋だった。

「摩耶、あんたは自分でやらなきゃいけない事を探しなさい」

「はい？」

「自分に足りないことをしっかりと修行すること」

「え？え？」

それだけ言つと、まだわけが分かっていない摩耶から今度は亜弥に向かい。

「亜弥はコレで修行」

「なに？本？・・・ふえ？」

ハイ、と渡された本を見て固まる亜弥。

美佳と一緒に本を覗き込むと・・・。

「・・・はい？」

予想外、ていうか、なんていうか・・・ねえ？  
そりゃ亜弥だつてショックだろうよ。

「・・・祖母ちゃん、何コレ？」

「あたしは読書好きだからねえー」

「答えになつてねえ！！てか何だよこの“雪広流剣術奥義書”べ、

べつにあんたの為に教えてあげるんじゃないんだからね！……」  
「ってのは！？」

流石の亜弥だって固まるっての！！何このツンデレ！！

「だから奥義書、まあそういうわけだから、2人ともがんばんなよ」  
まだ混乱している摩耶と、未だにショックで固まっている亜弥を置いて部屋を出て行く祖母ちゃん。

なんとなく満足そうなのは気のせいだよな？壊れていく若者を見るのが楽しい訳じゃないよな？

#### 第44話 修行場を貴女達に・・・（後書き）

やっと投稿です・・・。

キーボードの半分が急に使えなくなるといふハプニングのせいで2週間もパソコンが使えませんでした・・・。

## 第45話 首は急所です

亜弥&摩耶をあのまま放置してしまった事を心配しつつも次の修行場に移ることになった、でもそれより……。

「なあ、祖母ちゃん」

「ん、なんだい？」

「あの奥義書やつぱり気になるんだけど……」

「私も……普通は奥義書なんて他の家の人には渡さないですよね」

題名のせいで本物とは思えないんだけど……ねえ？  
もし本物だったらかなり問題があるでしょうよ。

祖母ちゃんは少し躊躇しながら答えた。

「……先代の雪村家当主がくれたんだよ、この間ね……」

「「はあ？」」

なんで祖母ちゃんにとか、いろいろ疑問がありすぎて変な声を出してしまった。

「何でも『孫娘達を鍛えていただくのに必要かと思ひまして』とか言っただけに直に渡しに来たんだよ」

「鍛えていただくって言っても、家の大事な奥義書をそんな簡単に」

他家に渡しますか？」

俺は知らないが奥義書は身内でも簡単に見せるものではないらしく、奥義を受け継ぐ者にしか見せてはいけないらしい。

「・・・『孫娘達が嫁ぐのか、それとも“婿殿”になるのかは分かりませんが、そのうち身内になるのですから家族も同然です』」  
「そうだよ」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

時が止まった・・・

「次行こう」

聞かなかった事にした。

~~~~~美佳の修行場~~~~~

亜弥・摩耶の修行場から数歩、祖母ちゃんの足が止まった。

「ここは美「美佳ちゃん遅いわよぉ」」

祖母ちゃんの台詞を遮り、部屋から元気良く飛び出してきたのは、見た目は若いが実は年齢・・・

「若菜さあくん、“ちょーつぶ”」

僕は夢を見ました・・・

目の前にいたはずの人が一瞬で消えて・・・

次の瞬間、目の前に人の手らしきものが現れて・・・

それはきれいに光っていて・・・

バチバチって・・・

『メキヨツ!!』

鋭い痛みと共に自分の首筋から良く分からない音が聞こえて視界が真っ白に・・・

悲しいお知らせ

<雄二が喋れなくなつたので一旦モノローグを美佳に切り替えます>  
力の抜けるような間延びしたような喋り方とは裏腹に、かなり鋭い

チヨップが雄二の首筋に突き刺さる

『メキヨッ！』　つというなんか、こう、生ものが潰れ・・・コホン、えっと変な音（？）と共に雄二が壁に向かって吹っ飛んだ・・・。

その右手には信じられ無い程に靈氣が込められていて、溢れた靈氣が放電しているかのように“バチバチッ！！”と音を立てていた。

ドス～～ン！！！！

「もおゝ雄ちゃんたらあゝ今失礼なこと考えてたでしょゝ」

お祖母ちゃんは壁に力なくもたれ掛かり気を失っている（死んでないよね？）雄二に向かって頬を膨らませながら怒りをあらわにしている・・・。。それにしても雄二・・・。

「なんて無謀な登場説明してるのよ・・・」

自殺志願者でも考えないわよ・・・。

「まあ、大丈夫かね・・・雄二だし」

雄二のお祖母ちゃんも冷たいわね・・・。

「じゃあ美佳は若菜と一緒に個人訓練に加えて集団戦術を勉強するように、的確な指示が出来なきゃ意味が無いからね、それじゃ雄二行くよ」

私に簡単な修行内容を言い渡し、気絶している雄二（死んでる？）を片手に引きずりながら離れていった・・・大丈夫かな雄二・・・。

「厳しく逝くわよぉ〜美佳ちゃん♪」

「う、うん・・・」

わ、私も大丈夫かな？

~~~~雄二の修行場~~~~

「・・・・・・・・」

「さて、治療は終わったんだけど・・・・・・・・まだ起きないのかい  
雄二は・・・・・・・・」

しょうがないねっと言いながら何故か隣にあった桶（イン・冷たい  
井戸水）を掴み、その中身を・・・・。

ばっしゃーん！！

「！？冷たっ！！何事！？」

雄二にぶっ掛けた。

「やっと起きたね雄二、あの程度の攻撃で気を失うんじゃないよ、  
全く・・・」

「・・・死ななかったことを褒めていただきたいんですが・・・駄  
目ですか・・・」

なんかシャイニングしている手を見た後の記憶が無いんだけど、いつの間にか道場みたいなところに寝かされていた、俺の修行場かな？って、その前に、俺気絶する前になんか嫌な音聞いた気がしたんだけど・・・

首筋をさすつてみる・・・なんともない・・・よな？

・・・

聞かない方が良いよね？うんうん」

「それじゃ早速修行しようかね」

俺に教えるのが楽しみなのか、なんとなくうきうきしてる感じの祖母ちゃん、頭がまだくらくらするけど仕方ない。

「んで、俺は何するんだ？」

出来れば基礎で気絶しないで痛くないのがいいんだけど・・・。

「うむ、雄二には・・・っとその前にお前の扇子見せておくれ」

「ん、ハイ」

影に入れておいた最近やつと重たさに慣れてきた扇子を渡す。  
この人なら大丈夫だろうけど一応注意しとくか。

「祖母ちゃんコレ少し「ん、軽いね」・・・そうでしょ」

きつとコレが普通なんだ、俺が知らなかっただけでコレが普通なんだ、コレが普通……。

「まさか雄二が扇子を使うようになるなんてねー、運命かそれとも・  
・まあいいかね」

自分に自己暗示を掛けていると、祖母ちゃんが少し離れたところで俺の扇子を見ながら呟いた。

「それじゃ」

バンツ！！

祖母ちゃんは扇子の重さを物ともせず一気に扇子を広げる。

「いいかい雄二、良つく見ておきな」

開いた扇子で口元をゆっくり隠し目を閉じる。

「神楽寺家に代々伝わる“舞”……をね」

## 第45話 首は急所です（後書き）

・・・言い訳はしません。ごめんなさい。生きててごめんなさい。

## 第46話 癒されています♪

くどこか解るかな？>

かつぽおくん♪

「ハイ正解はお風呂です」

「雄二、何言ってるの？」

現在、修行も終わり、タツくんとお風呂の真っ最中です……。何故、かなりの見せ場シーンであるはずのお風呂シーンが女湯ではなく男湯かは……。知らん！！

ゴホン、失礼しました、えっと……

祖母ちゃんの家のお風呂は温泉旅館のような結構広めな岩風呂で、眺めも最高、天井が吹き抜けになっているから星と月が良く見えま  
す、さらに天然の温泉、何でも“霊泉”とか言う、地脈に流れる自  
然の霊気を多く含む温泉が沸いているらしい。

なんでも、霊力の回復を促すとか、傷の直りが早くなるとか、いろ  
いろな効能があるらしい、実際温泉に入ってるだけで今日の疲れや  
痛みがウソのように楽になっていくから驚きだ。

「んっ、疲れたねえ♪雄二いっ」

「んゝ、ホントになあゝ」

日ごろの疲れも癒える・・・ああゝ溶けそうだあゝ

「んゝ、そういえば今日はタツくん何してたんだあゝ？あんまり見  
なかつたしいゝ」

「んゝ、タマモさんの幻術とにらめっこだよあゝ」

「そつかあゝ」

・・・

「雄二いゝお風呂が気持ちいのは解るけどさあゝもうちょっと突っ  
込んで聞かなきゃじゃないかなあゝ？」

「んゝ？そかなあゝ」

「そだよあゝ」

・・・

「はあゝ気持ちいなあゝ」

「そだねえゝ」

「「はあゝ」」

「……話が進まないのので10分後……」

「んゝ、雄二先上がるね」

ぬくぬくし過ぎたのか全身が真っ赤になってフラフラしているタツくん。

「んゝ、俺はもうチヨイ入ってくわ」

「うん、のぼせないようにね」

がらがら〜ピシャン

「ん、んゝゝゝ」

タツくんが出て行き一人となったお湯に浸かりゆっくりと体を伸ばす。

「きれいな月だねえ」

都会と違って田舎で山の上なので月が奇麗に見える。

「……………凄かったな」

月を見ながら修行中のことを思い出す。

~~~~~

「神楽寺家に代々伝わる“舞”・・・をね」

たんっ・・・

俺が疑問の言葉を吐く前に、祖母ちゃんは“舞”始めた。

惹きつけられた・・・

言葉を紡げなかった・・・

祖母ちゃんが床を蹴る・・・

それ程大きい音でもなかったのに部屋全体に響くような音・・・

大きく、だけど風がれる様な、体全体を使い、ゆっくりとした動きで回り、舞う・・・

それなりに重いはずの扇子を左右に持ち替えたり、指先ひとつで開き、閉じる、手の中で舞わす・・・

俺が一度も見たこともないような真剣な表情で・・・

どこか神秘的な雰囲気も感じた・・・

すう、ピタッ

「ふう」

数分舞っていたらどうか、祖母ちゃんの動きが止まり深く息を吐き出した。

「久々だからこんなもんかね」

その言葉と共に俺の意識が戻ってきた、どうやらかなり見入っていたようだ。

「・・・お、おおー！！祖母ちゃんすっげえー！！」

「ん、ありがと、気に入ったかい？」

拍手しながら祖母ちゃんを褒めると軽い感じで返してきた。

「おう！！何か、かなり見入っちゃったよ！！」

「そうかいそうかい」

軽く興奮した感じの俺の言葉に嬉しそうに頷く祖母ちゃん。

「んじゃ始めようか」

この言葉で思い出した。

俺は今、修行するためにここにいると言っ事を。

そして、疑問。

何故、祖母ちゃんは今舞を俺に見せたのか。

そつえば初めに『神楽寺家に代々伝わる“舞”・・・をね』とか  
言ってたな・・・。

・・・・・・・・・・

そして、簡単に導き出せる答え。

今のを覚えろって事ですか・・・・・・・・。。

「まずは足運びから教えるよ」

マジっすか・・・。

~~~~~

~~~~~男湯~~~~~

「はあゝ、まあカッコ良かったし、良いんだけどさ・・・」

祖母ちゃんが言うにはコレが修行にもなるっていうかコレしか教え  
ないとか言っし。

「バカみたいに難しいんですけど・・・」

足の運び方は若菜さんから教わっていた扇術と似ていたので何とかなりそうだけど難しいものは難しい。

「はあゝ、まあ頑張るしかないんだけどね」

修行後の約束が怖いから……。

今こんなことを考えてもしょうがない、今は温泉で疲れを癒そう……。

ガサガサッ

「うん？」

温泉脇の茂みから物音が聞こえた、野生の動物でもいるのかな？

（シー！！雄二にばれちゃうでしょ！！）

（そんな事言われましても！！狭いから仕方ないじゃないですか！！）

（ジュル♪さあゝ温泉から上がって雄二君！！）

（そうだそうだ♪って、ま、摩耶ヨダレ拭きなよ！！）

（雄ちゃんたらまた成長して♪）

（あらあらあゝ）

………なんか聞こえる。

野生の動物は普通話さない・・・。

気のせいだよな・・・・・・・・。。

（纏め上げた髪から少し見えるうなじが最高♪ってお祖母ちゃん何そのカメラはっ!?!）

（うふふう♪新型のデジカメよぉ♪高かったんだからぁ♪）

（は、犯罪はまずいのでは!?!）

（あ、後でコピーお願いします!!）

（ま、摩耶ヨダレ拭いて!!）

（もうちょっと大胸筋鍛えさせるべきかしら・・・）

・・・・・・・・俺に憩いの場所は無いのかな、あれ涙が・・・。

第46話 癒されてます♪（後書き）

ども、シユンです。

何故男湯なんだっ！？女湯を出せっ！！など苦情大募集です！！

## 第47話 古すぎでないか？

~~~~~寝室~~~~~

風呂場で覗き魔を発見してしまったあの後、俺の絶叫を聞きつけた祖母ちゃんの手によつて覗き魔達は全員捕獲され、皆そろつて説教されていた、いわく『普通逆だろ？』、『騒がしいから覗くのではなく一緒に入れ、もしくはばれずに覗け』など・・・何故か覗きするなどは言わない祖母ちゃんに不満を言つと『覗かれるのが嫌ならトラップなり何なりして防ぐ、修行にもなる』つと実にスパルタな返事をいただいた・・・風呂嫌いになりそうだよお・・・

「あつがり〜」

「またですか!？」

「むう〜!! もう5回連続で一抜けですよー!!」

「タマモさん強すぎです・・・」

「あらあらあ〜」

「・・・・・・」

そして、現在は夜11:00、風呂と夕飯を済ませ自由時間の真っ最中だ、疲れていたのださつさと寝ようとした時『合宿といえば夜更かしよ!』つと俺とタツくんの部屋に母さん&若菜さん&美佳

達降臨、それから約2時間遊びまくっている。  
ちなみに今はランプの王道ババ抜きの中だ。

「・・・なあ皆、そろそろ寝ないか？」

慣れない修行のせいで俺の体力はほぼ0、早く寝て明日に備えたいのだ。

「なっ！！ゆ、雄ちゃん寝るだなんて！！そんな、まだ早いわよ・・・それにみんなでなんてそんなこと・・・は、恥ずかしい！！」

「何を想像したか知らないけど、俺は母さんの頭の方が恥ずかしいぞ」

こら、お前らも顔を赤くするな、タツくん苦笑いしてないで止めろ。

「むうゝ寝るって、雄ちゃんまだ11時じゃない、最近の小学生の低学年だってもっと起きてるわよ」

「最近の小学生睡眠事情なんか知らないって・・・」

「・・・寝たら明日の朝、後悔することになるわよ」

「次は何しよつか！！」

眠気は飛んだけど、本気で怖かった・・・。

「ってなわけで、次は“王様ゲーム”よっ！！」

「古っ!？」

ものすごく久しぶりに聞いたぞ……。

「母さん流石にそれは……なあ、みんな……な？」

美佳達が俺を見ている、若菜さんが笑っている……あ、またか、またこのパターンか？

「反対です!!」

「」「」「賛成です!!」「」「」

「じゃあクジはあるから時計回りに引いていってね」

こうして俺達は王様ゲームを始めた……。

ちなみに俺の反対票は多数決によって理不尽にも打ち砕かれた。

鼻息荒くクジを引いていく皆、タツくんは苦笑いしながらも引いている……そして回ってくる順番、神様ほんとにいるなら助けてください何でもしますから。

『本当に何でもしますか?』

……ごめんなさいウソです。

『……………』

俺が幻聴との会話から帰ってくると皆が穴が開くんじゃないかとい  
うくらい俺の手の中に隠れているクジを凝視していた・・・そんな  
に俺を陥れるのが楽しいのか・・・。

「王様だゝれだっ!!」

緊張の一瞬・・・頼むぞ神様!!

「やった!!私だっ!!」

美佳だった・・・。

神様あなたは鬼ですか・・・。

『いいえ、神ですよ?』

・・・まあまだ諦めるのは早い、俺の番号が呼ばれなきゃいいん  
だ。

俺の番号は“4”縁起がわるいなあ・・・。

「ううゝやっぱりそっちだったかー」

「美佳いいなあゝ」

「うゝん・・・」

美佳が俺の手に隠されているクジを見ながら口を開く・・・ってや  
っぱり俺を狙うんだな美佳・・・だが確立は7分の1そう簡単に当  
たるものか、そうだろ神様!!

「・・・じゃあ4番の人が王様に抱きつく」

「マジっすかぁー!!」

神様やっぱりあんたは鬼だ!!

『だから神様ですってば!!』

「ほら雄二早くしなさいよ!!」

少し顔を紅くしながら催促する美佳・・・恥ずかしいならそんなこと言わなきゃいいのに。

「う・・・で、でもさ」

皆の目があるのに抱きつくのは抵抗が・・・

「王様の命令は絶対よ」

「うう・・・」

「早く!!」

「解ったよ・・・」

隣に座っていた美佳と向かい合う・・・。

・・・しかし、なんだ、こうやって改まって美佳の顔を見てみると、その、結構可愛いんだよな美佳って、子供のときは気にしてなかった

たけど・・・って何考えてんだ俺はっ！！

「い、いくぞ」

「う、うん」

紅くなるな！！可愛いじゃないか！！ああ！！何も考えるな俺っ！！

“ぎゅっ”

「あっ・・・」

思考をごまかすように一気に美佳に抱きつく、そのせいか美佳が少し体を硬くしている。

「「「いいな、美佳」」」

「美佳ちゃん、よかったわねえ」

「雄ちゃん顔が真っ赤で可愛いわよ」

うつさいぞ外野！！ああ！！恥い！！

「も、もういいか美佳？」

抱きつかれた時より緊張が解けたよう美佳に話しかける。

「ん・・・もうちょっと、このままがいい・・・かな」

「そ、そか」

そろそろ俺もその男の子なんで、女の子のやわらかい感触とかその他もろもろのせいで理性がやばいんですが……。

「ん、ありがと雄二」

リラックスしきったような美佳が俺から離れる。

「い、いやいや！！気にせずともよいぞ！！」

美佳の暖かさが消えて少し残念なような……理性がもって良かったような……。

「……ううゝ次こそわぁー！！」「」

「良い写真がとれたわぁゝ」

「むうゝ何かラブな香りが香ったわよ雄ちゃん……母さん以外になんて許しませんよ！！」

うっさいぞ外野！！

「ハイってなわけで2回目」

「まだやるんか……」

とか言いながらまたクジを引いてしまっ俺って……。

まあ、さっき俺が指定されたわけだし当分俺は当たらないだろ。

「王様だゝれだ!!」

一斉にクジを覗き込む皆・・・そして声上がる。

「私ですわ!!」

薫子ですか・・・多分平気だろ・・・ね？

「では・・・」

って俺狙いかよ!!そんなに俺の手の中を見ようとしても無駄だぞ!!透けないぞ俺の手は!!“3”なんて見えないはずだぞ!!

「それでは3番の人が・・・今度私の“家”で会食をすると言つ事でいいですわ」

「俺かよ・・・ってそれだけでいいのか薫子？」

思っていたよりもずっと簡単に優しい命令に少し面食らってしまった。

「ええいいですわ」

（何たくらんでるのかしら薫子ったら・・・）

（・・・怪しすぎ）

（家でって強調してましたよね・・・）

( ( ( . . . . . ) ) )

(そんな露骨な手は使ってこないと思うけど、一応警戒しておきましよう)

( (了解! ! ) )

「そんなんでいいなら俺としてはかなりありがたいんだけど」

「ええかまいませんわ」やく、ではなく命令ですわね」( . . . 両親に会っていただくチャンス、親公認にしていただければ私に有利ですわ」)

「面白くないわねえーもっと大胆な命令でも良かったのにー」

つまらなそうな顔するな母さん、俺に珍しく害のない罰ゲームだったんだぞ。

「まあいいか、それとも、私が大胆なお手本を見せてあげようかしら . . . ではでは」次」

ものすごく嫌な言葉が聞こえたんですが、気のせいでしょうか？

その後、皆1回ずつ(俺を除く)王様になり、なぜか皆俺に命令をしていた。

例で言うと . . .

・タツくん↓僕の彼女をとらない。

良く分からなかったが、ものすごく怖かったのでしつかりと了承しておいた。

・摩耶↓今度2人つきりでデート。

前に美佳と出かけていたのがうらやましかったらしい、可愛いじゃないか。

・若菜さん↓今度誰かの写真を撮るのを手伝う。

・・・・ものすごく嫌な予感がする。

・母さん↓保留

・・・・死んでしまうかもしれない。

そしてラスト一回戦・・・

「やった！！ボクだよ！！」

亜弥か・・・まあ無理難題な事は言わないだろうから大丈夫だろう、ちなみに当たらないだろうけど俺の番号を言っておこう“2”だ。

そして、亜弥は俺の手に隠されたクジを凝視しながら口を開く・・・  
やっぱり俺狙いかよ、いいもん、此処まできたら何でもやってやるもん。

「じゃあ2番の人が、ボクを膝の上に乗せて、後ろからボクをぎゅってして、耳元で“好きだ”って優しく呟くで」

「・・・ちよつと待て！！」

「むう、それも良かったかも・・・」

「なっ！？亜弥さんそれはずるいですわ！！」

「お、お姉ちゃん大胆すぎ・・・」

何でもやるとは言ったがコレはいかんだろ神様！！

『いいのではないですか？』

返事するな俺の妄想！！

「王様の命令は絶対！！」

「うう・・・」

嬉しそうに笑いながら俺の膝に乗ってくる亜弥。

「ほ、他の案はないのか？」

「ディープキス」

「ぶっ！！ま、前のでいいです」

いつの間にこんな過激な子になったんだ亜弥・・・。

「い、いくぞ亜弥」

「ゆ、ゆっくりね？」

“ぎゅっ”

「うん・・・」

亜弥を後ろから抱きしめる、さつき風呂に入っただからか、ショートカットの髪から良い匂いがした・・・って何か最近匂いを敏感に感じるような・・・お、俺はそんな変態じゃねえ！！

「ん・・・雄二、次・・・」

「はあ・・・」

そんなに俺で遊ぶのが楽しいのかねえ・・・

くそぉー！こうなったら俺の本気（演技）を見せてやる！！

雰囲気を変えて・・・大人っぽく・・・。

「亜弥」

亜弥の耳元に口を近づけ、出来るだけ艶のある声を出す・・・。

「え？な、なに？」

「俺だけの可愛い亜弥・・・」

「ちょ！え？雄二！？」

はっはっはっ、うろたえていますな・・・でも、まだまだ此処からだ！！

「誰にも・・・渡さない」

「ふぁ！？あ、あの？」

抱きつく力をちよつと強くする。

「お前は俺だけの者だ」

「ふえ！？え？ええ！？」

耳を真つ赤にしながら面白いくらいうるたえる亜弥、ちよつと楽しくなってきたがそろそろフィニッシュだな。

「あ、あのお、雄二い？も、もうボク駄目に・・・」

「好きだ亜弥・・・愛してる」

“ちゅっ”

最後に軽く耳にキスをする・・・

ふりをする流石にそこまではしない、音だけだ。

・・・しかし、終わってみて気づく・・・やりすぎたか？

視線を前に移すと皆が俺と亜弥をみてボーっとしている・・・いか

んやりすぎで引かれたか。

「えっと、その・・・」

どうにかしてこの空気を変えねば・・・ってあれ？  
後ろからで亜弥の顔は見えないが明らかに、異様なまでに紅くなっている亜弥に気づいた。

「あ、亜弥？」

ボシュン！！

漫画みたいに湯気頭から出て俺の腕の中でぐったりとしてしまった。  
・・・って

「むきゅ〜」

「あ、亜弥あ〜〜！！！！！！」

「雄二かつこよかった・・・ってあ、亜弥！？しっかりして！！」

「きゃ〜！！？亜弥さん！？お気を確かに！！」

「お、お姉ちゃん！！は、鼻血が！？」

「はあ〜雄二やりすぎ」

「むういつの間にあんなテクニックを・・・」

「良い動画がとれたわあ〜」

こうして修行1日目は終わりを告げ・・・

タマ

「雄ちゃん!!」

雄

「ハイ!!」

タマ

「いくらなんでもやりすぎよっ!!」

雄

「ごめんなさい・・・流石にやりすぎました」

タマ

「まったく、母さんにもしたことないのに・・・」

雄

「は？」

タマ

「母さんにもしなさい!!布団で!!」

雄

「・・・は？」

美・薫・魔

「タマモさん!!それは許しません!!」「」

タマ

「いいのよ!!親子愛なのよ!!」

美・薫・魔

「駄目です!!」「」

タマ・美・薫・魔

「がるる!!!!」「」

まだ夜は長そうです・・・。

## 第47話 古すぎでないか？（後書き）

近状報告、一応死んでません、PCは1度死にましたが・・・なかなか更新が出来ません、話の出来も悪いですし・・・どうにからないでしょうか・・・（泣）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0947b/>

---

キツネ憑きっきり！？

2010年10月8日23時08分発行